

2021年度(令和3年度)

# 沖縄県NIE実践報告書



沖縄県NIE推進協議会

**【日本新聞協会指定N I E 実践校】**

久米島町立久米島小学校	1
西原町立坂田小学校	7
石垣市立富野小学校	11
糸満市立糸満中学校	15
西原町立西原中学校	25
沖縄県立本部高等学校	29

**【沖縄県N I E 推進協議会指定実践校】**

名護市立久辺小学校	43
西原町立西原南小学校	49
名護市立小中一貫教育校緑風学園	53
沖縄市立コザ中学校	59
沖縄県立具志川高等学校	65
沖縄県立辺土名高等学校	69
ヒューマンキャンパス高等学校	79
沖縄県立桜野特別支援学校	85

【資料1】 沖縄県N I E 推進協議会組織と運動の経過 . . . . . 89

【資料2】 これまでの実践指定校 . . . . . 99

【資料3】 全国大会・N I E 実践フォーラムの新聞記事 . . . . . 103

## ごあいさつ



沖縄県N I E推進協議会会長  
仲村 守和

本協議会は平成12年（2000年）に設立され今年で22年目を迎えました。本会は「教育界と新聞界が協力し、新聞教材の開発、活用の研究と普及を通して、児童生徒の情報活用能力の育成を図ること」を目的として、N I E（Newspaper in Education）活動を推進してきました。協議会の事務局を沖縄タイムス社、琉球新報社が担い、合計10社の新聞社が加盟し、2018年度からは幹事に県立学校教育課、義務教育課の指導主事が加わるなど協議会組織の強化が図られています。

昨今、N I E活動への県民の理解が深まって参りました。これもひとえに県教育委員会はじめ市町村教育委員会や学校、P T A、地域そして加盟各社等のご理解とご協力によるものであります。現在、多くの学校で新聞をツールとした教育実践が推進されています。11月の糸満中学校（大城直之校長）における「沖縄県N I E実践フォーラム」は糸満市教育委員会（幸地政行教育長）の全面的な協力のもとコロナ感染対策に万全を期し開催されました。また、西原町教育委員会（新島悟教育長）は町として実践校を引き受けられ町内の3校を実践校に指定されました。このように市町村教育委員会がN I E活動の教育的意義を確認しバックアップされていることに敬意と感謝を表します。こうした市町村教育委員会の取り組みが参考事例として本県のN I E活動の活性化や普及・発展に大いに寄与するものと期待しております。

さて、新学習要領における児童生徒の「主体的、対話的で深い学び」を育成するにはN I E活動が有効であると考えます。つまり児童生徒が「主体的、能動的」に参加する授業づくりには「生きた教材」といわれる「新聞」を授業に積極的に取り入れることが肝要かと思えます。新学習指導要領では「新聞活用」が全ての校種で指導すべき内容として位置づけられていることから、不断の研究が求められています。

この度、本年度の実践指定校の実践概要が本冊子にまとめられました。実践指定校では、コロナ禍で授業研究が困難の中、積極的に授業実践を継続しました。そこには「新聞」を有効に活用し、楽しく有意義な授業の構築が図られ、子どもたちの生き生きとした活動の様子が報告されています。N I E活動を通して、児童生徒の思考力や判断力、表現力等が培われていることは、N I Eの教育的手法が児童生徒の課題解決能力の育成に大きな効果があることを実証しています。つまり、児童生徒が「自ら学び、考えて行動する『生きる力』の育成」が期待できます。

本報告書のねらいは指定校の実践を各学校で共有化することにあります。学習教材としての新聞活用や新聞づくりなどN I Eの教育的手法を取り入れ、児童生徒の読解力や表現力、社会性等を培っていく授業実践のためにもN I E活動を各学校で推進していただきたいと思えます。

結びに、N I E活動の実践事例としての本報告書が県内の学校や家庭、地域社会など多くの機関で活用され本県の有為な人材育成の一助になれば幸甚に存じます。



久米島町立久米島小学校  
教諭 菅間 伸也

## 1 はじめに

本校は、人口8000人弱の久米島町内にあり、在籍児童数は60名前後の小規模校である。また、各学年もクラス替えは無く、転出入を除けば、入学から卒業まで同じメンバーで6年間を過ごす。そのため、阿吽の呼吸のような、すべてを語らずともなんとなく伝えたいことが理解できるような環境にあり、他者に自分の意図を適切に伝えるという経験が乏しく、場面に応じた言葉を知らないため、伝えたいけれどうまく伝えられないという児童が少なくない。国語科の単元テストや県の諸調査においても、文章の読み取りの問題等において正答率が低く、本校の課題となっている。そのため、今年度は、「新聞を活用した社会的事象への関心を高め、学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする」ことをテーマに取り組んだ。また、今年度より日本新聞協会指定NIE実践校となった。以下は6学年を中心に新聞を活用した教育実践に取り組んだ内容になる。

## 2 校内研究との関わり

今年度の本校の校内研究は、「互いに伝え合い、深い学びを追求する児童の育成～各教科・領域における、よりよく考え“自分力”を発揮できる実践を通して～」である。副題にある“自分力”とは、「自己の持てる力を遺憾なく発揮する力」と定義づけた。児童が“自分力”を発揮できる姿とは、自分の考えを表出したり、得意を生かして本領を発揮したり、また、苦手なことにも挑戦し、わからないことは素直に認め学ぼうとする主体的な姿である。<sup>1</sup>

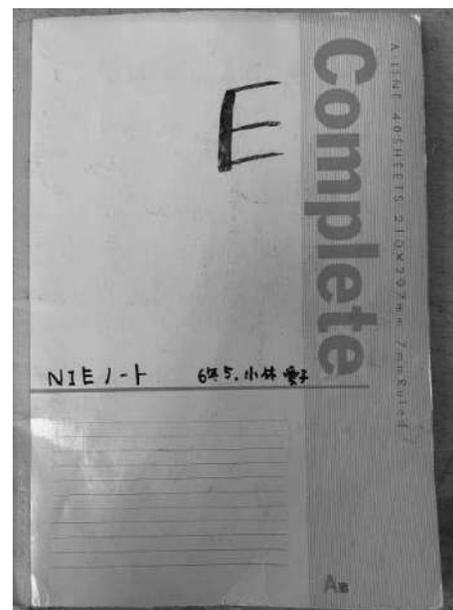
そこで、自分たちが学習したことを表出したり、日頃の授業と日常生活を関連付けながら学習を進め、深い学びを追求するために、新聞を活用した実践に取り組んだ。

## 3 本校の取り組み

### (1) NIEノートの活用

#### ①個人のNIEノート

NIEノートとは、児童自身が興味のある新聞記事を選び、その記事に対する感想や疑問点などを整理するノートである。本学級は、日頃の授業や県到達度調査などの諸調査等からも、主語と述語の関係性や〇〇字以内に要約することが苦手な児童が多く在籍していることがわかった。そのため、NIEノートでは、「5W1Hをはっきりさせる。」「②その記事に対する自分の考えや疑問に思ったこ



<sup>1</sup> 久米島町立久米島小学校 令和3年度校内研究概要より

とを書く」ということを行ってきた。

まず、「①5W1Hをはっきりさせる」については記事の中から、誰が(who)、何を(what)、いつ(when)、どこで(where)、なぜ(why)、どのように(how)、を見つけ、記事を要約させた。それを踏まえて「②その記事に対する自分の考えや疑問に思ったことを書く」ことで、社会的事象を批判的に考察し、情報過多な現代社会の中においても、多面的・多角的に考察する力が養われると考える。



## ②NIEリレーノート

NIEリレーノートとは、1冊のNIEノートをリレー形式で回し、前日の友達のページを読んで、それに対するコメントを入れる。そして、次のページに個人のNIEノートと同様に書く。これを繰り返し実施する。このNIEノートのねらいとしては、自分の考えと比較しながら友達の考えを読むことで、多面的・多角的な思考を促すことである。右の資料が実際のNIEリレーノートである。友達の意見の良いところにも着目して読むことができ、単に新聞の記事の内容だけでなく、友達の考えを読むことができる利点があると考えられる。

また、次の人に回す際には、その人が興味がありそうな記事を選んでNIEノートに貼り付けてから渡すというシステムでやっているのので、自分の興味のある記事以外にも触れることができる。

## (2) 校内に新聞記事コーナーの設置

校内の掲示板に沖縄タイムスのワラビーに掲載されている、新聞クイズを掲示している。そして、全校で取り組むことができるように、図書館教育主任がまとめたA4サイズのプリントに、希望する児童がクイズに取り組んでいた。その結果を貼り出すなど、児童の新聞への興味関心を高めてきた。このクイズに取り組む中で、わからない言葉やクイズについてタブレットを使って調べる児童もいた。また、家族に話を聞くなど、家庭内で新聞を通してコミュニケーションを取る姿も見られるなど、様々な良い影響が出てきている。



(3) コンクールへの出展

①いっしょに読もう！新聞コンクール

6年生11名中9名が夏休みの宿題として取り組み、学校奨励賞を受賞した。

②新聞スクラップコンテスト

優秀賞（1名）

③琉球新報学校新聞コンクール

金賞1名 銀賞3名 銅賞4名  
計8名（11名中）



(4) 理想教育財団によるはがき新聞の活用

今年度、NIEのねらいとして、「①社会的事象への感心を高める」「②学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする」ことの2点をあげた。そのうち「②学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする」では、理想教育財団のはがき新聞を活用した。

右の資料①では、国語科の小単元である季節の言葉を用いて俳句や短歌を創作する学習で用いたものである。児童が考えた俳句や短歌に加えて、そのときの情景等を文章と絵で表している。

また、資料②では、社会科等で活用してきたはがき新聞の様子である。（資料は、冬休みの宿題にだした、おすすめする本の紹介）

はがき新聞を多く活用した社会科では、単元の最初に設定する「単元のめあて」をもとに学習を進めた。そのめあてに対する児童の一人一人が単元を通してわかったことや感じたことを書かせ、1枚のはがき新聞にまとめさせ、専用のポケットに入れさせた。授業の時間内で終わらせることもでき、かつ、少ない文字数でうまくまとめるため、要約する力を身につけさせることもできた。

資料①



資料②



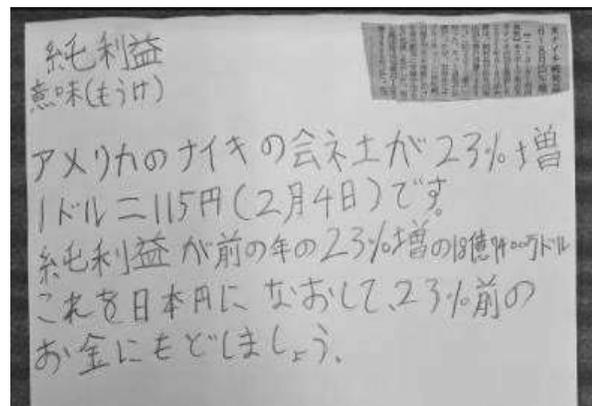
### (5) 算数科での問題作成

算数科で学習する内容と日常生活を結びつけさせることで、児童が主体的に学習に取り組みやすくなるのではないかと考え、新聞を活用した算数の問題作りに取り組んだ。6学年では、算数の最終単位において、6年パスポート（啓林館）という単元があり、総復習する内容で構成されている。そこで、これまで学習した内容をふり返りながら、自分たちで問題を作成させた。



#### ①割合の学習

右の資料は、アメリカのNIKEの純利益が上がったという記事である。この記事を使い、割合の問題を作成したものである。内容は「アメリカのNIKEの会社（の売り上げ）が23%増、1ドル=115円です。これを日本円に戻して、23%増える前の金額を求めましょう」である。このように、割合の問題を作るだけでなく、「純利益」という言葉の意味を辞書で調べたり、為替のレートをタブレットを用いて調べるなど、1つの記事から、様々な学習をし、それを基に問題を作成している。この問題を作成した児童は、決して学力が高い児童ではなく、支援員のサポートを受けながら学習を進める児童であるが、自分の興味のあるスポーツの記事を選ぶことで、主体的に学習を進める様子が見られた。



## ②速さの学習

右の資料は台湾の軍艦の時速と、台湾と与那国島までの距離からかかる時間を求める問題を作成したものである。内容は「時速74kmですすむ軍艦があります。台湾から与那国島まで108km離れています。この船では何時間かかりますか？答えを少数第1位まで求めなさい」である。

この問題では、速さだけでなく、概数の学習も取り入れている。

また、この記事には中国と台湾の関係性も記載されており、現在の社会情勢を知ることができる。

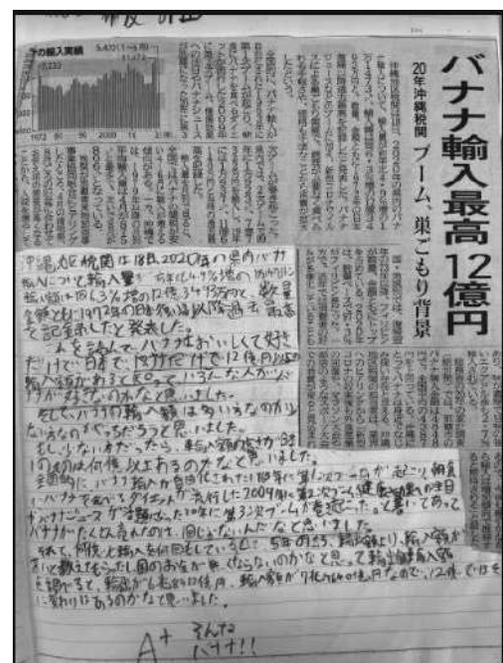
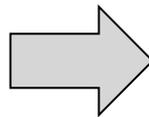
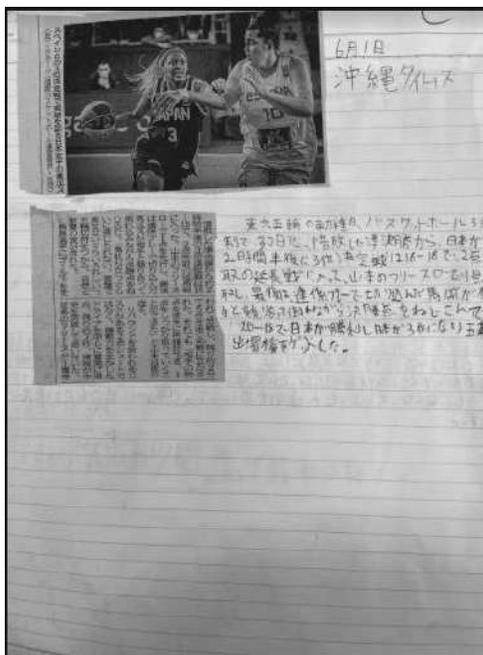
このように、問題を作る際に、問題の意図を伝わりやすくするための文章を構成する力や社会的事象へについての知識の習得など、教科横断的な学習を進めることができた。



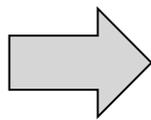
## 4 成果と課題

### (1) 成果

○新聞の書かれている内容を理解し、それを踏まえて自分の考えをきちんと書けるようになった。下の資料は同一児童の6月（NIE実践を始めた頃）と10月のNIEノートである。書く量が増えており、かつ10月では、自分で興味を持ったことや疑問に思ったことをインターネットを使って調べるなど、主体的に取り組んでいることがうかがえる。



○下の2つも同一児童のNIEノートである。左は国頭の大国林道の落書きに関する記事、右は辺戸名の壁に描かれたアートに関する記事である。この2つは同じように壁に書かれているのに、描く人や意義などの違いによって、記事の内容も周りの反応も違うことについての感想を書いていた。このように、物事を比較しながら多面的に読み取る力もついてきた。



## (2) 課題

- NIEを正規の授業時間で取り組むことが難しく、宿題やすき間の時間での取り組みしかできず、時間の確保が必要である。
- 支援を要する児童は、まず、新聞に書かれている事を理解することが難しく、内容を理解しながら読むのではなく、ただ読んでいるという状態になる事もあった。
- いっしょに読もう！新聞コンクールでは、保護者の意見を書く欄が設けられているが、家庭によっては、協力が得られず、全員でコンクールに出品することが難しかった。

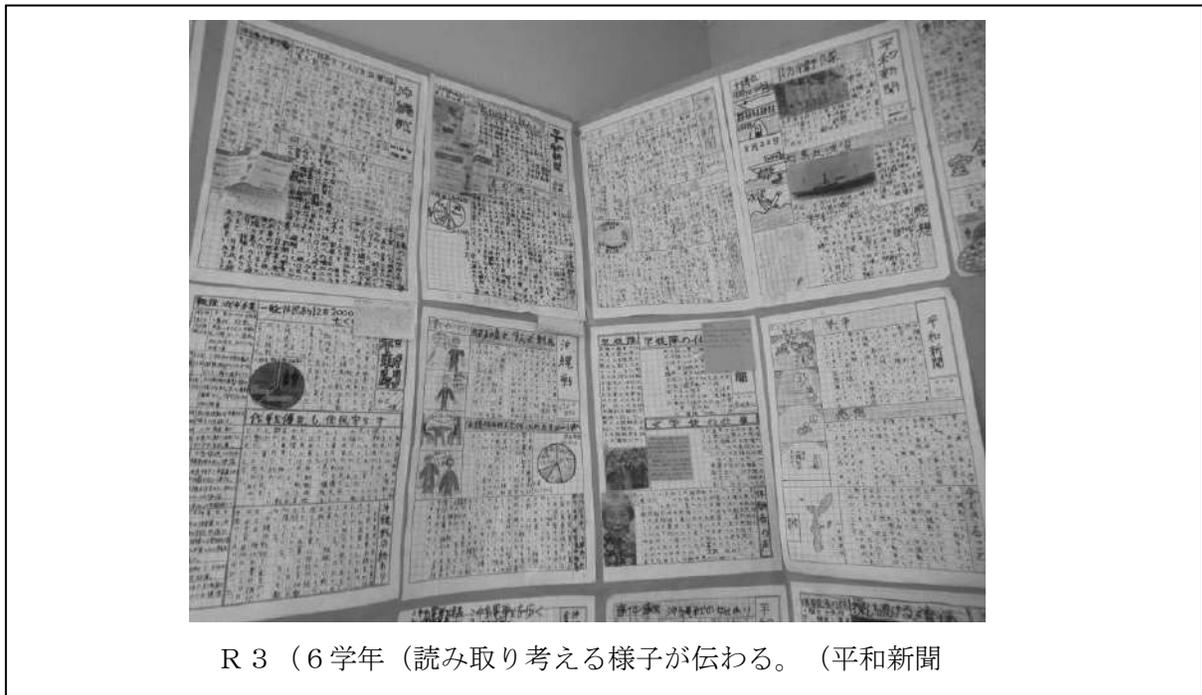




⑤ NIEの広がり と 深まり



( R3 (沖縄タイムス掲載 (R4.1. 30 (日) ( R3 (西原中学校生徒の読み聞かせ (坂田小学校にて ( (4年 官里秀太郎学級 (33回目投稿掲載 (読み聞かせ後の質問タイムで対話する。 (



R3 (6学年 (読み取り考える様子が伝わる。(平和新聞



## NIE 実践指定校 1 年間の取組

石垣市立富野小学校 渡嘉敷 勤子

### 1. はじめに

本校は、海と山に囲まれた自然豊かな石垣島の富野集落にある極小規模の小中併置校である。小学部には1年生2名、2年生1名、3年生1名、4年生2名、5年生1名、6年生2名の計9名が在籍している。児童の実態として、長文を読むことに苦手意識を持っている児童や自分の考えを書くことに苦手意識を持っている児童が多い。そこで、教科書だけでなく日常的に文に触れる機会が必要であると考え、新聞を活用することにした。小学部の先生方に協力、工夫してもらいながら1年間取り組んだ実践内容について、以下で紹介する。

### 2. 日常的な取組

#### ①NIE コーナーの設置

いつでも新聞を読むことができるように、学校司書に協力してもらい図書館にNIE コーナーを設置した。最初は、数社の新聞をならべて掲示したので手にとる児童はいなかった。そこで、毎日の記事の中から児童が興味を抱きやすいような記事を選んで掲示した。すると、立ち止まって新聞を手にとり、めくって読む児童が増えた。また、図書館では実践期間中、新聞を保管し、いつでも読める環境を整えた。



#### ②NIE タイム

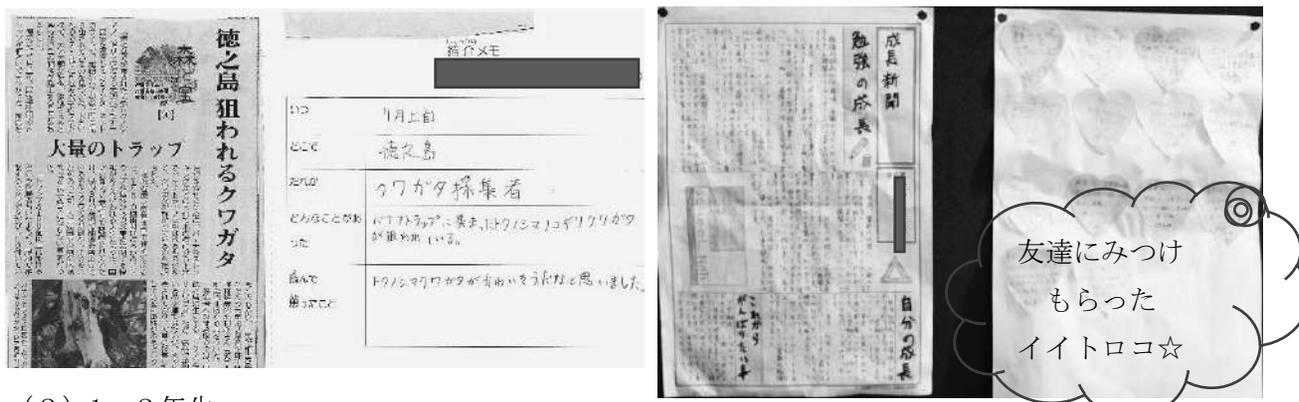
朝の帯タイムに気に入った記事を切り取らせ、記事についてわかったことや思ったことをスクラップ集にまとめる取組を行った。低学年は読めない漢字が多いので、子供新聞を活用したり、児童が選んだ新聞記事を教師が読んであげたりした。また、新聞を読んだり、スクラップにまとめたりする際には、5W1Hを意識させた。NIE タイムで児童が選ぶ記事は、自分の興味のあるものや野鳥や恐竜、スポーツに関する記事が多かった。



### 3. 各学年での取組

#### (1) 全学年（1～6年）

全学年で朝の帯タイムにスクラップノート作りに取り組むことにした。スクラップノート作りを始めるにあたり、新聞記事を使って5W1Hを確認させ、記事の要点を読みとらせる学習をした。この取組をしたことで、児童たちもどのように記事を読めばいいのかコツをつかんだようで、スクラップノート作りに取り組みやすくなった。また、2学期末には児童1人1人にこれまでの成長を振り返らせ「成長新聞」としてまとめる取組を行った。友達にも自分の良さや成長をたくさん見つけてもらい、「成長新聞」に盛り込んだ。



#### (2) 1・2年生

音楽の授業で、「音作り」を行った。「新聞でどんな音ができるかな」をめあてにして、新聞をこすり合わせたり、丸めたり、楽器をつくったりしていろいろな音を出して楽しんだ。想像力が広がり、友達同士で発表し合い自己表現力を磨くことができた。



#### (3) 3年生（特別支援学級）

国語の授業で新聞の気になる写真を選び、表情からどんな言葉を言っているか想像して書くという学習を行った。文字だけだと気持ちを考えたり、想像したりすることを苦手としている児童がいるため、新聞の写真を活用して想像しやすいようにした。その後、写真を見て言葉を連想し、教師と記事について内容を確認した。児童の実態から新聞の文字だけではなく、写真を中心に想像することで意欲的に学習に取り組むことができた。



(児童の感想)

「ふきだしを考えるのは楽しかったです。またやりたいです。」

(4) 4年生

国語や社会の学習で地域の記事を使って考察する活動や、学習のまとめとして新聞づくりを行った。社会科は地域学習が主であり、コロナの影響で祭りなどが縮小されているため、過去の新聞記事を読んだり写真を見たりすることで雰囲気をつかむことができた。



(5) 5年生

国語の学習で記事の読み比べや学習のまとめとして新聞作りを行った。新聞の読み比べでは、同じ出来事でも新聞社によって重要度や見出し、記事の量が違うことに気づくことができた。理科の学習では新聞の数日間の天気予報図から天気を予想した。数日間の天気の変化から必要な情報を読み取り、時系列に並べて結果をまとめることができた。



(児童の感想)  
同じような記事でも見出しや写真で伝えたい内容が変わることが分かりました。



(6) 6年生

道徳の学習では、ワンガリ・マータイさんの「もったいない」の記事から日本の食品ロスの現状を知り、食品ロスを減らすために自分にどのような取組ができるのかを考える学習を行った。また、各教科で学習のまとめとして新聞作りに取り組んだ。自分で調べたことを相手に伝えるようにまとめることができるようになってきた。



4. 成果と課題

(1) 成果

- ・新聞への興味・関心を高めることができ、新たな知識を得ることができた。
- ・記事を読んで必要な情報を読み取ることができるようになってきた。
- ・地方紙だけでなく全国紙を読むことで興味の幅が広がった。
- ・記事を読むのが難しい子もいるが、言葉の意味などを調べるなど学習に広がりが出てきた。

(2) 課題

- ・児童の実態に合わせて子ども新聞を多く活用できたらよかった。
- ・スクラップノートづくりでは興味のある記事に偏りがあった。
- ・授業で多くの新聞を活用できるように日頃から記事をスクラップしておくべきだった。
- ・もっと新聞教材の活用の仕方を工夫できたらよかった。



# 『確かな学力を身につけ、主体的に学び合い高め合う生徒の育成』 ～NIEの視点を取り入れた授業改善を通して～

糸満市立糸満中学校  
校長 大城 直之  
教諭 新垣 孝子

## 1 はじめに

本校は、平成29年度よりNIE実践指定校として授業改善につなげる実践に取り組んでいる。今年度日本新聞協会のNIE推進協議会指定実践校として2年目を迎える。校内研修で各教科において、NIEの手法や新聞を活用しながら授業改善に取り組み、その他にも「海洋教育パイオニアスクール」「持続可能な開発のための教育（ESD）」などにも取り組んでいる。

本校の校内研究の主題である『確かな学力を身につけ、主体的に学び合い高め合う生徒の育成』を目指した授業改善の中から新聞を活用したNIEの取り組みを紹介する。

## 2 取り組み内容

- (1) 今年度は、県内外の新聞が学校に提供されたことで、各月ごとのローテーションで新聞を各新聞社の記事を読覧させ多くの時事問題を検分することができた。また多くの職員が特色を生かした新聞の活用が見られた。

- ① 正面玄関や各学年フロアーにNIEコーナーを設置し、本校生徒の活動やその他関連新聞や情報を紹介。



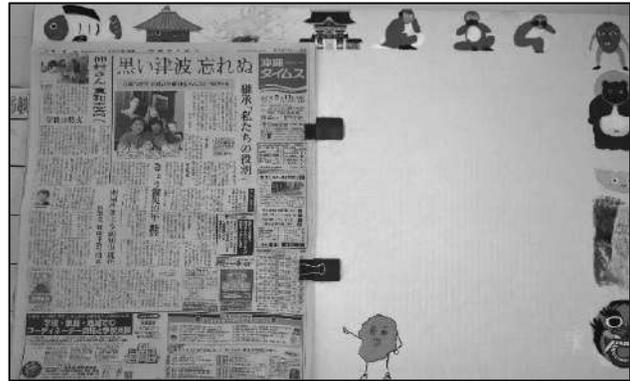
各学年特色ある閲覧コーナーを作る。  
糸満中学校の記事が掲載されると正面玄関の掲示板に掲載する。

2学期は「NIEフォーラム」や「租税教育推進で感謝状」、「第2回ちゅうちな一草の根平和貢献賞」の記事を掲示。生徒の活動が評価されている。





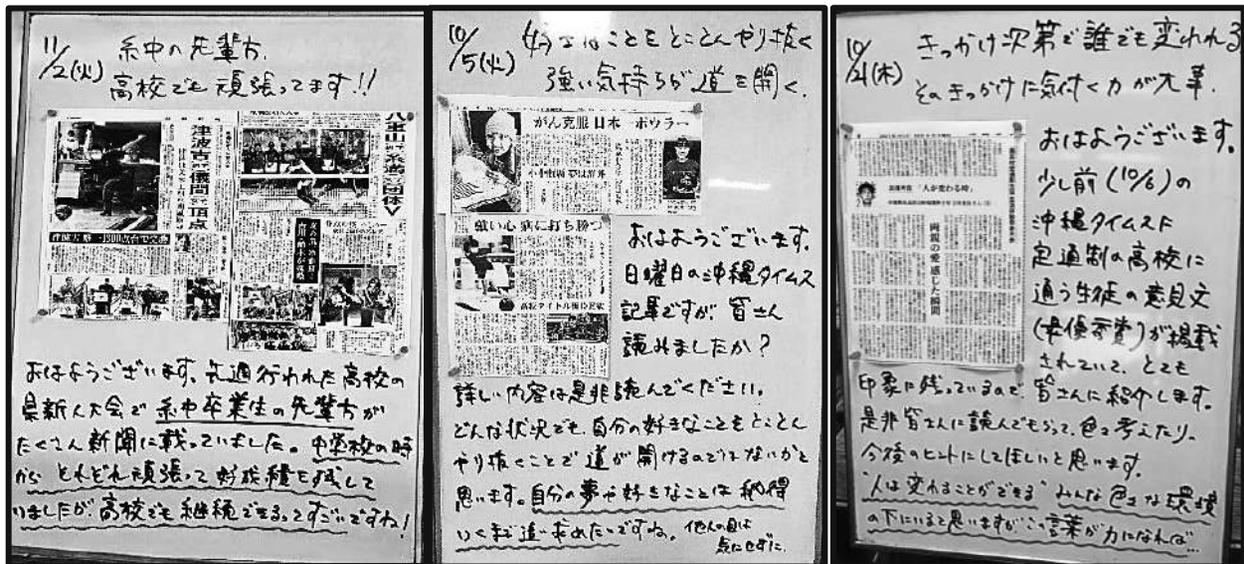
【図書室の閲覧コーナー】



【1年 新聞閲覧コーナー】

② 玄関前のメッセージボードでの活用

生徒指導主任 玉城昇太教諭による、新聞記事を活用した全生徒に向けた、メッセージ  
生徒はメッセージボードを読むために足を止める生徒が増えました。



【メッセージボード 抜粋】

③ 2学年全員にて一緒に読もう新聞コンクール  
への出品 校内提出者 158名 出品 55名

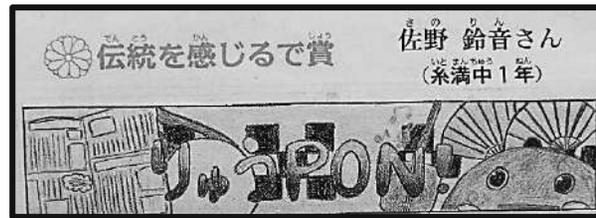
④ 社会科新聞コンクールへの出品  
沖縄県中学校社会科教育研究会長賞  
2年 崎山 陽愛 さん (県中文祭に展示)

金賞 23名 銀賞 21名 銅賞 31名



⑤ りゅう PON! 題字コンテストに出品

美術の授業で「りゅう PON!」題字コンテストの作品づくりの取り組み多くの入賞を  
果たした。



(2) NIEフォーラムに向けて

① 周知・確認・情報提供

4月の校内研修にて昨年度のNIEの研究に於いての成果と課題を報告し、今年度はNIEの5つの能力などを具体的に確認し、各教科・領域における「NIE」(教育に新聞を)の視点を取り入れた授業改善の充実を図ることを確認し、教科で指導案を検討し、全職員1回公開授業に挑戦することを確認した。また、校外研修(NIE研修主催 NIE推進事務局等)の研修報告を校内研修たよりで職員への周知、情報提供を行った。

【身に付く5つの能力】

- ・読解力：読んで解釈する力
- ・思考力：思い考える力
- ・活用力：学習や生活に活かす力
- ・コミュニケーション能力：伝え合う力
- ・自己学習力：自ら学び続ける力・主体的に学ぶ力



【NIE 身につく5つの能力】

【校内研修の様子】



【研修の報告の校内研修たより】

- ② NIE 授業実践に向けた実践事例の公開授業研究主任が新聞を活用しての公開授業を行い具体的な実践事例を示した。

単元 第2章 連立方程式

「連立方程式の利用」～CO2削減の方法～

◎新聞記事をスライドにして地球温暖化の現状を学び、教科書のCO2削減問題を解決し、まとめとして現在県内外での取り組みや中城のバイオマス発電などについて学んだ。



- ③ 校内夏季職員研修

NIEアドバイザー 沖縄市立コザ中学校の松田美奈子主幹教諭を招聘し、外部講師による「新聞記事を使った授業づくり」を2回にわたって研修を実施した。

第1回 8月2日

新型コロナウイルス感染拡大防止の為、職員は研修会場を4会場に分けリモートにて「NIEについて・授業づくりについて」の講話を拝聴した後、各会場で新聞を各自読みながら教科の特色にあった記事の探し方・留意点や活用方法を学んだ。

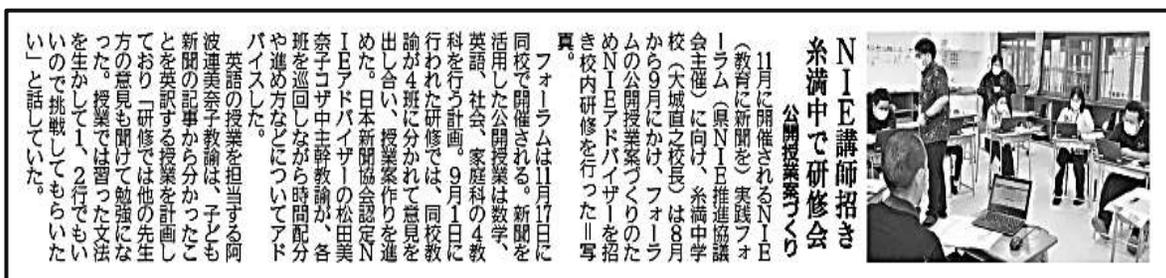
第2回 9月1日

第1回の研修を経て、公開授業に向けた指導案の検討会を行い、アドバイザーによる助言をいただいた。

沖縄タイムス  
8月15日掲載



【10月1日琉球新報掲載（下）】



- ④ 2021年度沖縄県NIEフォーラムの実施（公開授業）

今年度は「社会・数学・英語・家庭」の4教科で公開授業を行った。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、外部からの参観者を制限する形で行った。フォーラムは、4つの会場をつなぎ全体会を開式、分科会の形で研究協議を行った。



【NIE フォーラム記事】



【全体会の様子】



【研究協議会の様子】

(3) 2 学期の各学年公開授業

2 学期の学年公開授業は、夏季研修の成果を生かし、NIE フォーラムの本番に向けて代表公開授業にならなかった先生方はフォーラムの前や後に教科の特性に合わせ、NIE の手法や新聞の記事を活用した授業を 1 授業として取り組んだ。他教科の視点から学ぶ教科横断等授業改善となった。実際に教科で取り組んだ実践事例を抜粋して紹介する。

① 3 年 社会科 大城宗教諭  
『社会権』

今年度からスタートした GIGA スクール構想を活用し、生徒が話し合う新聞記事を教師がいくつか選び記事 PDF にして掲載、生徒はその記事から 1 つ記事を探して読み記事の内容や自分の意見をワークシートにまとめグループで共有しながら意見交換を行い、新聞をより多面的に深く学ぶことができた。



ChromeBook を活用し  
記事を読み、グルー  
プ内での自分の意見  
を共有している。

- ② 2年 数学科 辻由加里 教諭 英語科 大城磨莉絵 教諭  
『一次関数の利用』 『りゅうPON!の記事からタイトルをつけよう』

辻教諭（数学）は教科書の内容に適した新聞記事を使いその記事を教材化し、実際の船のダイアグラムを活用しながら課題解決に取り組んだ。また大城教諭（英語）は子供新聞の英語記事を活用し絵や文章を照らし合わせて生徒へ英語の興味関心を持たせる授業であった。



- ③ 1年 特別な教科道徳 前田佐綾香教諭『あなたはすごい力で生まれてきた』

この授業は、前田教諭がNIEの研修で学んだハガキ新聞の活用を実践した授業である。生徒は自分がどのように生まれてきたのかを家族から聞きとり、名前の由来などを改めて知ったり、また他者の話を聞くことで命のすばらしさ家族の大切さを学んでいた。尚、代表のはがき新聞は、沖縄県中文祭に展示した。



【作成したはがき新聞をグループで紹介している】



【はがき新聞】

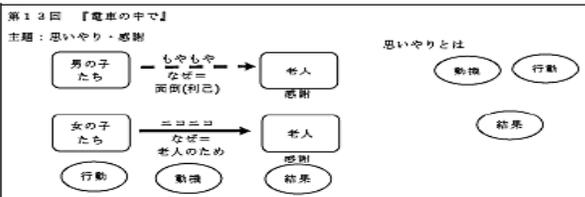
④ 実際の指導案略案

令和3年10月1日金 糸満市立糸満中学校

1人1授業指導案

3年1組	44時	指導者名	主要副教材
題名	『電車の中で』(B-1)思いやり・感謝		
学習のねらい	1. 電車の中で思いやりの心をもち行動しようとする実践態度と態度を養う (主体的な学び) 自分の経験を思い出しながら主観的に意見を述べる (対話的な学び) 互いの意見を聞き、自分の意見を伝えたりする。 (問いかけ) 社会生活の中で思いやりの気持ちをもち、生活していくことの大切さや必要性に気がつく。		
授業の流れ	(授業の流れ) 導入 5分 1. 男子生徒について考える。 展開 35分 2. 女子生徒の「電車の中で」を読んで考える。 3. おらいとる新聞記事。 4. おらいとる新聞記事について議論する。 5. おらいとる新聞記事。 6. おらいとる新聞記事。 まとめ 10分 振り返り		
本時の評価	思いやりのあり方について考え、自分の意見をまともな、社会生活の中で思いやりの心をもち行動しようとする実践態度と態度を養うことができる。		

板書



令和3年11月5日金

糸満市立糸満中学校

数学科公開授業指導案

授業時間	指導者名	辻田加那子(TI)新垣孝子(T2)
5日(金)1校時:2組 6校時:4組 8日(月)4校時:1組		
題材名	3章-4 1次関数の利用 『久米島に導入予定の観光船の運航時間を考えよう』(N2)	
本時のねらい	・フェリーや観光船(ジェットフォイル)が一定の速度で進むとみなして、直線のグラフ(ダイヤグラム)を利用してそれぞれの運航の様子について考えることができる。 ・新聞から観光船導入のよさを読み取り、考えたことと運航時間を自分なりに考えることができる。	
重点的・本時の学び	・主体的な学び-学習を活用し、久米島-観光船が導入されることを理解して新聞を取り組ませる。 ・対話的な学び-観光船の運航時間や乗客数をグループ学習を取り入れ意見交換し合うようにする。 ・問いかけ-新聞記事も実践とみなすことで単純化して問題を解くことができることを理解し、今後生活で活用できるようにする。	

時間	学習内容	生徒の活動と教師の活動-支援	留意点・評価
導入 10分	1. 久米島に行く準備について確認	・現在はフェリーと飛行機で行くことができる。	
展開 30分	2. 「久米島に観光船が導入される」といふ新聞記事を読み取る	・観光船(ジェットフォイル)を紹介する ・久米島に観光船が導入されるとどんなよさがあるか新聞記事から読み取る ・久米島観光大使になったつもりで、観光船導入に向けて考えてみよう！	新聞記事配布 ・新聞記事を読んで気づいたことを記入する 【態度】
まとめ 振り返り 5分	3. 発表	・2〜3グループを指名し発表を促す	
本時の評価	主体的に学習に取り組み、新聞記事のグラフを利用して問題を解いたり、グループで協力して新聞記事に取り組むことができる。 ①思考・判断・表現・主体的な学習態度を直線のグラフ(1次関数)とみなして考えようとしている。 ②知識・技能・直線のグラフを新聞記事から読み取り、それぞれの新聞記事の意味を読み取るすることができる。		

(4) 新聞を使った平和教育『特別な教科 道徳』

今年度の平和学習は、4つの内容に分け①図書委員による絵本の読み聞かせ②平和ガイドによる語り継ぎ部としての研修や調べたことの発表、③沖縄戦の絵から学ぶ平和④ひめゆり資料館リニューアルに伴う、本校生徒の見学記事が掲載された(『ワラビー』)新聞を活用した平和学習を実践した。中でも道徳部会を中心とした、全校一斉の道徳授業、『「りゅうPON!」「ワラビー」を活用しての平和学習』では、生徒一人ひとりに新聞が配られたことで生徒は真剣に記事と向き合い、沖縄戦について学び、考え「新聞記事から語り継ぎ部として自分は何を伝えていくのか」をはがき新聞の作成を通して考えていた。学習の様子を新聞に掲載することで、新型コロナウイルス感染防止で中止になっている学校公開日の代わりとして平和学習の様子を地域に発信できた。

作成されたはがき新聞は、学年フロアに掲示し、学年ごとに、生徒による投票から3名を選出し、ベストカタリストとして玄関前に掲示。12月に行われた沖縄県中学校文化祭の作品として出品した。これまでの取り組みが評価され、今年度第2回ちゅうらうちな一草の根平和貢献賞を受賞した。



【左 7月6日琉球新報掲載】  
【右 7月4日沖縄タイムスワラビー掲載】



【下 5月24日沖縄タイムスワラビー（沖縄戦を学ぼう特別版）】



【平和はがき新聞】

- 3年 4名
- 2年 5名
- 1年 3名

# 県中文祭に 展示

名前の由来新聞

授業実践ワークシート等

平和ハガキ新聞

フォーラムの様子  
紹介



## 「平和の大切さ次代へ」 車の操縦と貢献賞 知事、県内6団体表彰

平和につながる身近な個人・団体をたたえる  
社会貢献活動に取り組む  
第2回ちゅうらうちなー草の根平和貢献賞の表彰式が19日、那覇市の県立博覧館・美術館で開催された。王様学二丁組は、賞状の委嘱らしい功績をたたえ表彰すること、で、県民一人一人に改めて平和な世の中を構築・維持する大切さを思い、ただ知識的なものを運出してはならないと、選出された各団体に賞状を授与した。

受賞者は「船舶部門で風船平和ガイドの会、特定非営利活動法人メジロ・サポート、伊羅網精造り部、ちゅうらうちなー草の根平和貢献賞に選ばれた各団体」の代表者ら19日、県立博覧館・美術館。

吉良（誂）自衛隊エリート（表右）、宇野（表左）は、ちゅうらうちなー草の根平和貢献賞の表彰式が19日、那覇市の県立博覧館・美術館で開催された。

平和の大切さを次代へ伝えること、平和を築いていくこと、とあいさつした。戦争体験者の証言を聞き取り、非体験者による戦争体験の継承に取り組む八重山道一観光コース2年の大浜望（さん）は「一度と同じことを繰り返さないために、戦争のことを次世代に伝えていきたい」と前向きな思いを述べた。（谷根 悠希）

【12月20日琉球新報掲載】

(5) その他

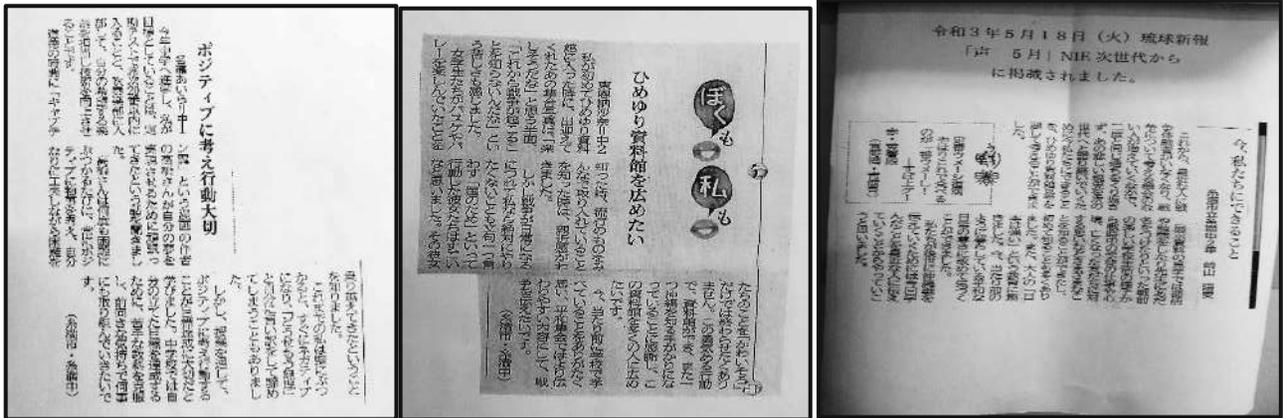
- ① 本校が4年前から取り組んでいる「海洋教育」(教育課程特例校として指定を受けている)において「海を知る・海を利用する・海を守る・海と共生する」を目的に各学年特色を生かした学習活動実践を発信した。



5月16日沖縄タイムスウラビー  
(上)  
5月20日琉球新報(左)

② 生徒による投稿（抜粋）

自分の意見や学んだことから感じ取ったことを作文に書き新聞に投稿し、掲載された。



【5月25日 沖縄タイムス      5月1日 沖縄タイムス      5月18日 琉球新報】

③ 卒業生や地域人材を招聘しての講演会や特設授業の実施の報告



3 成果と課題（

【成果】

- (1) 各学年フロアー、図書室に新聞の閲覧コーナーを設置したことで、生徒が日常的に新聞に触れることができた。
- (2) 公開授業研究会に向けて、全職員で授業づくりをし、NIEアドバイザーを招聘したことで、新聞を活用した教材の開発の改善ができ2学期に多くの新聞を活用した公開授業ができた。
- (3) 生徒が記事を読むことで幅広い知識が身につく、語彙が増えたと感じる。
- (4) 生徒が新聞投稿や学校新聞づくりに挑戦したことで、読み手を意識した文章を書くことが出来るようになった。

【課題】

- (1) 特設授業が多いので、NIEを効果的に活用することを継続する方法の工夫改善各教等の年間指導計画に位置付けることで、見直しをもって授業に取り入れることが必要である。
- (2) NIEに関する校内研修を計画し、職員全体で授業づくりについて更に深めていき、教科横断等の視点での教材化する新聞の活用方法の工夫必要がある。
- (3) 新聞の購読環境が学校しかない生徒の読む環境づくりとコンクールへの取り組みの充実

# 2021年度 西原中学校 NIE 実践報告書

西原町立 西原中学校

校長 友寄ゆかり

研究主任 森岡 稔

## 1. はじめに

今年度から日本新聞協会 NIE 実践校の指定を受けることとなった。個々の職員での実践はあるものの、指定を受けての教科や全体での実践経験を持つ職員がおらず、不安もあるなかでの開始となった。したがって今年度は他校の実践を参考にして、できることから進めていくことを確認した。

## 2. 実践事例

### (1) 提案授業 6月3日(木) 5校時 崎浜史子教諭

子ども向け新聞「りゅうぼん」沖縄戦特集号デジタル版(琉球新報社)と「ワラビー」(沖縄タイムス社)の両紙を活用して平和学習を実施した。タブレットを使って、プレゼンテーションソフトでスライドを作成し、発表まで行った。また講師に沖縄県 NIE アドバイザー甲斐崇(西原町教育員会指導主事)を招き、新聞で伝えるポイントを指導いただいた。

《内容》

新聞を活用してテーマを決定
① りゅうぼん(デジタル)記事から1つ選択 ワラビー(切抜きし撮影)記事から1つ選択
② 記事から「キーワード」を選ぶ(2~3)
③ 調べ学習(図書館やPC その他)
④ スライド5枚まで(表紙 内容(2枚)感想)
⑤ 発表

### (2) 教材としての活用

授業との関連する記事を切り取って、microsoft Teams で共有化したり(写真1)、10月20日の選挙を学ぶ授業では、模擬選挙を行った。新聞に記載されていた各党の選挙公約を掲示した際に、生徒が興味深そうに読み込んでいた。(写真2)



写真1



写真2

(3) 『私の視点』

『私の視点』とは生徒各自が新聞から興味のある記事を選び、その記事の内容と選んだ理由・感想をまとめて発表する取組である。(写真3) 2、3年生の社会科の授業で実施し、主に導入段階で活用した。方法は授業の開始直後に担当の生徒が事前に作成した『私の視点』を発表する。発表を聞いた生徒は感想を記入する。この取組から期待できる効果は、①新聞と社会的事象に興味・関心が高まる。②まとめることや、自分の考えを発表する力が高まる。③相手の考え(主張)に対する聴く力が高まる。ことが考えられる。①については、高校入試の面接の際、面接官に気になるニュースはありますかと質問され、とっさに『私の視点』でまとめたことを答え、役立ったと報告もあった。②、③については、本校生徒の課題である、意見表明の力や支持的風土の醸成にも、効果が表れはじめていると感じている。発表後はロビーに掲示し、他の学級の生徒の考えにも触れる機会とした。(写真4)



(写真3)



(写真4)

(4) 新聞投稿

国語科が中心となって、新聞投稿に取り組んでいる。掲載された生徒は、教師から声をかけられたり、褒められたりして、自己肯定感や自己有用感の高まりに効果が期待される。また地域のみなさんからも応援の声がよせられているとのことである。(写真5)



(写真5)

(5) 社会科新聞コンクール

社会科が中心となって、沖縄県中学生社会科新聞コンクールに毎年取り組んでいる。テーマを西原町に据え、全校生徒が夏休みの課題として探究したものを新聞にまとめている。今年度はコンクールで53人が受賞した。(金賞8人、銀賞27人、銅賞18名)



(写真6) 小波津川の実態



(写真7) 輝く西原

(6) 沖縄県 NIE 推進協議会等が開催するセミナーに参加し、実践事例を学んだ。

- 第28回おきなわNIEセミナー5月22日(土)
- 第29回おきなわNIEセミナー6月26日(土)
- 第30回おきなわNIEセミナー10月23日(土)
- NIE実践報告会(オンライン開催)3月3日(木)

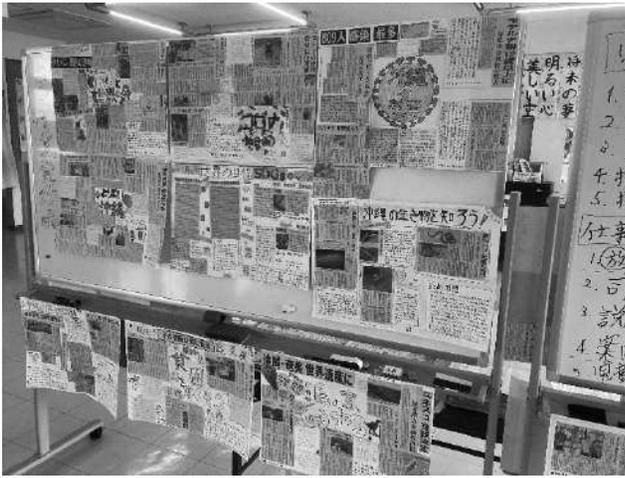
(7) 西原南小学校 NIE 公開授業 2022年1月28日(金)

「仲間わけした記事に小見出しをつけよう」の授業で、グループで小見出しをつけていく活動だった。新聞を教材として活用することで、読み取る力、まとめる力、伝える力、コミュニケーション力など汎用力を培うことができる場面を実感できた有意義な研修会であった。また次年度には中学校に進級してくるので、彼らの能力をさらに高めることができそうである。

(写真8)



(写真8)



(写真9)



(写真10)

### 3. 成果・課題

#### 【成果】

- ・ 1年間の活動を通して、生徒の言葉から、さまざまな社会的事象に関する事柄が発せられる機会が増えてきたと感じることから、関心が高まっていると考えられる。

#### 【課題】

- ・ NIEに関する学校全体としての取り組み体制の構築や確認が必要。

### 4. おわりに

1年目でもあり、不安の中の実施でもあったが、社会科、国語科の職員を中心に1年間の実践をまとめることができた。校内研修は授業改善を意識して取り組んでおり、新たにNIEの実践を含めると職員の負担感の増加が懸念されたため、できることからの実践となった。そのため他教科の職員からは、社会、国語の取り組みと捉えられていた面もあった。次年度は学校全体の取り組みとなるように、職員の意識を高めることが課題であり、その体制作りを意識して取り組む必要がある。

## 令和3年度

# 日本新聞協会 NIE 実践校 実践報告書

沖縄県立本部高等学校

教諭：比嘉 啓信・金城 哲生（地歴公民科）、仲松 聖（福祉科）、仲間 夢叶（国語科）

### 1 はじめに

本校は、沖縄本島北部の本部町に位置し、地元の強い要望により昭和42年度に普通科3クラス、家政科1クラスとして開校した。平成13年度に文部科学省・県教育委員会による「連携型中高一貫教育推進開発校」の指定を受け、本部町立本部中学校・上本部中学校との連携教育の研究を開始し、平成16年度の入試からは、本部町立5校との間で連携入試を開始し、現在、本部町立3校との連携入試を継続している。

令和2年度には、普通科2クラス（進学・情報コース：1クラス、スポーツ・保育福祉コース1クラス）を設置し、連携中及び北部地区の中学校を中心に生徒を募集している。しかし、募集に対し、定員割れが続き、連携校からの入学者も令和2年度は34名と中学生の半数に足りない状況になっている。この状況に至る要因に関しては、さまざまな事が複合的に影響しているが、校区が拡大し、市郡への進学が増えていることが最も大きな要因である。そうした市郡への進学の原因としては、生徒数の減少をもとにした部活動や各種活動に対する魅力が弱まるなどの要因が挙げられる。それに対しては、少人数だからこそできる指導・支援の充実化を進めながら、独自の魅力化も図ってきた。そうした努力の結果は、国公立への進学増、各種検定試験への合格者増などの部分に表れている。今後もこうした、本校独自の魅力化に関わる取り組みとあわせて、NIE 実践の推進に関しても、新たな魅力ある取り組みの1つとし推し進める中で、それにより多くの生徒の自己実現や夢・目標の実現を支える努力をしていきたい。

さて、他方で、本校に入学する生徒の学力について見ていくと、上位層と下位層の差が大きく開き、全体として基礎的・基本的な学力である「読み・書き」の部分に課題を抱える生徒が多い。そうした「読む・書く」力の弱さは、まさにその力の基盤を育てる国語科だけでなく、教科の内容の知識・理解にかかわる基盤として全ての教科に関わる。そのため、その部分で課題を持つ生徒に、ほとんどの教科で何らかの負の影響をもたらしている。そこで、今年度は、その課題の克服に向け、学期の途中の9月度から、日本新聞協会2021年度NIE 実践指定校として以下のテーマをもとに実践を展開していくことにした。

#### 【テーマ】

- ①読む・書く力が弱い生徒が多い本校において、NIE 実践を通して、その力を育成する。
- ②教科の学びを、NIE 実践を通して、実社会に繋がる学びに転換し、主体的・対話的で深い学びへとつなげる。

上記のテーマをもとに、今年度は、主に、「地歴・公民科2名」、「国語科1名」、「福祉科1名」の職員を中心にして実践を展開した。以下、その取り組みの内容を概観したい。

## 2 本校の取り組み（主なもの）

### 【全校生徒】

- ①朝学（10分間学習）におけるNIE教材による学習
- ②「新聞感想文」（夏期休業中の課題として取り組む）

### 【3年生】

- ①国語（文章表現）「ICT×新聞記事×SGDs」 ②国語（国語総合）「新聞スクラップ」
- ③地理BでのNIE教材を使った授業 ④現代社会でのNIE教材を使った授業
- ⑤日本史BでのNIE教材を使った授業 ⑥福祉（生活支援技術）での新聞記事を活用した授業

### 【2年生】

- ①地理BでのNIE教材を使った授業 ②現代社会でのNIE教材を使った授業
- ③世界史AでのNIE教材を使った授業

### 【1年生】

- ①国語（国語総合）「新聞スクラップ」
- ②国語（国語総合）「評論のまとめの活動として  
～「語感トレーニング」の表現活動として新聞を活用～」

## 3 成果（主なもの）

□令和3年 第11回 沖縄県新聞スクラップコンテスト

- (1) 県NIE推進協議会会長賞（学校賞）受賞
- (2) 新聞感想文部門 個人の部

### 【優良賞】

仲宗根 旭（1年） 溝口 そら（1年）  
大嶺 真楓（3年） 喜屋武 柚希（3年）  
佐久本 ミチル（3年）

### 【佳作】

新垣 陽菜（1年） 比嘉 成（1年）  
上間 力（2年） 上間 楓（3年）  
奥原 陸斗（3年） 玉城 このか（3年）



## 4 実践事例報告

- (1) 朝学におけるNIE実践

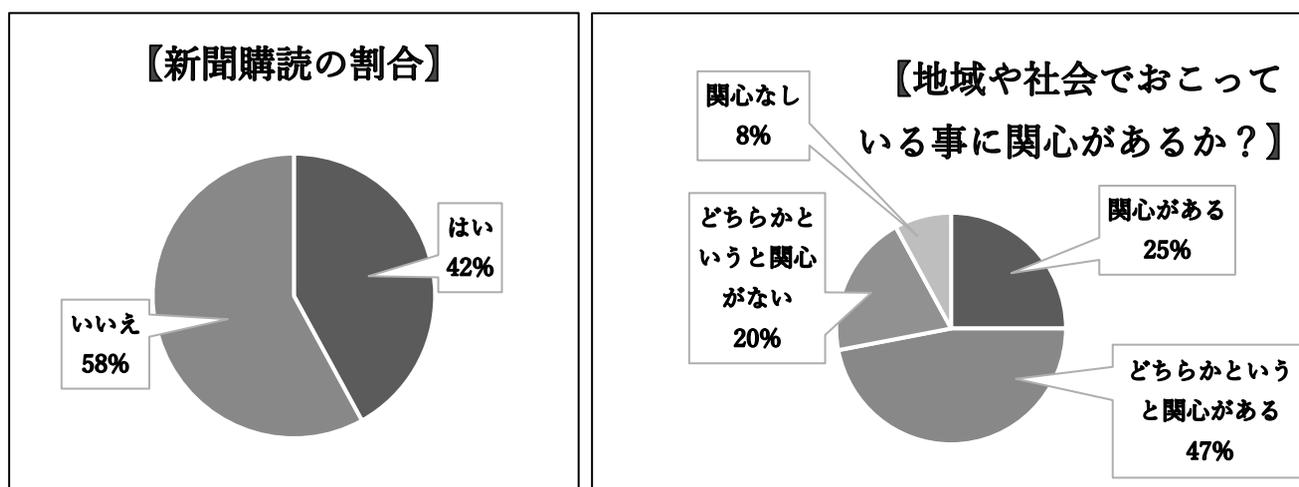
（報告者：比嘉 啓信：地歴・公民科）

全校生徒を巻き込んだNIE実践の取り組みとして、朝学の時間におけるNIE実践の展開に関して紹介したい。この取り組みは、本校の今年度の課題の1つである「①読む・書く力が弱い生徒が多い本校において、NIE実践を通して、その力を育成する、②教科の学びを、NIE実践を通して、実社会に繋がる

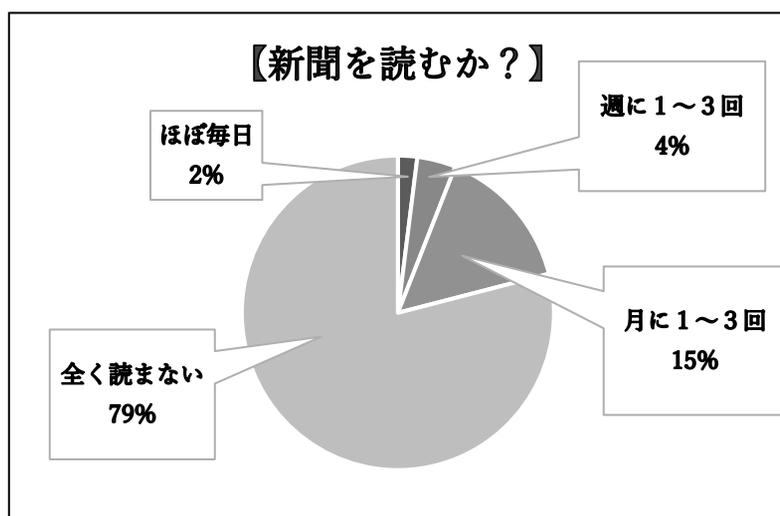
学びに転換し、主体的・対話的で深い学びへとつなげる」ことを念頭に実施されたものである。上記「はじめに」でも述べたように、本校の生徒は、上位層と下位層の学力の差が非常に大きい。その中でも特に顕著に差が見られるのが、読みの力と自分の考えや思いを文章化する力である。そうした力の有無は、国語科だけに関わらず、あらゆる教科における学びの深さにも大きく影響する。よって、この部分に苦手意識を抱える生徒は、軒並みあらゆる教科における学びの深さという点において困難を抱えることになる。よって、この読む力・書く力の育成は、本校において、喫急の課題の1つであるといえる。

さて、その力の育成のために、NIE 教材をどのように活用していくかということを考え、継続的に、それも全校生徒を対象に取り組める内容として、朝学における社会の課題としてNIE教材を作成し取り組ませることとした。同時に、その課題は、各学年の社会科の授業の中で引き続き取り組ませた。特にSDGsとの関連に焦点化させて考えさせ、文章化させる取り組みを行った。

NIEの取り組みを始めてから、赴任する学校で毎年きまって調査をするが、各家庭における新聞購読の割合は年々低下してきているのが現状である。ひどい場合には、全体の約1/3にまでその割合が落ちたこともある。そのため、新聞を日常的に読む経験のない多くの生徒たちに対して、新聞の読み方からまずレクチャーしなければならないことが多い。NIE実践に先立って、本校でも状況を調査するため、新聞購読の割合を調べて見た。そうすると、全体の42%の家庭が新聞を購読していることがわかった。想定していた割合よりも新聞購読の割合が多く、驚いた。

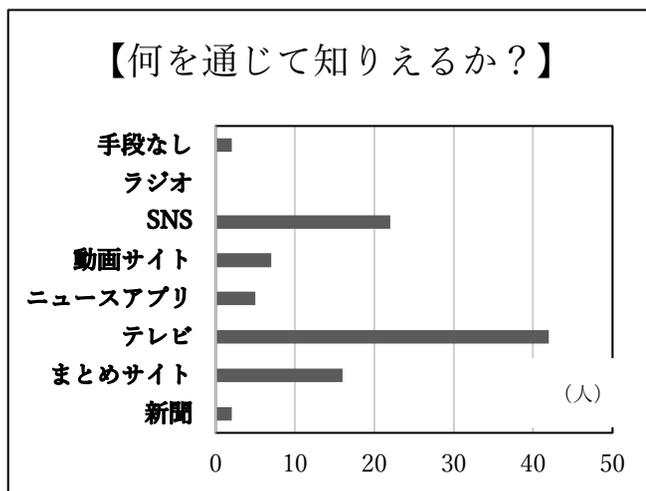


アンケートでは、「地域や社会で起こっている出来事に対する関心の割合」についても聞いた。すると、上記のような結果が出た。注目できるのは、「関心がある（25%）」と「どちらかというに関心がある（47%）」をあわせて、全体の7割近くの生徒が、社会事象に対する関心を持っていることである。



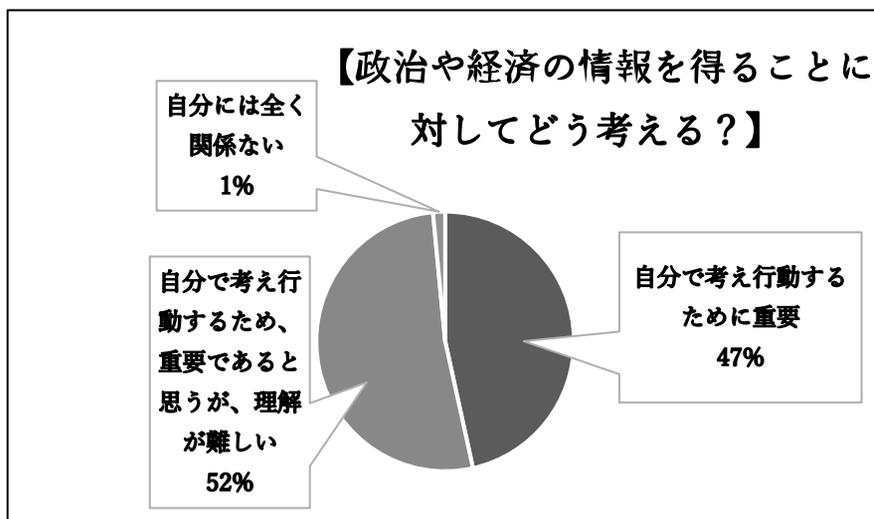
では、生徒たちは、そのような社会事象に対する情報をどのように、手に入れているのだろうか？アンケートでは、「新聞を読むかどうか？」に関しても聞いた。すると、上記に示したように、各家庭での新聞購読の割合が42%もあったにも関わらず、新聞を「ほぼ毎日」読む生徒は、わずかに2%しかおらず、それに「週に1～3回」読む生徒をあわせても、全体の6%にしか満たない結果となった。かなり深刻な状況である。ちなみに、新聞を読んでいる生徒が、どのような形で新聞を購読しているかに関しても聞いたが、「自宅で読む」が8割、デジタル2割と、時代の流れか意外とデジタル新聞の購読の割合が多いとも驚かされた。

新聞ではなく、生徒たちは、地域や社会で起こっている問題や出来事について、何を通じて知り得ているのだろうか？このことに関して、アンケートで次のような結果が出ている。アンケートでは、複数回答可としたので、グラフでは、それぞれの延べ数を示したい。ある程度、予想していたことではあったが、グラフに示した通り、圧倒的にテレビやSNSからの情報入手が多いことがわかる。



よく指摘されるが、特にLINE、Facebook、InstagramなどのSNSから得られる情報は、使用者の情報嗜好に合わせて、選別され特化された情報が多くなるため、その内容は非常に偏ったものとなる。同時に、その情報の中には真偽のほどが疑わしいものも多く含まれる。

自分の興味・関心に範囲を限定せず、より広い視点で物事が見える、知ることができる新聞というツールが選択されなくなってきているのは、生徒たちの読む力・考える力の弱体化だけでなく、思考や嗜好の範囲を狭める要因として看過できない。そこをどのように変えていくかと言うことも今回のNIE実践で意



識されなければならないポイントであろう。なぜならば、上記のアンケート結果にあるように、政治や経済の情報を得ることに対して、「自分で考え行動するため重要である」、「自分で考え行動するために重要であると思うが理解が難しい」を合わせると、「ほとんどの生徒が、政治や経済の情報を得ることに対して、自分で考え行動するために重要である」と考えているからである。この結果を踏まえ、情報の偏りをなくし、より広い視点から物事を見て、考えるために、どのような情報収集のあり方が必要かということに関し、彼らに身をもって実感させ、意識変革、行動変容を迫る実践が強く求められている。



的に SDGs について調べる生徒も増え、それぞれの項目と記事の関連性に関する深い理解と、自らの日常生活のあり方にまで深く入り込んで洞察する力やグローバルな視点から考える力が身についたのではないかと考える。具体的にその変化に関して、アンケート結果をもとに見ていく。

2021(令和3)年9月24日(金) 朝学調査(社会)  
★表紙(p1)のみ記入し、進路委員さんが回収し、番号順に封筒に入れ、社会科教室に提出してください。

2年 / 姓 名 前

**フェアトレード カカオ豆焙煎**

**地球と人に優しく**

**ドリオン 上江洲辰仁さん**

甘い香り、チョコレート開発も

新聞記事(2021.9.14 火 琉球新報)を読んで、次の空欄に、新聞記事を参考に、適語を書き入れなさい。

(① フェアトレード)とは・・・

貧困のない公正な社会をつくるために、(② 発展途上)国の経済的社会的に弱い立場にある生産者と経済的・社会的に強い立場にある(③ 先進)国の消費者が対等な立場で行う貿易である。先進国の私たちが、不当に安い価格で商品を買うのではなく、適正で、かつ(④ 公正)な価格で商品を購入することで、適正な賃金の支払いや環境の整備などを実現し、経済的に弱い立場にある途上国の生産者の生活向上を図ることが第一の目的である。



**後日課題**

新聞記事にある、上江洲さんの取り組みは、上記の SDGsの17の目標のうち、どの目標の実現を目指しているといえますか？

①17の目標の中から、あなたが思う目標の数字とその内容を抜き出し、②なぜ、その目標の実現を目指しているといえるのか？その理由をできるだけ、新聞記事の内容を使いながら、「文字制限に従って」説明しなさい。

(150文字～200字)

私は17のSDGの中で、17番目の目標、パートナーシップを築くことに最も興味をもちました。それは、上江洲さんの取り組みは、フェアトレードカカオ豆と見出しに表れており、フェアトレードの豆は高価ですが、積極的に使っている他の人々にも目を向けてもらいたいという思いが、地球環境にやさしく発展途上国でくらす生産者の人達に寄り添った商品を提供していること、私から私に発展途上国の貧困をなくしようとしたいという思いが、私にこの目標を思い起こさせた。

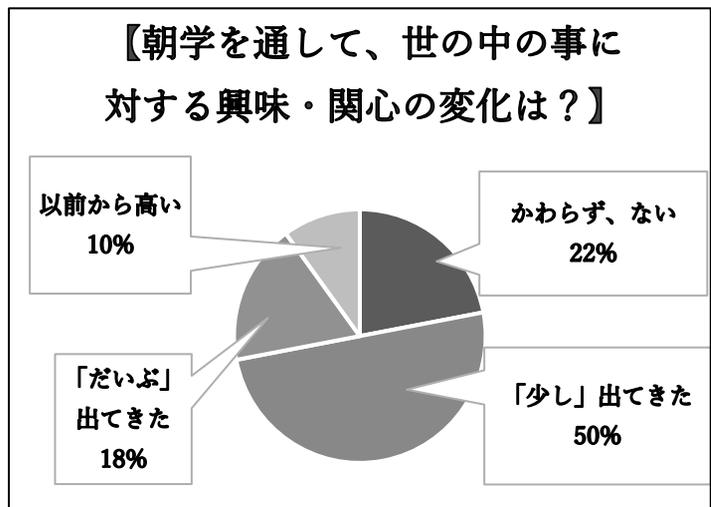
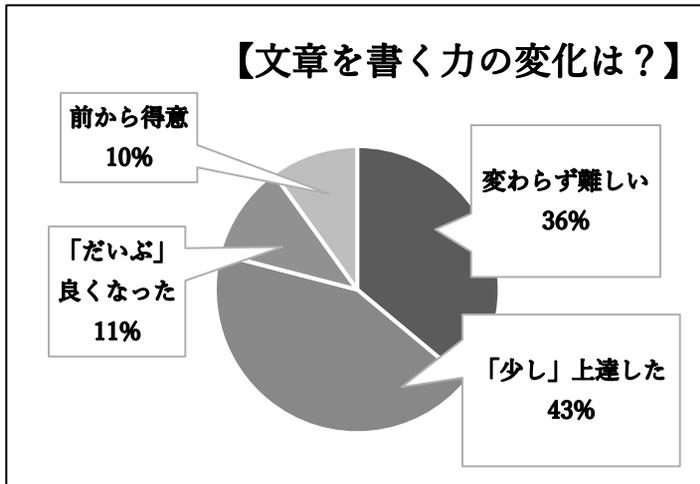
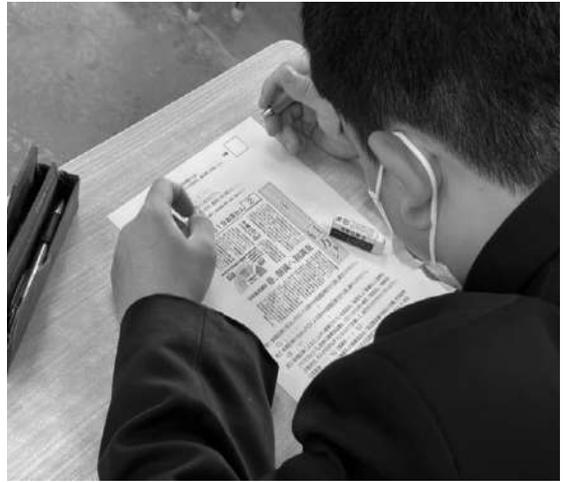
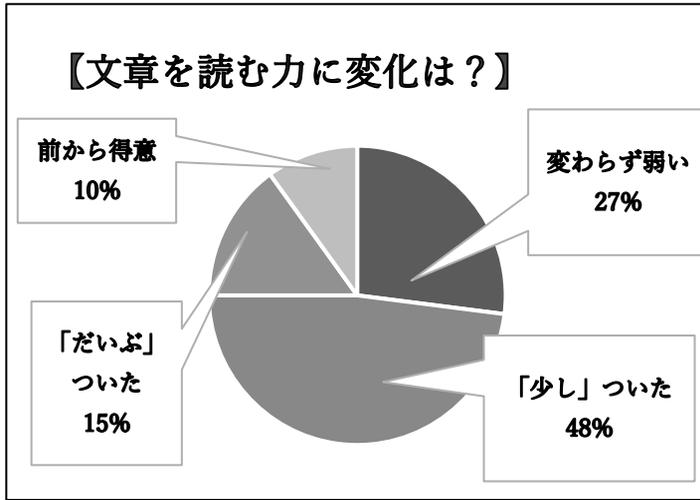
**【朝学や授業で新聞を活用することに関して、どう思うか？】(複数回答可のためのべ人数)**

- ・学んでいることと世の中のことを結びつけて理解することができる (28)
- ・全く知らなかったことを深く知ることができる (60)
- ・新聞で使われている言葉が難しすぎて理解できない (20)
- ・新聞で学ぶよりも、暗記した方がよい (9)

上記アンケート結果に見られるように、新聞を活用することに対して、好意的に捉える傾向が強いことが分かる。中には、使用される言葉が難しく、そのため理解が追いついていないと感じる生徒もいるが、やはり、教科書での学びと現実世界の学びを媒介するオプションとして新聞がかなり有効な手段であることには間違いがない。中には、文章課題をこなした後に、自らそれに関連する事象を調べ、深く考ようとする生徒もおり、学習過程における新聞の活用が、次のアンケート結果からも分かるように、教科書内容の理解の深まりだけでなく、興味・関心の広がりにも一役かかっているといえよう。

他方で、課題となるのは、相変わらず、世の中の事に対して、興味・関心が弱いと自己認識している生徒(全体の22%)の興味・関心をどう引き出していくかである。その要因には、語彙力の弱さに起因し、記事を読み込むことが上手くできていないことも考えられ、その改善に向けた取り組みを工夫する

必要性を感じる。その他のアンケート結果については、以下のグラフを参照されたい。結果から見て、全体を通して、10分間という短時間でもNIE教材を活用した学習が効果を生み出す可能性があるといえる。





(2) 国語科の取り組み (報告者：仲間 夢叶：国語科)

①新聞スクラップ (国語総合：1年)・(文章表現：3年)

〈はじめに・目的〉

語彙力強化、小論文対策として夏休み前に新聞スクラップに取り組んだ。「宿題」とするのではなく、授業内で中間指導を行い、最後にクラス内で共有する時間を作った。教諭からの指摘を受け、クラスメイトの考えを共有することで、「他者からの視点、他者の考え」を意識してほしいと考えた。

〈授業の流れ・略案〉

時間	学習活動	指導の上で意識したこと
1・2	○記事探し 新聞を読み、自分の興味のある分野を3～4つほど切り取る。	・(三年生) ただ興味のある記事を選ぶだけではなく、自分の進路に関する記事を見つけるよう指導した。
3・4	○スクラップ作成 選んだ記事の中から、クラスに共有したい記事を1つ選び、新聞スクラップを作成する。	・その記事のキーワード、要約、感想をまとめるよう指導。特に一年生は語彙が乏しい生徒が多いため、わからない言葉をキーワードとして抜き出し、意味を調べるように指導した。
5	○記事の共有 完成したスクラップをクラスで共有。スクラップに対する感想や意見を付箋に書いて、考えを共有する。	・付箋で考えを共有する際に、ただ感想を書くのではなく、その記事に対する疑問点などを書くように指示した。共有をすることで気づきや他者理解につながるよう意識して声掛けを行った。

〈取り組みの成果・反省〉

完成したスクラップを参考に、「新聞感想文コンクール」を夏休みの課題を完成させるよう指示した。結果、4名の生徒が賞を受賞することができた。

反省として、記事の内容を読まずに、見出しのみで記事を選ぶ生徒が複数いたため、スクラップ作りの指導で苦勞した。次回は、「地域」「福祉」「情報」など記事の内容を絞り、内容を精査したうえで記事を選んでいくほうが良いのではないかと感じた。

<生徒の作品>

大坂選手はいつか、また日本代表に選ばれたら、テニスはもう好きになれないかも、とつぶやいていました。

大坂選手は、もう日本代表に選ばれないかも、とつぶやいていました。SNSで、大坂選手の活躍が話題になっています。

### 旧態依然のテニス界に一石

大坂選手が、日本代表に選ばれないかも、とつぶやいていました。SNSで、大坂選手の活躍が話題になっています。

### SNS広がり、変わる意識

大坂選手が、日本代表に選ばれないかも、とつぶやいていました。SNSで、大坂選手の活躍が話題になっています。

キーワード  
 ・SNS  
 ・大坂選手  
 ・Z世代  
 ・旧態依然  
 ・精神的負担

要約  
 テニスの名門オーストラリアの選手が、精神的負担を理由に、現役を引退した。SNS上で、大坂選手が活躍していることが、多くの若者に影響を与えている。

感想  
 テニスの名門オーストラリアの選手が、精神的負担を理由に、現役を引退した。SNSで、大坂選手が活躍していることが、多くの若者に影響を与えている。これからは、選手たちの精神的負担を軽減するためのサポートが必要だ。

2021年 6月6日(日) 琉球新報

※速読に関する新聞記事を選びましょう！

①新聞を2つ選んで貼る(裏に2筆)  
 ②各記事の新聞社・日付をメモする  
 ③1記事の要約 2考察・感想・想知り

を債に文章としてまとめる

キーワード  
 ・大坂選手  
 ・SNS  
 ・精神的負担

要約  
 スポーツ指導で、大坂選手が活躍していることが、多くの若者に影響を与えている。これからは、選手たちの精神的負担を軽減するためのサポートが必要だ。

感想  
 この記事を読んで、大坂選手が活躍していることが、多くの若者に影響を与えている。これからは、選手たちの精神的負担を軽減するためのサポートが必要だ。

2021年 2月24日(日) 新聞社(沖新報)

### 過労死ライン超延べ2658人

19年度県立校教員 前年の1.5倍

長時間労働が悪化

大学進学指導影響か

佐久間正実 大坂教授

キーワード  
 ・過労死ライン  
 ・長時間労働  
 ・大学進学指導  
 ・教員

要約  
 県立高校で働く教員、残業時間が「過労死ライン」(月80時間)を超える人が前年比1.5倍に上った。19年度は2658人(月平均約22人)。

感想  
 この記事を読んで、教員が長時間労働を強いられていることが、多くの若者に影響を与えている。これからは、教員たちの負担を軽減するためのサポートが必要だ。

2021年 7月12日( ) 新聞社(沖新報)

② 評論のまとめの活動として

～国語総合 評論単元「語感トレーニング」の表現活動として新聞を活用～（1年）

〈はじめに・授業の目的〉

高校入学後、初めての評論「語感トレーニング」の授業を行った際、一年生の語彙の乏しさ、言葉に対する興味の薄さに課題を感じ、単元のまとめとして日常生活の中で出会う言葉を見つける活動を行った。その際、新聞記事・古本・チラシから日常の言葉を探すよう指導した。言葉調べの課題に「語感で遊ぼう」とタイトルをつけ、同音異義語や語感の違いを通して日本語の面白さに気づき、「言葉を楽しむこと」を活動の目標とした。

〈授業の流れ・略案〉

時間	学習活動	指導の上で意識したこと
1～5	○本文「語感トレーニング」の内容理解	日本語が「重層的な言語文化」であることを理解するために、日本語の歴史から説明した。言葉は「伝えたい意味合い」に合った表現を選ぶことが重要だと理解できるように指導した。
6～8	○言葉探し、「語感で遊ぼう」作成 「語感で遊ぼう」とタイトルをつけ、初めて見た言葉や見たことがあるけど意味を知らない言葉、気になる表現の違いなど見つける活動を行った。	日常の中にあつて、自分の知らない言葉を見つけるよう指導した。また、言葉探しの際、漢語と外来語の表現の違いや「時代語」を見つけるよう指示した。日本語が重層的であることに気付けるよう声掛けを行った。
9	○「語感で遊ぼう」共有 クラスメイトが見つけた言葉の中で、興味のある言葉を書きとり、自分の言葉にする活動を行った。	同世代が調べた言葉を共有することで、他者理解につながり、生徒たちの語彙の幅が広がるのではないかと考え、この活動を行った。

〈授業の成果・反省〉

この活動後、授業内でわからない言葉が出てくると、指示をしなくても副教材やタブレットを活用して言葉を調べようとする生徒が増えた。

反省としては、作品のレイアウトを自由にしたため、男女で完成度に差が出てしまったこと、外来語ばかり選ぶ生徒や漢字の意味調べだけを行う生徒がいて、「語感トレーニング」の指導目標である「現代日本語が重層的な言語文化であるということ」から外れてしまった作品ができてしまったことの2つである。今後は、活動の目標を生徒が理解できるように指導に工夫していきたい。

〈生徒の作品〉



③ICT×新聞記事×SGDs (文章表現) (3年)

〈はじめに・授業の目的〉

文章表現のクラスを対象にした活動。はじめは新聞記事を通して、小論文対策を行いたいと考え行った。大学進学が4名、専門学校が4名、就職が1名(情報系)のメンバーだったため、作文用紙に書いて受験対策として指導を行うよりも、記事をまとめる活動を通して今後の社会で生してほしいと考え、iPadとSway活用した。また、SDGsを関連させてまとめるよう指導した。

〈授業の流れ・略案〉

時間	学習活動	指導の上で意識したこと
1・2	○SDGsについて SDGsについて生徒それぞれの知識や考えをオンライン上で共有。17の項目の中から興味のある項目を選び、それに関する記事を見つける。	iPadを使用するときのルールや上手く活用する方法を指導した。
3～5	○Swayの作成 調べたこと、自分の考えをSwayにまとめる。	Swayで書く項目を示し、生徒がまとめやすいようにした。
6	○Sway共有 生徒がまとめたSwayを共有。	共有することを事前に伝え、他人が読みやすいデザインを意識させた。

〈授業の成果・反省〉

iPadを活用したことで、共有が楽になった。文章をまとめる時間も短縮することができた。反省としては、SDGsについての記事を見つけることが難しく、途中でこの授業の目的を忘れてしまい、新聞記事まとめをするだけの生徒がいたことである。他にも反省が多い活動であった。

〈生徒の作品〉



(3) 福祉の授業での取り組み (報告者：仲松 聖：福祉科)

気になる新聞記事から自分自身を表現してみよう～コラージュ作成から共感的理解を深める～

1. 目的

福祉科目の内容で取り上げられる、自己理解や他者理解。対人援助における技法や支援者としての基本姿勢である共感的態度を新聞記事の活用を通して実践的に学ぶことを目的とする。

2. 対象・実践方法

(1) 対象：保育・福祉系列3学年 9名

(2) 実践方法

- ① 1週間分の新聞を生徒同士で回し読みをする。
- ② 気になる記事、自分自身の今の思いを表現したい言葉の見出しを切り取り、模造紙に貼り付ける。
- ③ 互いの気になる記事をシェアリングし、必ず1つ共感的理解を持って言葉を伝える。シェアリングの際は、否定や中傷をしないことを確認する。



3. 実践活動の様子からみてきたこと

お互いに気になる記事や自分自身の、今の思いを表現した言葉の見出しについて、シェアリングをおこなった。共感的理解の言葉を伝える場面では、「なるほどね」「いいね」「わかる！わかるその気持ち」など他者の気持ちに共感、寄り添う姿勢がみられた。また、コラージュの貼り付け方に気が付いた生徒から「やっぱりコロナだね。だって、真ん中に貼ってあるよ。」との声や「地域に関することも明

るいニュースとして、コロナに関する記事の周りに貼っていてもしろい。」との声が聞かれた。そして、「みんな疲れて、限界と感じている中で、明るいニュースや食に関する楽しみが持てる記事を選んでいて、何となくバランスがとれている感じがする。」と全体的なつながりについても、全員がうなずきの姿勢で共感していた。



#### 4. 実践活動を終えて

新聞を読む機会がほとんどない生徒たちであったが、新聞記事の見出し読みから生徒が興味を持ち、記事を読み、言葉を調べ、自分自身で発表し表現する。これらをシェアリングすることで、互いの考えや気持ちに寄り添い、共感的態度の実践につなげることができた。また、生徒自身が福祉の見方・考え方を働かせ、「今後はLGBTの介護福祉考えていかなきゃね。」と取り上げた新聞記事をみて社会と福祉のつながりを感じている様子もあった。

### 5 課題と展望

本校に転勤してすぐに、NIEの協議会の方から、実践校のお誘いを受けた。まだ、職場の勝手も知らない状況の中で、いきなり取り組めるのかと躊躇したが、これまでの経験と実践の効果などに関して丁寧に説明すると数人の同僚が実践に参加してくれることになり、年度途中から日本新聞協会の実践指定校として活動することになった。

九月からの約半年実践の中で、特に、生徒達が県内外の新聞を閲覧する機会を得ることができたのは、非常に大きな経験であったと思う。上記アンケート結果でも示したが、本校における家庭の新聞購読の割合は、私のこれまでの経験に照らし合わせて考えても、意外なほど高く驚かされた。しかし、全体として、家庭での新聞購読率が低下し、約6割の生徒の家庭で新聞が購読されていない状況の中で、県内2紙だけでなく、大手県外紙も含めて、それらの新聞を読み比べる経験ができ、そこから色々な意見や考えを各自が紡ぎ出し、時にはそれらの意見や考えを交わす経験ができたのは非常に大きかった。また、社会科の授業だけでなく、朝学を通した学校全体での取り組み、国語科、福祉科との連携の中での取り組みと、幅を広げて実践を構想、展開できたのは非常に大きな成果と来年度に向けた基盤づくりになったと感じる。

さて、2019年に公表されたPISAの結果にも端的に表れているように、高校の指導現場でも、文章の基本的な内容を把握する「読解力」の弱さを多くの教員が実感していることであろう。その要因

は複合的で、小学校からどのような授業を体験してきたかにも、苦手、得意の意識の強弱が色濃く影響してくる。新学習指導要領では、新聞の活用が大きくうたわれると同時に、新たに「知識・理解」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等」の三観点からの評価が実施される。これらの観点からの評価の実施に関して、新学習指導要領では、かつてないほどのスピードで変化する社会情勢に対応することを重視し、そのために、一人ひとりの「生きる力」を育むことに重点をおき、その中でも特に「多様性への理解や主体性、問題解決能力の育成」に主眼をおく。そうした点からも、本校での半年の学校全体での取り組み、そして、各実践者の取り組みの成果から見えるのは、詳細に説明するまでもなく、そうした力の育成に関わって、教材としての新聞の持つ有効性の高さではないだろうか。特に、問題を見つけた時に論理的に考えて解決まで導ける力や、仲間と協力しながら問題に取り組むための表現力などの基盤となる力を育む実践が展開されたのではないかといえる。

最後に、そうした1年目の実践の成果を踏まえて、2年目となる来年度の取り組みをどう考えるのかについて述べ、まとめをかえたい。2年目の実践の課題として、上記、評価の三観点中の「学びに向かう力・人間性」に関わり、「学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育成する」ことを意識した実践が展開できればと考えている。今年度の実践も継続させながら、「主体的・対話で深い学び」に向かい、NIE教育を通して実践の深まりをつくっていきたいと考えている。新年度は、これまでともにNIE実践を展開してきた同僚の転勤なども想定され、新たな枠組みでの実践となるであろうが、今年度の実践の成果をしっかりと説明しながら、より幅広く全校体制での取り組みを模索し、実行できたらと考えている。

(地歴・公民科：比嘉 啓信)

## 1 はじめに

本校は、平成28年度より校内研修と関連付けてNIE活動を実践してきました。各学年試行錯誤を繰り返して、学年の特色に合った活動に取り組んできました。主な活動としては、同一記事に対する意見交流、新聞読者欄への投稿や平和学習の壁新聞づくり、国語科の授業における新聞活用等です。今年度の校内研修の主題は「自分の考えをもち、表現する児童の育成」サブテーマ、「書く力」を高める指導の工夫改善を通してです。児童の発達段階に応じて、無理なく、楽しみながら「書く力」を高めました。

## 2 本校での取り組み

- ・高学年で「琉球新報」「沖縄タイムス」、中学年で「朝日小学生新聞」、低学年で「ワラビー」を活用。
- ・児童作文などを県紙へ投稿。
- ・NIEタイムを設け、新聞に親しむ活動。
- ・授業と関連付けた取り組み。

## 3 新聞にふれる環境づくり

- ・校長先生手作りの新聞棚を図書館に設置。県内2社の新聞を月毎に整理し、いつでも必要な新聞を探し出せるようにしています。
- ・新聞を通して児童が地域とのつながりを感じることができるよう、校長先生が児童玄関付近に、地域に関する記事を掲示しています。
- ・児童作成新聞を廊下に掲示しています。



校長先生の手作りの新聞棚(県内2社の新聞を月毎に整理されている)



廊下に掲示された学校や地域の記事

## 4 実践事例

### (1) 低学年の取り組み

#### ① 「慰霊の日」の取り組み

コロナ禍ということで、本校では、外部の方を招いての講話などができませんでした。そこで、頂いた「慰霊の日に向けて」の新聞を活用して、平和教育を行いました。活字だけではなく、漫画でも紹介されていたので、低学年でも抵抗なく読み進めることができました。子ども達なりに、平和について考えるよい機会となりました。



#### ② NIE タイム

本校では、毎週金曜日に「NIE タイム」が設定されています。教師が気になった記事をいくつか取り上げ、紹介をしていきました。また、紹介しきれなかった記事については、タイトルのみを紹介し、子ども達の興味を引きつけるように工夫していきました。そして、その日紹介した新聞は教室の後方に掲示し、子ども達がいつでも手に取れるようにしました。掲示をすることで、子たち同士で気になる記事を読み、交流する様子が見られました。



### 新聞投稿

文章を書くことに苦手意識のある児童もいましたが、身近にいる高学年の作文が新聞に掲載されたことで興味をもち、意欲的に取り組むようになってきました。

一年生は、実際に、級友が掲載された事がきっかけで「挑戦してみたい！」と取り組みを楽しみにする児童が増えました。また、掲載された記事については、全児童が通る廊下の一角に掲示されており、他学年の書いた文章を読んだり、感想を共有したりするなど、自然と交流が生まれる場面も見られました。



## (2) 中学年の取り組み

### ① かべ新聞 (総合)

3年生は、総合的な学習の時間で地域の行事について調べたことを新聞にまとめました。新聞作りの時は、NIEタイムで目になっている新聞を参考にし、それぞれの記事に小見出しをつけて読みやすいようにしました。「新聞には記事に関係する写真があって、わかりやすい、読みたくなる。」と児童が気づいていたので、それも参考に、記事の内容をイラストにして新聞を仕上げました。はじめての新聞作りだったため、簡単な新聞になりましたが、調べたことを読みやすく相手に伝えることはできたように思います。これから新聞に触れることで、新聞にまとめる技術もついてくると思います。



かべ新聞は教室背面に掲示



### ② はがき新聞 (学活・総合)

4年生では、総合的な学習の時間や各学校行事の振り返り、学期ごとの目標をまとめるのに はがき新聞を活用しました。回数を重ねていくうちに、割り付けや見出し、記事の内容を各々で工夫ができるようになりました。また、総合的な学習の時間で福祉体験を実施した際、はがき新聞を用いて「1番伝えたいことを短く書く」技術も身に付けました。しかし、なかなか思ったことが書けない児童もみられました。NIEタイムなどを生かし、自分の考えを持てる時間を確保しつつ、伸ばしていく必要性を感じました。



はがき新聞は教室の側面掲示



福祉体験新聞

目標新聞

### ③ NIEタイム (毎週金曜日)

4年生のNIEタイムでは、教師が準備した記事について全体で読解し、交流、感想の流れで取り組みました。難しい言葉や表現にも、その都度確認を入れながら読むことで、知識を身に付けていったように感じます。児童の新聞に対する興味関心も高まりました。

3年生は、新聞選びから挑戦しました。まず、新聞の記事を見て自分の興味のある新聞を選びます。子どもたちが興味を持つ記事は、動物・スポーツ・料理やお菓子作りなどでした。記事を読んで、①「どのようなことが書かれていたのか」 ②「感想」等をまとめました。はじめは、自分の興味がある記事ばかりを読んでいましたが、少しずついろいろな記事にも興味をもち、視野が広がりました。



NIE ワークシート



新聞選びから感想をまとめるまで

### (3) 高学年の取り組み

5学年は、特に好きな記事を選ばせ、記事の読み取ったことを要約し、感じたことや思ったこと、感想をプリントに記入しまとめました。また記録したものは、教室背面に全児童分を掲示し友だちのプリントも見られるようにしました。朝のわずかな時間で新聞を読み取り、要約し、思いを書くのは時間の面で厳しい面もありましたが、掲示することで友だちの興味のある事、物事の感じ方や考え方を知るきっかけになっていました。児童数分が出揃うと互いのプリントを読み合ったり、質問したり、会話のきっかけとして生きていたことがNIEに取り組んだ一番の良さであると感じました。

また、5学年の国語の時間には、新聞の構成を学ぶ場もあり、児童1人に対して1部以上の新聞が用意できるので、見出しの比較や、文章の並び方、紙面の読む順などを実際に手に取って学ぶことができたのも価値深いと感じました。

5学年には、新聞に出てくる言語表現に理解ができないところや、単語の意味が分からないところも多々ありますが、文脈から推測することや、タブレットや辞書等を利用し調べようとすることも新聞の良さであると思いました。



6年生は、ライティングの時間に新聞記事を選び、記事を要約し、自分の感想を書く活動を行いました。一人一人が好きな記事を選ぶのに時間はかかりますが、自分で選んだ記事なので丁寧に読み、要約・感想を書くことが出来ました。

また、修学旅行で学んだ事を新聞(A1用紙)に一人一人がまとめることが出来ました。事前学習で学んだ事や、見学地で学んだ事や感じた

こと、話を聞いて分かったことなどを記事にまとめました。5年生で学んだ新聞の書き方を思い出しながら、それぞれが構成を工夫し作成することが出来ました。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

- ・はがき新聞にまとめさせることで、書くことに対して児童に負担を感じさせることなく取り組むようになりました。新聞は、取り組むごとに個人の色を出せるようになってきました。
- ・NIE と関連づけた書く活動により、児童が自分の考えを表現できるようになりました。
- ・朝の活動「NIE タイム」を通して、新聞記事に関心を持つようになり自ら進んで記事を手取る児童の姿が見られました。
- ・壁新聞に取り組むことで、考えをまとめる力や資料をまとめる力、表現する力が高まりました。
- ・読み手を意識して文章を書くことができる児童が増えました。

### (2) 課題

- ・各学年で日頃から情報共有ができていなかったため、NIE 活動のやり方にばらつきがありました。
- ・国語科や社会科などの教科に取り組んで活動するが、研究・研修不足のため深く追求することはできませんでした。
- ・これから教師や児童に負担感のない取り組みを、学校全体で共有していきます。
- ・児童によっては、新聞の読み取りに時間がかかる児童、記事の精選が難しい児童がいるが、そのような児童をどのような手立てで見取っていくかが今後の課題です。

次年度、課題解決に向けて取り組むことで、児童一人一人が新聞に親しみ、新聞を通して学び、考え、そして新たな考えを生み出したり広げたりできるように、NIE 活動の更なる充実を目指していきます。



廊下に掲示された児童の投稿記事



1 はじめに

本校は、今年度より沖縄県 NIE 推進協議会指定実践校となり、6 学年を実践学年として新聞を活用した教育実践に取り組んだ。また、図書館司書とも連携し、全学年に向けて新聞を活用した掲示物を作成したり、閲覧コーナーを設けたりして、新聞に親しむ空間作りも意識して活動を行った。

6 学年の実践では、本校の校内研究のテーマである「思考力・判断力・表現力を育む」ためのツールとして新聞を活用することと、キャリア教育の一環としての活用を目指し、実践に取り組んだ。以下に、今年度の取り組みの様子を紹介する。

2 実践事例

(1) NIE コーナーの設置

図書室前に NIE コーナーを設置し、各社新聞が閲覧できる場所と、「レッツチャレンジ NIE」を活用したチャレンジコーナーを設け、どの学年も楽しく新聞に親しめるようにした。チャレンジコーナーでは、クイズに答えると図書室から館内本の貸し出し券や 1 冊プラス貸し出し券がもらえるということもあり、休み時間になると、学年問わず児童が自主的にチャレンジする様子が見られた。



沖縄戦に関する記事の紹介

南小 NIE のコーナー。図書室とコラボした楽しい企画がいっぱい。

(2) 新聞投稿

本校では以前から、日常の活動として新聞の投稿を定期的に行っており、掲載された記事は図書室前廊下に張り出し、お昼の放送で読み上げるなどして全校児童に紹介してきた。新聞に掲載されることで、保護者や地域の方々も楽しみにして声をかけて下さるので、児童にとっても励みになり書くことへのモチベーションが上がった。

体力テストがんばった
西原町立西原南小学校 教諭 星 暁
今年度は、4年生のハラスポーツ大会が行われ、児童たちは一生懸命に取り組んでくれました。...



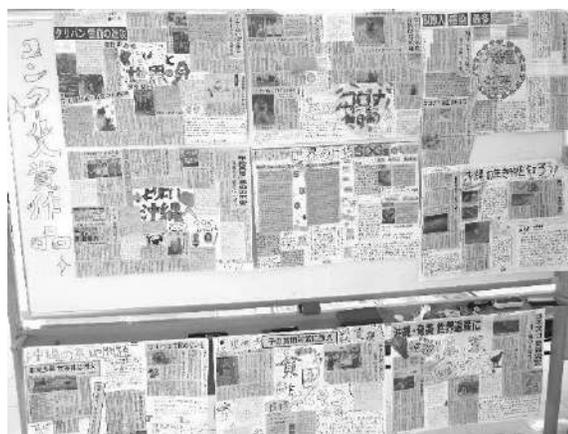
(3) 各種コンクールへのチャレンジ

夏休みの課題として、「第11回沖縄県新聞スクラップコンテスト」(沖縄タイムス主催)にチャレンジした。また放送大学の蔵根美智子先生を講師として招聘し、「第11回沖縄県新聞感想文コンクール」にも挑戦した。

第11回沖縄県スクラップコンテスト  
 小学校高学年 新聞切抜き部門  
 【優秀賞】 白井あみる 喜屋武結彩 福原優希  
 【優良賞】 白井あみる 大湾真里奈 喜屋武結彩 島袋琉太郎  
 【佳作】 吉里美央 呉屋心花  
 小学校高学年 ノート部門  
 【優良賞】 嵩田くるみ 【佳作】 與那城舞子  
 ○第11回沖縄県新聞感想文コンクール  
 【奨励賞】 呉屋心花 【入選】 福原優希



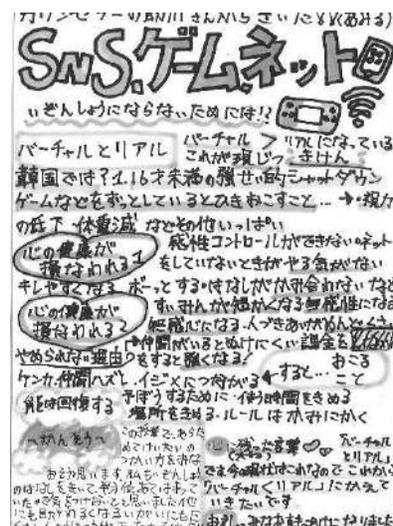
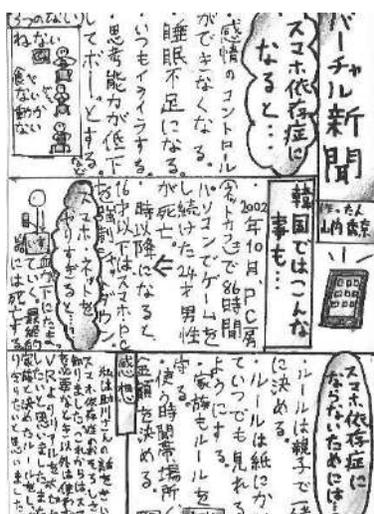
蔵根先生による「新聞記事の読み方」授業



(4) キャリア教育との関連

① はがき新聞の作成

6学年では、毎年キャリア教育の一環として講師を招いて講話をしていただいている。今回は、そこでわかったこと、考えたことをはがき新聞という形にしてまとめた。また、職業について保護者にインタビューを行った際にも、はがき新聞の形式でまとめ、お互いに読みあって情報交換を行った。限られたスペースでまとめなければいけないので、文章を精選し、伝えたいことは何か吟味しながら書く力が身についた。



## ②切抜き新聞の作成

興味のある職業ごとにチームを作り、新聞記事から情報を集め、それを切抜き新聞にまとめる活動を行った。総合的な学習の時間に位置づけ、全10時間の単元として活動を進めた。作成の途中過程で2回、NIEアドバイザーで西原町教育委員会指導主事の甲斐崇主事を講師にお招きし、見出しのつけ方、相手意識・目的意識の明確化について授業をしていただいた。また、制作過程で公開授業を行い、町内の先生方に活動の様子を参観して頂いた。

この活動を通して、児童は自分たちの考えを伝えるためには、相手意識・目的意識をしっかり持つことが重要であるということを知った。さらに、新聞記事の中から仕事に携わる人々の思いや願いを読み取り、それを踏まえて自分たちはこれからどう活動していくかということまで、考えを深めることができた。

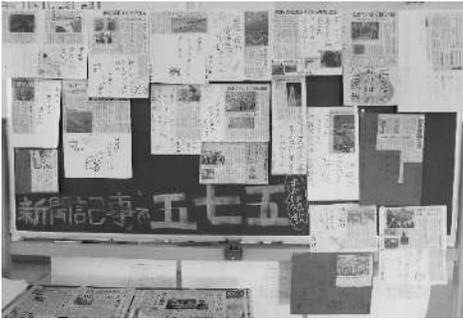
### ▼ 活動の様子



▲完成した切り抜き新聞

▲図書室前に掲示

## (5) その他の活動



▲新聞記事で五・七・五



▲新聞記事でコラージュ作成



▲データベースの活用  
(新報デジタル  
朝日データベース活用)

## 3 成果と課題

### (1) 成果

- 新聞に触れる機会が増えたことで、いろいろな記事に興味を持ち、家庭学習でも新聞記事から学んだことを書いてくる子が増えるなど、児童の興味・関心に広がりが見られた。
- 新聞投稿やはがき新聞などの活動を通して、書くことへの抵抗が減り、読み手を意識した文章を書くために推敲を重ねる姿が見られるようになった。
- 見出しやリード文、構成の仕方などを新聞記事から学ぶことで、自分の考えを表現するときに相手意識・目的意識を持って、より伝わりやすくするにはどうすればよいかを考えて、文章を書ける子が増えてきた。

### (2) 課題

- 今年度は6学年を主体とした取り組みであったが、学校全体としてのNIE活動に広げていきたい。
- 年間を通して、計画的無理なく教育課程に組み込んでいきたい。

# 令和3年度 緑風学園 NIE 実践報告

## テーマ「思いや考えを伝え合う子どもの育成～NIEの日常化を通して～」

### 1. はじめに

小中一貫校である緑風学園は、これまで1～9学年で日常的なNIEの積極的な実践を進めてきた。取り組みとしては、親子でつながる新聞スクラップノート、低学年では新聞遊びや新聞読み聞かせ等を通して新聞に親しむこと、高学年・中学部では新聞を活用することを通して伝え合う力を高めるNIEフリートークなど「思いや考えを伝え合う力」の育成を図ってきた。

### 2. NIEを通してつきたい力

児童生徒の実態から設定した育てたい3つの力

- ① 自分の思いや考えを伝え合う力 (思考力・判断力・表現力)
- ② 自分の思いや考えを書きまとめる力 (書く力)
- ③ 社会の出来事に関心を持ち、調べる力 (つながる力)

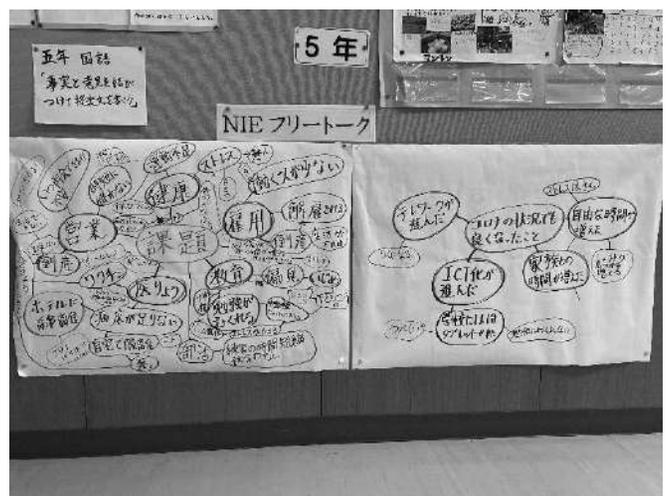
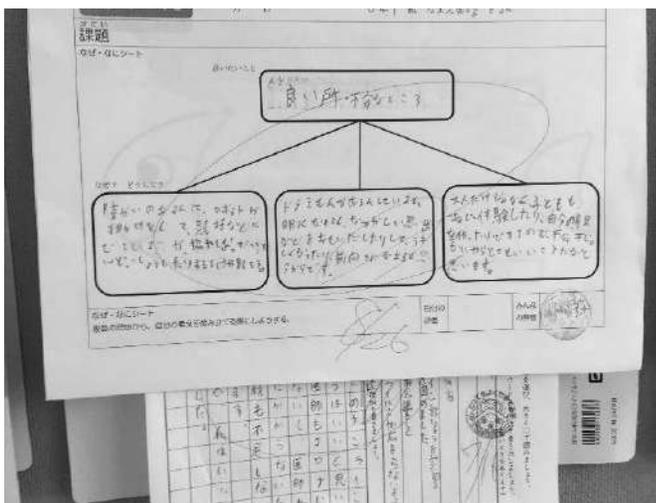
### 3. 「NIEの日常化」における取りくみ

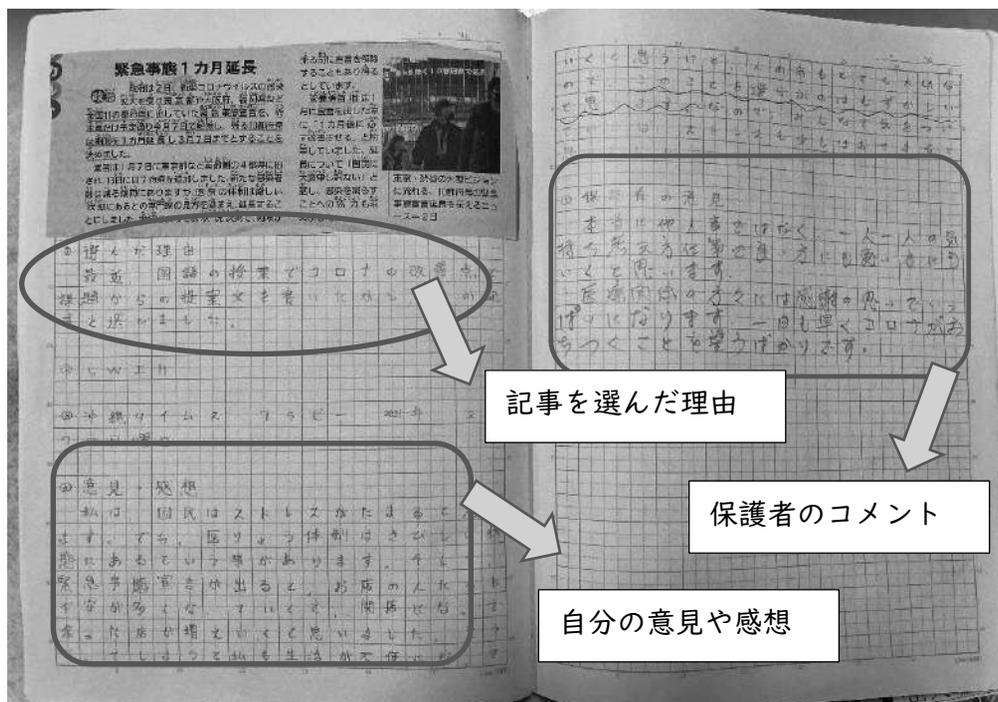
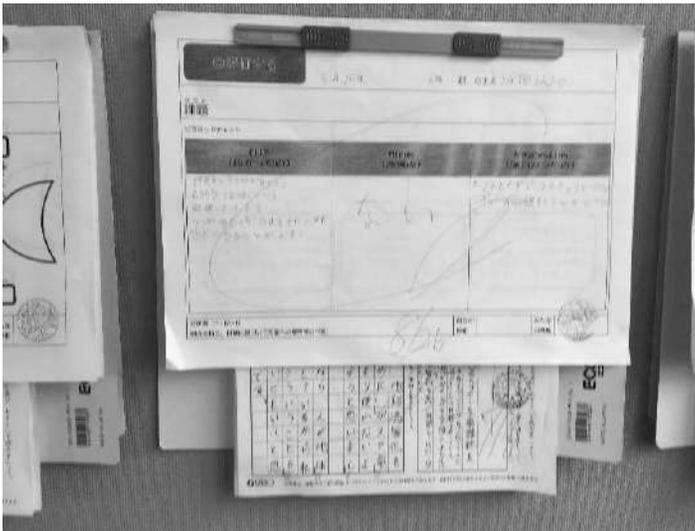
- ・今回はコロナ禍にあって実施できなかったが、これまでは保護者にNIEについて知ってもらうために、4月の授業参観日などにNIEの説明資料を配付したり授業を行ったりした。
- ・新聞購読の年間計画を立てる際にはどの月にも新聞に触れられるように新聞配達の依頼をした。また、学習や行事との関連性も意識し、重点的に多くの新聞を注文する月を設定した。
- ・NIEコーナーを設定し、新聞活動の足跡を見る場、親しむ場をつくった。
- ・朝のNIEタイムには、学年の発達段階に応じて新聞を活用した実践を行った。

### 4. 具体的実践

NIEコーナー

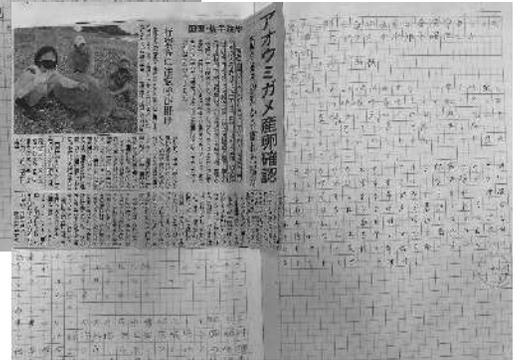
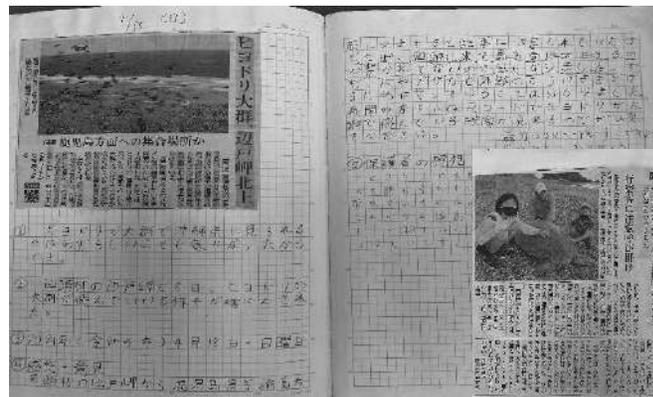
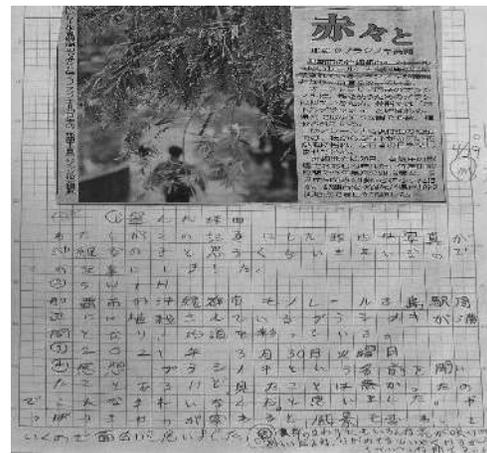
フリートークに活用した思考ツール等の掲示



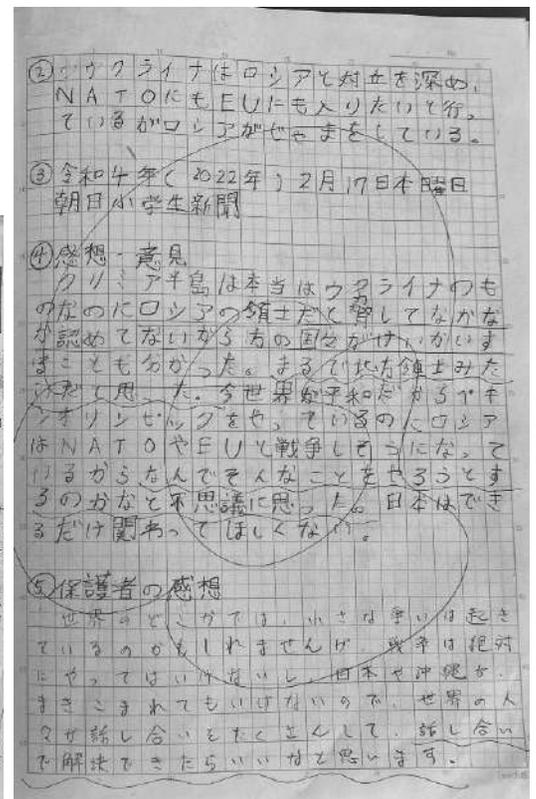


朝の NIE の時間に使うスクラップノート。3年生からスタートしている。週末に持ち帰り、記事に対する自分の考えを書いたり保護者と話し合ったりする。保護者にも一緒に考えてもらい、考えのコメントを書いてもらう。NIE の時には、このノートを用いながらフリートーク等を行う。

社会情勢やその時々盛り上がっている話題や季節の便りを取り上げ、児童生徒の興味・関心を広げていく工夫を図っている。(6年生児童 スクラップノートより)



まず、記事を読ませる→記事に対する自分の意見をもつ  
→学級全体やグループで話し合う→自分の意見をもう一度見つめ考える ということを繰り返すことで、興味関心が広がっていった。







## 5 成果と課題

### 【成果】

- ・NIE 関連のコンクールにおいて多くの児童生徒が作品の応募をし、受賞をすることで意欲の向上につながった。
- ・新聞の記事に対して友達同士やクラス全体で話し合うことで、考えを広げたり深めたりすることができた。
- ・朝のNIEの活動の時間を週時程の中に入れ、各学年の発達段階に応じた新聞を活用した活動を行うことができた。

### 【課題】

- ・コロナ禍にあり、例年行っている4月の授業参観時の保護者に NIE について知ってもらう説明等を行うことができなかったため、各家庭・保護者への協力の依頼方法を考えていく。
- ・時代の変化に伴い、新聞購読のない家庭が多くなり、学校でのみ新聞と関わる児童生徒が多くなり、いかに新聞に親しませていくか工夫が必要である。
- ・9年間の学びをつなぐ NIE 活動の一層の充実  
(各学年の発達段階をとらえ、共通確認・共通実践を行う)



# 2021年度 コザ中学校 NIE実践報告書

沖縄市立 コザ中学校  
校長 上里 厚  
主幹教諭 松田美奈子  
(NIEアドバイザー)

## 1. はじめに

2019年度から沖縄県NIE実践指定校の指定を受け、NIE実践校指定3年目となった。NIEを授業改善や授業力向上の手立てのひとつとして、相互に連動させながら各教科や領域などの教育活動に取り入れていくことを共通理解全体認識とした。3年目なので、過去2年間の成果と課題を踏まえ、NIEの理論と実践、啓蒙を意識しながら進めていくこととした。

## 2. NIE推進テーマ

「主体的・対話的で深い学びを育むNIEの実践」

～主体的に学び合い、自己肯定感や自他理解を高める授業づくりを通して～

## 3. 学力向上推進テーマ

「夢や希望の実現に向かって歩み続ける生徒の育成」

～キャリア教育の視点で取り組む学習活動を通して～

## 4. 校内研修テーマ

「主体的に学習に取り組む態度の育成」

～新学習指導要領に則した指導と評価の工夫・改善を通して～

## 5. おもな取組

### (1) 新聞の設置

- ・NIE用新聞は各新聞社ごとに職員室にある専用箱に入れ、1か月が経過したら図書館に移動し、授業時に生徒が検索・閲覧ができるように仕分けした。
- ・本校独自で購読している県内紙（琉球新報・沖縄タイムス）は当該月は職員室で閲覧できるようにしている。その1か月後に図書館に移動させ、NIE用新聞と区別して誰でも閲覧やコピー・貸し出しができるように共通確認をこまめに行いながら、新聞が身近な存在となるよう設置場所や新聞を開きたくなるような仕組みや周辺環境を整備している。

## 5. おもな取組

### (2) 校内研修

- ①オリエンテーション「N I E入門～N I Eで身につく力・教育的効果・記事の教材化～」  
(4月1日 講師：松田美奈子 主幹教諭・N I Eアドバイザー)
- ②N I E研修会「N I E講座 ～新聞のしくみと特徴新聞切り抜きワークショップ～」  
(4月5日 講師：松田美奈子 主幹教諭・N I Eアドバイザー)

### (3) 実践教科・領域と内容

- ①社会：高校入試時事問題対策（予想問題づくり）、2021年度10大ニュース
- ②道徳：平和の継承者としての自覚  
：沖縄戦、身近な平和について考えよう（全学年・全学級）  
：新聞記事を活用して、思いやりの心、いじめに考えた。（T T授業）
- ④総合的な学習の時間：「新聞切り抜きシート」づくり（1・2年）
- ⑤学活：キャリア教育（2022北京冬季オリンピック記事を活用し、挑戦する心について考えた）

### (4) その他

- ①「学推だより」
  - ・職員向けに発行
  - ・内容は学力向上や授業改善に関する記事を掲載し、記事の要約や記事から読み取れること、記事のキーワード等を入れ、授業づくりのヒントになるよう心がけて作成した。
  - ・学推関連の記事を抜粋し、記事の「キーワード」から職員への発問を掲載し、発行者側からの一方通行にならないよう、職員の意識高揚をねらった。発問に関して、職員からの記述があったものは、校長や教頭に目を通してもらった。
- ②「キャリア教育だより」
  - ・職員向けに発行
  - ・内容は、本校の方針である「中学校3年間を見据えたキャリア教育」を意識しながら、学活の授業で実践できる新聞記事を抜粋し、記事の要約、記事から読み取れること、記事の「キーワード」をもとに職員への発問を掲載した。発問への回答を記述し、職員から「キャリア教育だより」を預かり、校長や教頭に目を通してもらった。
- ③「夢サポートだより」（全生徒に配付）
  - ・生徒、保護者向けに発行・・・記事を活用し、家庭で行うキャリア教育
  - ・学力向上や進路・キャリア教育関連の記事を掲載し、学校と家庭が連携・連動して学力向上やキャリア教育を進めていく目的で作成した。家庭で、日頃から「卒業後の進路」「夢を持つこと」「具体的な目標を立てて実行・継続すること」を意識させ、記事のキーワードをもとに、親子への問いも掲載し、回答させた。

## 6. 生徒の変容・成果・課題

(1) 生徒の変容①初めの頃はスポーツ面など興味がある面や写真、広告面ばかりを見る生徒が多かったが、見出しの特徴・リード文の役割など新聞の特性や特徴を教師が説明した後は、他の面も読む生徒が増えた。

②落ち着きのない生徒が少しずつ落ち着いてきた。

③自分で考えず、すぐ質問する生徒が、まず自分で考えてから、その後、友人に質問するようになった。

④ペア学習やグループ学習を苦手にしてきた生徒が小さい声ではあるが、グループでの話し合いや意見交換に参加することができるようになった。

⑤生徒からの質問が増え、意欲・関心が高まり、質問のレベルが上がった。

(例)当初は「全部分からない」という質問から「○○は分かるけど、□□のこの部分が分からない」という具体的な質問になった。

⑥新聞記事や問題文を読むスピードが速くなった。

### (2) 成果

①集中力が高まった。

②時間管理能力が格段に向上した。(タイムマネジメント)

③思考力・判断力・表現力が高まった。

④各コンクール・コンテストへの応募についても、コロナ禍ではあるが、入賞者さらに上位入賞者が出て、多くの生徒が自分のことのように喜んでいる姿が見られた。

また、「第11回しんぶん感想文コンクール」(琉球新報主催)では、県知事賞・優秀賞・入選、さらに学校賞を受賞した。

⑤理由や根拠を自分なりの言葉で具体的に書ける生徒が増えた。

⑥コミュニケーション力、分析力、問題発見力・問題解決力が身についた。

⑦文章を要約して書く、「要約力」が向上した。

### (3) 課題

①職員の温度差があり、新聞を活用することに「難しい」「ハードルが高い」と考えている職員がいる。

②新聞記事の教材化について悩んでいる職員が多いので、空き時間や放課後の時間帯で、協働での教材づくりを丁寧に進めていくことが大切である。

7. 資料（写真・新聞記事）



意見交換後、ワークシートに記入中！



教師も生徒の考えの変容を見取っています。話し合いでは班長が司会進行し、聴き合っています。

# 新聞記事から自分見つけ



キャリア教育の授業で平野俊幸選手の記事を読んで意見交換する生徒たち。3月2日、沖縄市立コザ中

**コザ中 道徳・キャリア教育で活用**

【本報】沖縄市立コザ中学校で新聞を活用した2年3組の道徳、キャリア教育の授業が3月2日に行われて話題となった。キャリア教育は、生徒が将来の進路について考えるきっかけとなる。道徳教育は、社会生活を送る上で必要な力を身に付けること。キャリア教育と道徳教育を結びつけ、生徒の心豊かな成長を促すことを目指している。

授業は、道徳科の授業として行われた。生徒たちは、平野俊幸選手の活躍について、自分たちの経験や考えを話し合った。先生は、生徒の話を聞きながら、適切なアドバイスをしていた。

2022.3.12  
新報 沖縄24

## 北京冬季五輪、言葉のいじめ題材に

【本報】北京冬季五輪の取材記事が、道徳科の授業で活用された。生徒たちは、言葉のいじめについて、自分たちの経験や考えを話し合った。先生は、生徒の話を聞きながら、適切なアドバイスをしていた。

2月25日の道徳の授業は、精神科医の名越康文さんが、中学生時代を振り返り、言葉のいじめを受けた経験について話した。名越さんは、「好きなことに没頭する時間は大切」と話した。

担任の松田美奈子さんは、「新聞記事を読み、自分を見つけていくことが大切」と話した。

琉球新報 2022年3月12日付 市町村29面

# 「いじめは犯罪」

沖縄市立コザ中学校でこのほど、新聞記事を活用した道徳の授業があった。「いじめは最悪の犯罪」の見出しが話題の沖縄タイムス掲載の記事を教材にした。NTR（教育に新聞を）活動の一環。2年3組担任の松田美奈子教諭と日本新聞協会認定NTRアドバイザーの松田美奈子教諭が担当し、29人の生徒が受けた。

記事は精神科医の名越康文さんが中学時代にいじめを受け、乗り越えた経験を語ったもの。「いじめられたらまず逃げて」「好きなことに没頭する時間は大切にして」などとアドバイスしている。

美奈子教諭は「実際にいじめを受けた名越さんだからこそその強いメッセージが見出しの言葉に込められている」と指摘した。

生徒は記事を読んで「自分がいじめられたらどんな態度を取るか」を個々に考えた。グループで意見交換した。コザ中下のいじめ（被害者探し）についても議論。「アブタ・コロナ」時代にも人どうし接するべきかも話し合った。 2022.3.23 9442 教育18

おきなわ  
**NTR**  
コザ中  
生  
経験談から学ぶ



いじめをテーマにしたNTRの授業を受ける生徒たち。沖縄市立コザ中学校

生徒の松田美奈子さんは「見出しを見た時、なぜいじめが『最悪の犯罪』なんだろうと思ったが、いじめで自殺する人もいるから、重いんだと分かった。コザ中にいじめられた人のいじめはおかしい。これからもしない」と話した。

初めてNTRに挑戦した松田教諭は「いじめという重いテーマだったが、生徒たちはしっかりと読み取ってくれた。記事はとても良い教材になった」と語った。 (学芸部・高崎園子)

沖縄タイムス 2022年3月23日付 教育18面



## 新聞を活用した主体的・対話的な活動を通して

沖縄県立具志川高等学校

校長 富里 一公  
教諭 澤 岷 良子

### 1. はじめに

「雲外蒼天」令和3年度、昨年度に引き続き本校が掲げた学校スピリットである。この言葉の意味は、雲を突き抜けたその先には、青空が広がっているということ。転じて、努力して苦しみを乗り越えれば、素晴らしい世界が待っているといたことを指している。このスピリットのもと、この1年間、学習指導に取り組んできた。

本校は、NIE 実践校として、引き続き3年目となり、授業、学校活動において、新聞を活用した新たな取り組み実施してきた。近年、また情報化社会の進展にともない、SNS を活用する子どもたちが増えモラルの低下や人間関係の希薄化が問題視される中で、自分の考えを表現し伝える力を身につけるためには何が必要かを考えた。そこで、子どもたちの周りで起きている地域、日本、世界情勢に興味・関心を持ち社会との繋がりを認識させ、主体的・対話的な深い学びによる授業を実施することで、自身の考えを表現し相手へ伝える力が身につけられるのではないかと考え、NIE を取り入れ、新聞を活用した授業展開の工夫に取り組んだ。

### 2. 実践内容

#### (1) 新聞を活用した LHR・総合的な学習の時間（3学年6クラス）

気になる記事を読み、要約、意見感想を書く。グループ4名で自分が気になる記事の要約、意見を伝え、分野ごとにまとめて貼り出し、クラス全体で共有した。  
授業終了後、自分が気になる分野を見て意見を述べ合っている様子が見られた。



3学年「総合的な学習の時間」全クラス実施  
新聞を読み、要約し、意見・感想を書いている様子

(2) 夏休みの課題【新聞スクラップ・いっしょに読もう新聞コンクール】

本校では、毎年、夏休みの課題として、日頃から社会に関心を持ってもらいたいと、新聞の切り抜き、意見、感想をワークシート記入するスクラップ新聞の作成や、いっしょに読もう新聞コンクール等を応募している。

この記事を選んだ理由と、記事を読んで思ったこと、考えたことを書いてください。150字~200字以内

この記事を読んで、私が知っている猫も元は野良猫だ。大の、おし、かすると殺処分になってしまう猫だ。たがもしおれと考えると、ど、く心は痛い。私はこの記事を見てすぐに寄付しようと思、いの活動も行、ている自治体の管に在りて書いた応援メッセージと一緒に寄付金を送りました。不、だでも殺処分されてしまう猫が減、て欲しいです。

---

家族や友だちなどにも記事を読んでもらい、その人の意見を聞きとって書いてください。150字以内

母は「〇〇」と言っていました。父の意見は〇〇です。

意見を聞いた人 父(母)・兄・弟・妹・姉・祖父・祖母・友人  
その他( ) ※必ずお名前を記入してください

受けとてほしい活動と書いていました。野性の猫でも大切を命で、人間と共存して生きていける社会にな、て欲しいなと思います。この支援が全国的に広がることを願、います。

---

読んだ後のあなたの意見や感想・提案を書いてください。300字~400字以内

普段私は新聞をま、たく読まな、たのですが、今回夏休みの課題という形で新聞をスクラップ、この記事に出会、うことができて嬉、しく思います。この記事に出会、たからこそ、私はこうや、て行動することができま、した。スマホなどのインターネット機器では、自分に関心のある情報を見るのが普通だと思、うので、私も寄付しようと思、うはな、らな、たと思、います。しかし新聞はいろいろな情報が載、ています。ま、と私の他に、たもこの記事に出会、たことをま、か、けに、八重瀬町の自治体に寄付しようと思、う行動した人もま、いるはず。新聞、てす、こ、い、が、と思、いました。今は新聞を読、む若い人は減、りま、す。インターネット機器から情報を得、ている人ば、か、ると思、います。これからは、少、く新聞を読、む習慣を日常生活に取り入、れてお、よ、うか、ら、と思、いました。

### ふるさと納税 保護猫支援

八重瀬町 愛護団体に補助

町が支援するのは、一般社団法人動物愛護の会「アニマル」(八重瀬町)の4拠点、返礼品は、アニマルは、一定額が来、た寄付金で、野良猫に不、妊・去勢術をして元の猫場所に返、す。猫を飼、う一生涯をま、もつこと。猫を飼、う一生涯をま、もつこと。猫を飼、う一生涯をま、もつこと。

町民から野良猫に餌をま、もつ。町民から野良猫に餌をま、もつ。町民から野良猫に餌をま、もつ。

八重瀬町による保護猫活動支援を紹介する「ふるさとチョイス」のページ

いっしょに読もう！作文コンクール 全国奨励賞 2年 遠藤こより

### 森川、梶本さん優秀賞

新聞コンクール 遠藤さん奨励賞

全国の小中高校生を対象にした「第10回いっしょに読もう新聞コンクール」(日本新聞協会主催)の受賞者、受賞者が発表された。県内から優秀賞(小中高各10名)に森川梶本さん(シブヒールズ5年)、梶本森川さん(志志川高2年)、奨励賞(小中高各12名)に遠藤こよりさん(員志川高2年)の作品が選ばれた。

半から、那覇市西の島男、るで、行、れる。(高良利香)

早稲10時半、那覇市の県男女共同センターで、多、く開、れる。県推薦の最、高、の奨、励、賞、を、得、た。 (高良利香)

又、森川(員志川高2年)は、25日付沖縄タイムス、を、ま、も、つ、に、行、動、に、移、し、寄、付、を、し、た、こ、と、を、書、いた。自分も猫を飼、う、て、い、た、こ、と、を、知、り、ら、保、護、猫、が、な、く、さ、い、る、こ、と、を、知、り、ら、ボランティアで保護猫活動をしてい、る、が、ま、も、ら、しい、と、思、っ、た、と、い、う、。記事、を、ま、も、つ、同、じ、よ、う、に、行、動、す、る、人、が、増、え、た、ら、い、い、な、ら、思、う、と、願、っ、た。

情報や会話広がる 全国入賞3人新聞に親しむ

森川梶本さん(員志川高2年)は、25日付沖縄タイムスに「ふるさと納税 保護猫支援」の記事を寄った。自分も猫を飼っていること、ボランティアで保護猫活動をしていること、記事を読んだ感想、新聞をスクラップして新聞コンクールに応募した理由、などについて話した。記者は、森川さん、梶本さん、遠藤さん、の3人を取材した。記者は、森川さん、梶本さん、遠藤さん、の3人を取材した。記者は、森川さん、梶本さん、遠藤さん、の3人を取材した。

### 森川、梶本さん優秀賞

新聞コンクール 遠藤さん奨励賞

全国の小中高校生を対象にした「第10回いっしょに読もう新聞コンクール」(日本新聞協会主催)の受賞者、受賞者が発表された。県内から優秀賞(小中高各10名)に森川梶本さん(シブヒールズ5年)、梶本森川さん(志志川高2年)、奨励賞(小中高各12名)に遠藤こよりさん(員志川高2年)の作品が選ばれた。

半から、那覇市西の島男、るで、行、れる。(高良利香)

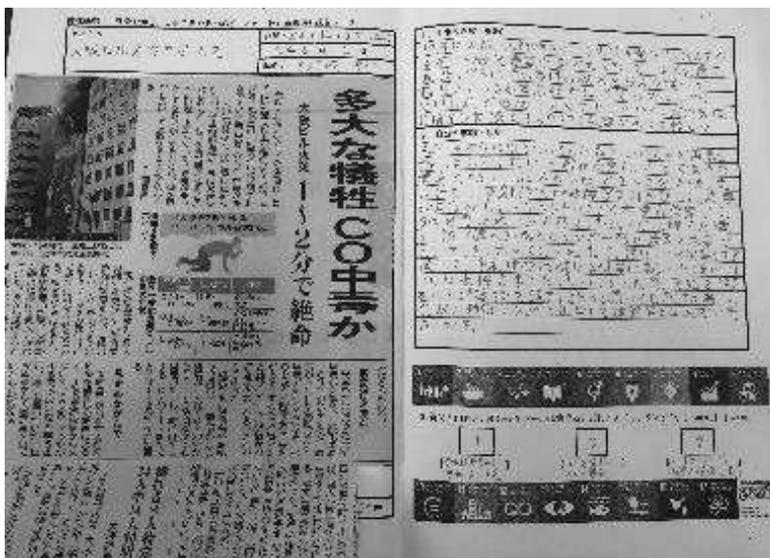
早稲10時半、那覇市の県男女共同センターで、多、く開、れる。県推薦の最、高、の奨、励、賞、を、得、た。 (高良利香)

又、森川(員志川高2年)は、25日付沖縄タイムス、を、ま、も、つ、に、行、動、に、移、し、寄、付、を、し、た、こ、と、を、書、いた。自分も猫を飼、う、て、い、た、こ、と、を、知、り、ら、保、護、猫、が、な、く、さ、い、る、こ、と、を、知、り、ら、ボランティアで保護猫活動をしてい、る、が、ま、も、ら、しい、と、思、っ、た、と、い、う、。記事、を、ま、も、つ、同、じ、よ、う、に、行、動、す、る、人、が、増、え、た、ら、い、い、な、ら、思、う、と、願、っ、た。

沖縄タイムス(2021. 12. 22)

琉球新報(2021. 12. 22)

(3) 授業実践 (2 学年 3 クラス、3 学年 3 クラス実施)



気になる新聞を読み、切り取り、要約する。意見感想を記入し、最後に SDGs の 17 の目標と、新聞の内容がどう繋がっているのかを考えさせる授業の展開の工夫をした。

記入後、グループでその記事を発表し、意見交換をした。

日頃から社会情勢に目を向けている生徒からの、質問があり、その社会情勢について、グループで共有することができた。

(4) 倫理応用

新聞スクラップコンテスト(新聞切抜きの部)佳作 3年 渡口真帆



### 3. NIE コーナーの設置と充実

今年度も、全校生徒が新聞を読めるよう、生徒会室前へ新聞コーナーを設置しイスに座り自由に読み話し合いのできるスペースを設置(図1)

県内版の新聞を分け、今日の新聞の紹介をし、誰でも手に取り、読める新聞コーナーの設置は、3年生をはじめ、全学年の生徒たちの新聞活用の場となった。



令和3年度は、スペースを拡大！！  
多くの生徒が、特に3年生が新聞を手  
に取り読む姿が見られました。  
多くの生徒が、新聞を手に取り、  
読む姿が見られた。

図1 新聞コーナー



図2 社会情勢をピックアップ掲示板

今年度は、新聞コーナーの隣に、掲示板を設置し(図2)、社会情勢をピックアップしたコーナーを作った。衆議院選挙の時期には、沖縄選挙区から出馬する候補者たちの公約を全面で紹介するなど、生徒が社会問題に興味関心を持ち、自分ごととして捉えられるよう意識をもてる工夫をした。

### 3. まとめ

NIE実践校として3年間、新聞を手にとることのできる環境が身近にあり、社会情勢に関心を持つ生徒が多くみられた。特に、3年生は、受験の小論文対策としても活用し、社会を知る手法として多く活用された。今後も、教科書だけの内容に留まらず、学んだことを社会と結び付け、自ら考え、意見を伝えることのできる生徒を育てていきたいと考える。



実践例 1  
読みとき新聞



実践例 2  
歴史を体感しようぜ



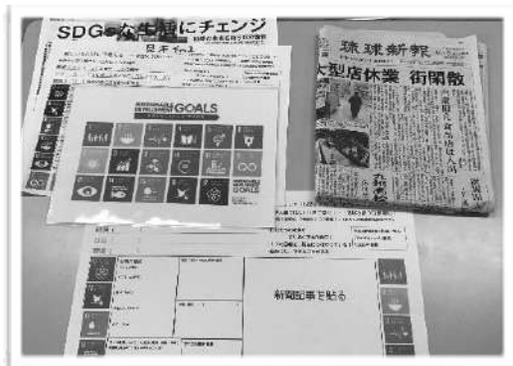
実践例 3  
はがき新聞



実践例 4  
NIEで  
へんなかんじ〜

2021年度 沖縄県NIE推進協議会実践指定校 実践報告  
**NIE REPORT AT HENTONA HIGH SCHOOL**  
 報告者：教諭 宮城通就

1 はじめに



SDGsの基本的知識をNIEで学ぶ

本校は、沖縄本島最北端に位置する高校で県内最小規模の県立高校である。世界自然遺産やんばるの大自然の中にあり、その環境を学びへと最大限に活用するために、平成13年には本県で唯一の専科「環境科」が設置された。やんばるの自然を教材とした活動が新聞紙上で常に伝えられ、本校のユニークな面＝独自性がアピールされている。しかし一方で、これまでの本県の高校入試制度改革（例えば全県区高校の設置等）や地域の過疎化・少子化の進行は本校に大きな影響を与え、本校への入学を支えていた三村（国頭村・大宜味村・東村）からの志願者が激減し、現在に至るまで入学者が定員を大幅に下回る状態が久しく続いている。このような状況を改善し本校のユニークさを少しでも多くの中学校や受験生に知ってもらうために、数年前より「みらい留学」制度への参加や様々な取り組みを行ってきた。しかし、劇的な状況改善とはならず定員割れが続いている状況は、学習者母集団内での激しい学力格差をも生じさせている。また本校は、様々な事情や特性を持った生徒がある程度数入学するため、再チャレンジの場として学び直す機会を与える面もある（学習支援）。このような中で、NIEがどのように力になれるのか（学びに対する動機づけ＝学ぶ姿勢の育成や生きる力をつける支援）、NIE実践1年目の成果・課題などを授業例も踏まえて報告していく。

本校は、沖縄本島最北端に位置する高校で県内最小規模の県立高校である。世界自然遺産やんばるの大自然の中にあり、その環境を学びへと最大限に活用するために、平成13年には本県で唯一の専科「環境科」が設置された。やんばる

学校紹介



沖縄県立

辺土名高等学校

1946年：田井等高校分校

1947年：辺土名高等学校

課程：全日制

校訓

誠・誠を以って己を持し

愛・愛を以って人に接し

勇・勇を以って事に当れ

設置学科：環境科 普通科

学年制 各科1学年1クラス

在校生数 96人 (2022.3現在)

卒業生総数：10,566



報告者作成ワークシート



授業風景

(報告者撮影)



## 2 NIEでちゅ～がなびら

～感じティ 考げ～ティ 語やピラ（伝えユン）～

本校ではNIE実践初年度として「NIEでちゅ～がなびら」という、島くとうばを交えたテーマを設定した（「ちゅ～がなびら」には「お元気ですか?」という意味があり、その意味に絡めNIEという手法を学習者が身近に感じられる言葉を選んだ意図あり）。副題の「感じティ 考げ～ティ 語やピラ～（伝えユン）」は、実際に学習者が行うNIE活動を表す。学習の三要素＝「自己との対話・テキストとの対話・他者との対話」を柱とした活動である。私はこの活動を「学習の三位一体論」と（自分勝手に）名付けた。（右図1）。そして抽象的概念の把握が苦手な学習者が多い本校（学力困難校）における「感じる」は、大変有効な学びの方法であった。

実践研究の目標＝ビジョンについて、結論から言えば「思考停止の人間を作らない」という事である。考えることを諦めない子、考えることから逃げない子を育成することを目標としている。そのためにも彼らに「学ぶ姿勢」を身につけさせることが肝心である。換言するなら「どうにもならない時に、どうにかしようとする行動力を持った人間作り」である。その方法として、教科書や課題学習、体験学習、探究学習などの従来の方法による学習法をより深化・拡充させる手法としてNIEを試みた。

### 実践例1 「読みとき新聞」の活用 【考げ～てい・伝えユン】

読みとき新聞は、小学生高学年向けに作成されたNIE用のワークシートである。本校では「5W1H型」のシートを使用している。授業開始の10分以内から始め、慣れてきた頃には5分程度で記述させている。狙いとしては、①要約力（5W1H）。必須は4W（いつ、どこで、誰が、何を）の記述。②自由記述での論理力（根拠に基づいた考え＝意見）の訓練。小学生向きの記事である上に、漢字には全てルビが振られている。なぜ高校生でもこのワークシートが有効なのかそれは、使用しているシートは同じだが、授業者が（発達段階に



RISO: 「よみとき新聞ワークシート」  
無料配布配信サービス登録で毎週配信される



図1 学習の三位一体論イメージ  
(報告者作成)

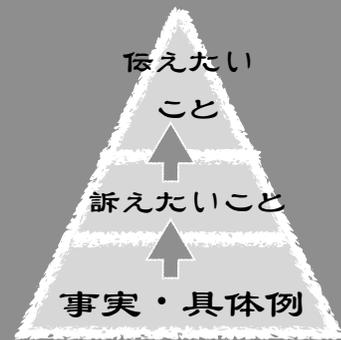


図2 読みとき新聞を通して育成したい力（報告者作成）

### 思考を深めるQワード

なんで？ ほかの考えは？  
もし～だったら？ そもそも  
例えば 立場を変えたら？  
反対は？ あなただったら？  
あえて逆で考えてみよう  
仮説を立ててみよう 前提  
から疑ってみよう 誰かの  
気持ちになってみよう  
具体例をあげてみよう  
似ているところと違うところ  
を整理しよう！

以上のワードは学習者が感想や意見を考える時の「視点」として、投げかけている言葉です。

ETV「Qワードおぼえうた」より

から始め、慣れてきた頃には5分程度で記述させている。狙いとしては、①要約力（5W1H）。必須は4W（いつ、どこで、誰が、何を）の記述。②自由記述での論理力（根拠に基づいた考え＝意見）の訓練。小学生向きの記事である上に、漢字には全てルビが振られている。なぜ高校生でもこのワークシートが有効なのかそれは、使用しているシートは同じだが、授業者が（発達段階に



読みとき新聞を2019年度より使用している。その成果としては、他人事で感想や意見を述べていた学習者たちが、記事の内容を自分ごととして捉え、訴えたいことや伝えたいことで自由記述を結びはじめたことは学習の成果と言える。以下は、本校学習者たちの主な変化（成長）をまとめたものである（表1）。もちろんこの変化の要因は、NIEのみならず「国語の授業における成果」であることにも言及したい。このことから、NIEにおける教科横断的アプローチの有意義性も強く提言したい。本年度は国語表現の授業での意見文を46本の投稿した結果、合計13本が地元2紙に掲載された（2021.4～2022.1現在）。学習者の自己肯定感向上への大きな力になったと言える。次年度も協力体制を続けていきたいと考えている。また、第12回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（主催：日本新聞協会）において高校生部門で「教室が苦手な子へ 学びの場」として意見を述べた本校生徒（梶本 遼太郎君）が優秀賞をいただいたことも、成果の一つとしてあげたい（図3）

自由記述 結びの文言 Before 他人事	自由記述 結びの文言 After 自分ごと
頑張っ欲しいです。 しないと、いけないなと思いました。 → 願いたいです。続けばいいなと思う。	私も参加したいです。 小さな事から続けていきたい。 協力しなければと考えました。
いいなと思いました。 初めて知った。いいんじゃないかな。 →	勉強しなければいけないと気づかされた。 考えていきたい。考えていく。
驚いた。残念だと思った。 大変だなと思いました。 →	大切にしてく。改善できる点がある。 意識していく。問題意識が重要だ。
～かも知れません。ダメだと思った。 気がする。～な気持ちになった。 →	～について見直すことが必要と考える。 ～していくことを決意した。

表1 「読みとき新聞ワークシート」（RISO提供）での学習の主な成果（報告者作成）



図3-1：琉球新報



図3-2：沖縄タイムス

実践例2 「歴史を体感しようぜ！」～日本史におけるNIE事例～ 【感じテイ・語やびら】

日本史の授業：最初の4時間で作成。目的：暗記科目の印象を払拭。マクロとミクロを意識させ、歴史のスケールを体感させる。  
 方法：1000年を10cmとして作成。例えば、旧石器時代時代は1万8000年だから、1m80cmとする。後はグループで決める。  
 令和の後は、NIE活動その1＝最近の新聞記事の見出しで、  
 今の社会を表現してみよう！（図4）

【授業者感想】 ミャンマー情勢、汚染水の海洋放出、コロナ第4波、緊急事態宣言、中国と米国の関係、米警官黒人男性射殺・・・学習者のチョイスは暗いニュース（見出しで表現）。明るいニュースは、核兵器禁止条約発効のみ・・・何か複雑な思いでした。



図4



完成した年表

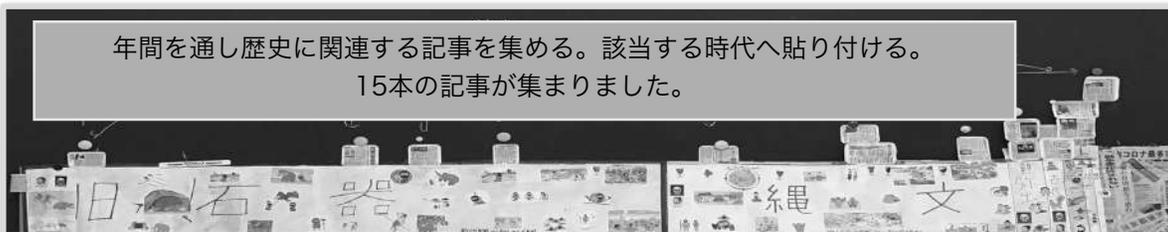
## NIE活動その2

関連する新聞記事を探して、その時代に貼り付けよう！（図5）

期待できる効果 ・新聞に目を通す習慣づけ（学習の習慣化）

・現代社会と関連づけて考察できる→ 読解力養成へ

図5



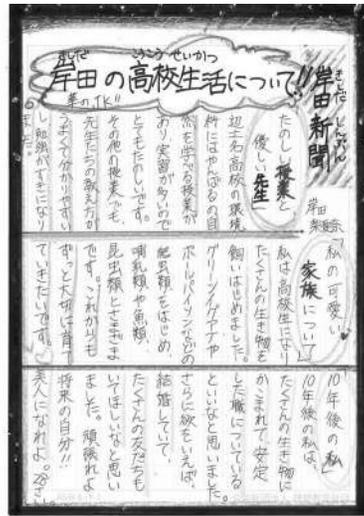
**成果：**次の①②をあげたい。「歴史は暗記科目ではない！」。この点を伝えたく始めたものである。当初は、NIEとの関連づけをせず、ただ単に歴史のスケールを体感させるだけであった。つまり「マクロとミクロ」を意識させ、歴史の連続性が見える化し、物事を考える時は「ロングレンジで！」という程度でしかなかった。学力困難校において、日本史という敬遠がちな科目に対して、（級友との）作業からスタートする授業を用意することで、消極的な気持ちが和らぎ意欲的に取り組んでくれた（特性のある学習者が多い本校では、協働して学習する体験も社会性を身につける重要な時間と言える）。そして、授業途中から「この学習にNIEを組み入れてはどうか？」と思いついた。結果的に成果として、①NIEを導入することにより学習者に「対話」が生まれた。作り終えた後のフリートークで感想を共有し、学習者にそれぞれの「気づき」を発表させた。②年間を通しての役割を与えることで「学習の習慣化」が期待できることがわかった。考古学の発見とかと関連させて教科書では気づけないものを意識させることができたことも挙げられるが、歴史の新聞記事を探していたつもりが新聞の特長である「世の中を俯瞰的に見れる」ことに、ある学習者は気づいてくれたことが最大の収穫と言える。歴史の記事を探しているつもりが、意外な出会い（興味をそそられる記事や出来事）があったのである。この点がネットでの情報収集との最大の違いであり、NIEの醍醐味とも言える。（ネットは「見たい・知りたい情報のみ」の提示。学習に幅や他の事象との関連性が理解しにくいと考える。釣りに例えるなら、1本釣りと言える。一方、新聞は投網である。世の中を多角的多面的側面から情報収集ができる。しかも、その情報は、精査されたものであり記者達によって5W1Hに整理されているのである）。

**課題、**①作業の時間配分である。4単位授業の3時間を作業とし1時間を考察（対話）の時間と予定していたが、トータル5時間のオーバーとなった点（学習者の達成感を重視したため）。次年度は、作業開始の1～2時間はしっかりと学習者の特性を受け止め、的確な指示（それぞれ特性にあった役割）を考え、参加する学習環境の流れを作った後で、彼らの主体的な活動を見守りたい。②新学習指導要領により、「探究」科目が導入される。「探究」科目への移行に向けての準備とNIEの効果をこの1年で試行錯誤することで「探究」や「総合」の見通しをつけたい。

授業者の解説例（学習者への発問など）

問い1：日本列島で生活した人たちの歴史の中では、文字で記録が残されたのは弥生時代の中頃ですが、この年表から何が見える？（考えられる？）。学習者からの回答：《文字で記録された歴史ってごく最近のこと》生徒共回答：「日本の歴史は「縄文時代」がほとんどだ！」「現代・短！」「こんな短期間で環境破壊」  
 問い2：文字がないのに、何でわかるの（知ることができるの？）→「過去の歴史を知るうえで、遺跡や埋蔵品はとても重要」ということを気づかせる。教科書の内容へ導くもあり、そのままフリートークもOK！

### 実践例3 「はがき新聞」～高校生活を振り返る～



学習者作品例1



学習者作品例2

お題：高校生活を振り返る

「はがきサイズ」の新聞でNIEの教育的手法も実践。情報を書き出し、分類し、文章にする過程を体験して書く力を育むことを目的としているNIEです（桃山学院大学教育大学今宮信吾准教授）。今回は卒業式会場への展示を前提とし、保護者や後輩達へのメッセージを「はがき新聞」形式で作成してもらいました。1・2段目には高校生活の思い出。3段目は「10年後の私」というテーマでお題を設定した。見出しや小見出しの重要性（要約力）も理解している作品が多くできた。この企画は、来賓者・保護者の皆さまから好評でした。ぜひあなたの学校でも！・・・行事やクラス開き（新クラスの自己紹介）や新年度の決意宣言など多様な場面で活用できるNIEと認識しています。

### 実践例4 NIEで「へんなかんじ」

新聞からは、社会的課題が見える。新聞は、社会や時代を読み解くカギである。創作漢字で社会的課題を考えてみることを目的とした、名付けて「NIEでへんなかんじ～」（次年度実践予定）のNIE授業を紹介する。「探究」とは「一人一人が自分なりの課題（問い）をもち、物事の意味・背景や人の思い・願いを探りながら、自分が納得できる答え（めざす事柄やそれを実現するための手段）を見つけ出し、それらを駆使しながら問いを更新していくこと」（渡邊巧広島大学大学院准教授：No.775p 14『社会科教育』明治図書）との提言を読んで思いついたNIEである。現実社会にリアルに起きている課題、直面しているかもしれない課題、気づかないうちに巻き込まれている課題を日常生活と結びつけることで、当事者意識（自分ごと）とさせることを目標として、探究科目で活かさないかとの思いで、試験的に現在実践している（前記p15参照）・・・と難しいことを言ったが、コロナ禍での自宅時間で売れているカードゲーム「へんなかんじゲーム（言葉をむりやり漢字1字で表す創作漢字ゲーム）」からの発想の部分も大きいです。



授業者作成見本1：記事の内容を踏まえた創作漢字。



授業者作成見本2：記事の内容を踏まえた創作漢字。

「若」「苦」「支」を合わせて「ヤングケアラ」



学習者作品1：記事の内容を踏まえた創作漢字。「人」「男」「女」を合わせて「ジェンダー」と読む。



学習者作品2：記事の内容を踏まえた創作漢字。自分の「白」、多様性の「多」。肯定の「肯」を合わせて「自分らしく」と読む。



学習者作品3：記事の内容を踏まえた創作漢字。沖縄の「沖」、足枷の「枷」で「べいぐんきち」と読む。



⇨ICTを使ったNIE

1ヶ月の1面を写メし、動画に編集。「見比べる」として、違い(新聞って中立?)ってことを考える。

「社会にみられる現実の課題(論争や困難、挑戦)」を取り上げる、「学問文化に繋がる学習課題」を作る。「視点」の中には、人間の思いや願いといった気持ちが含まれる。(略)国家・社会の形成者として児童・生徒に分かって欲しい「教養」や「人類の叡智としての学問文化(人文社会科学の概念や方法)」を学ぶことに繋がる(前記p16参照)という考えも、社会科教師(地歴・公民)の端くれとしての私を動かしてくれた。また、渡邊氏は次のことも指摘する。「問いの構造化」についてである。「どのように、なぜ、どうすべき」というように、問いを構造化し子どもにそのまま問いかけても実感を伴った探究にはなりにくい。子ども自身が「なぜ」と問いたくなるような授業展開(文脈や状況)を仕掛けることが求められる(中略)「子どもの学習課題(問い)の水準を引き上げる「視点や方法」が必要である」とも指摘する(前記p 17)。私の大好きな筒井康隆の小説名ではないが、ただの教師に何ができるのか?このNIE授業「NIEでへんなかんじ～」を通して、渡邊氏の指摘に向かって「頑張ってみよう!」と決意しています。学習者達と楽しくやってみます。その後の報告は、次年度に報告いたします。

### 3 次年度へ向けて

次年度の取り組みとして、柱として考えているのは「主権者教育」である。18歳成人が2022年4月からスタートすることも踏まえ、NIEという手法を用いた主権者教育や情報リテラシー育成の実践を中心に授業展開を考えている。ところで、主権者教育では「中立性」がよく問題となる。現場の教師達は(人事考課制度が現場に導入された後は、特に感じるが)時事問題的な話題や選挙・政治的な話題に対して敬遠がちな傾向があり、若い教師達からは「できればやり過ぎしたい」の印象を受けている。特に本県においては、沖縄戦等をテーマとした平和学習やその後の現在までつながる基地問題についてである。しかし、主権者教育はこの国を支える人間づくり(主権者づくり)でもあり、この国の将来の姿にも深く関わってくる。SDGsの学習の立場からも「未来社会を創造する彼ら・彼女たち」において重要な教育の柱と認識している。

以前の勤務校で「沖縄の新聞は偏向報道だ！」と主張した生徒がいた。そもそも・新聞って「中立」なの？彼の発言をきっかけに、私的な県外旅行や公務での県外出張の際には、必ず地元紙と全国紙を購入することを決めている。2021年12月の福岡出張の際に全国紙を買い集め後日、辺土名高校で学習者と「1面の見出しと社説」を基準として、表現や論調が似ている新聞

のグループ分けをした。結果は、いわゆる、世間一般のグループ分け（各新聞社の評価）と似たような結果となった（図6）。左の方は、一日の始まりをシンボルとする新聞。右の方は、8チャンネルの隣国脅威論をよく主張する……。次年度もこの見比べ授業をやってみようと考えています。ところで、主権者教育（政治的問題等）を敬遠しがちな先生方へ、2022年2月26日にオンライン形式開催された「第5回NIE教育フォーラム 主権者教育のこれからとNIEの可能性」（主催：一般社団法人日本新聞協会）でのパネリスト鈴木謙介関西学院大学准教授のアドバイスを以下紹介いたします。

「丸山眞男氏の『日本の思想』を思い出してください。国語の教科書にもよく出るので、読んだ経験があるかもしれませんが、評論の部分「『である』ことと、『する』こと」から考えてみませんか。政治的に「中立であること」と「中立であろうとすること」は違う。「中立であろうとすること」が大事である」との趣旨のアドバイスがありました。これから主権者教育を実践していく上で、たいへん参考になる提言と考えます（図7情報リテラシー授業 衆議院選挙後の地元2紙見比べ）。先日、読売新聞大阪本社が大阪府と「包括連携協定」を結んだというニュースを読んだ（2022年1月28日内田樹研究室ブログ）。その後

に頭に浮かんできたのが、戦前の信濃日日新聞の桐生悠々さんです。新聞社も確かに「経営」という側面が大切であると理解しているが、このニュースから何かモヤモヤ感が湧いてきました。これからの日本の民主主義が心配です。ウクライナ情勢からのアジア安全保障論に関するメディアの伝え方もその不安要因の一つです。【桐生さんのことを詳しくは知りたい方は、「そしてメディアは日本を戦争へ導いた（半藤一利、保阪正康 / 文藝春秋）を、ぜひ一読ください】。

今のご時世、教師（学びを教える者）でさえ新聞を購読している者も少なくなり（以前「え？まだ新聞取ってるんですか？ネットで十分じゃないっすか？」と言われた経験あり）、新聞購読者数は毎年激減の傾向である。しかし、まだまだ新聞というものは「世論を形成する力」「現代社会の諸課題を繋げ、課題の解決・改善方法のヒントを得られるもの」と信じている。教育現場で教える立場である者でさえ新聞購読者は激減している。いわんや、学習者の家庭購読率は……。だからこそ、学校現場では「学びの手法の一つであるNIE」の機会を確保・実践し、学習者へNIEを経験をさせることは、子どもの学び（人生の可能性を拡げる支援）として十分に力となる学習方法である考える。単元内容の導入や深化に止まらず主権者教育や総合的探究学習なども含め、NIE的学習法は学ぶ姿勢を身につける（思考停止にならないため）には、必要不可欠な方法であると考えている。

次ページには本校（辺土名）生徒達のあるアンケートに対する回答がある。【2021年12月～2022年1月実施：対象生徒：1年環境科（16名）1年普通科（7名）2年環境科（14名）2年普通科（6名）】

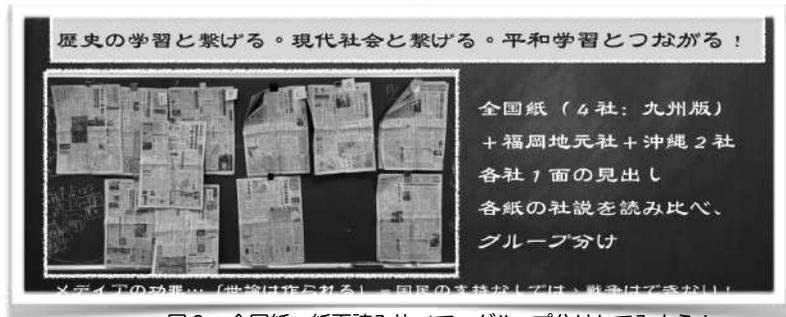


図6 全国紙、紙面読み比べて、グループ分けしてみよう！

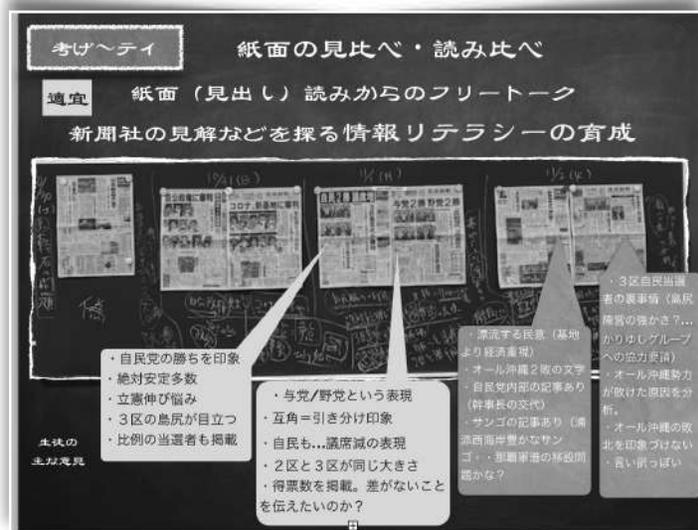
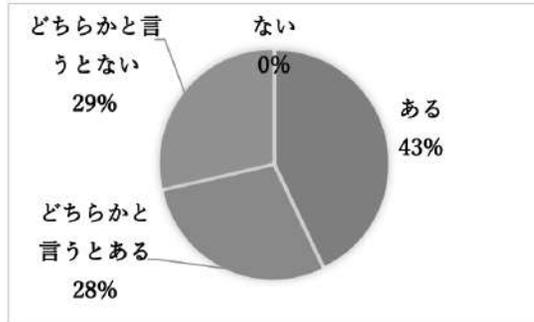


図7 衆議院選挙前と後のしんぶん（地元紙）を見比べた。地元2紙でも、学習者の表現の違いから、何かを感じていた。

アンケートの内容は、政府の教育再生実行会議における2019年に日本財団が調査した「国や社会に対する意識調査（世界9カ国の17歳～19歳描く1000人の若者対象）」での質問項目です。その中のいくつかを辺土名高校の生徒達も答えてもらいました（図8、図9）。【参照：『学校ってなんだ！日本の教育はなぜ息苦しいのか』著：工藤勇一 鴻上尚史 講談社現代新書 p 98】

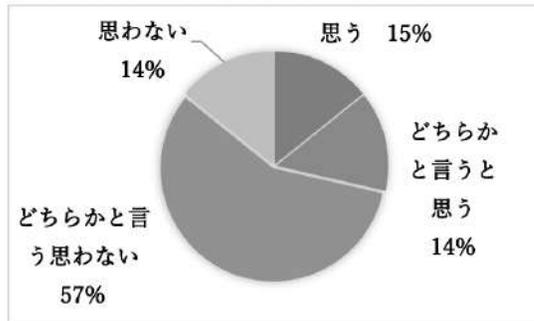
図8-1 1年：普通科

Q13 自分の国に解決したい社会課題がある。



(日本：46.4% 9カ国中最下位 MAX：89.1%インド)

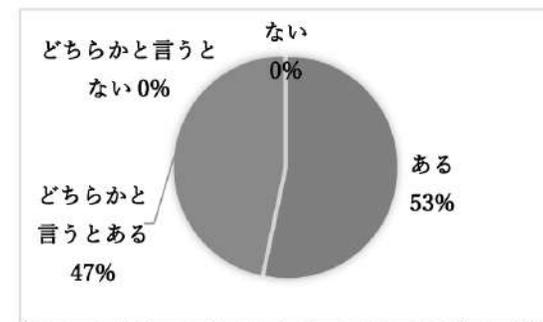
Q14 自分で国や社会を変えられると思う



(日本：18.3% 9カ国中最下位 MAX：83.4%インド)

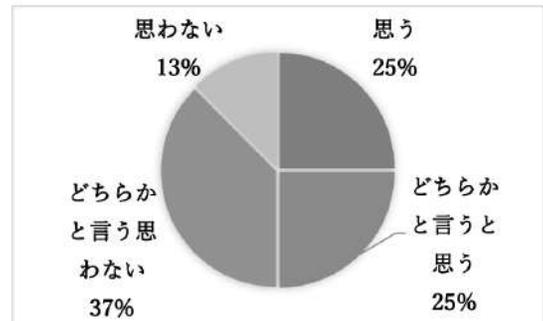
図8-2 1年：環境科

Q13 自分の国に解決したい社会課題がある



(日本：46.4% 9カ国中最下位 MAX：89.1%インド)

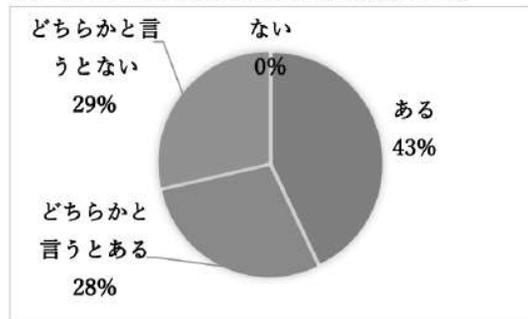
Q14 自分で国や社会を変えられると思う



(日本：18.3% 9カ国中最下位 MAX：83.4%インド)

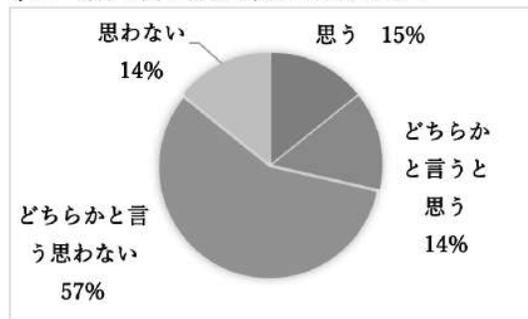
図9-1 2年：普通科

Q13 自分の国に解決したい社会課題がある。



(日本：46.4% 9カ国中最下位 MAX：89.1%インド)

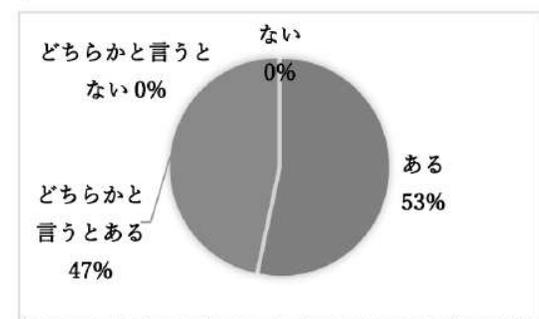
Q14 自分で国や社会を変えられると思う



(日本：18.3% 9カ国中最下位 MAX：83.4%インド)

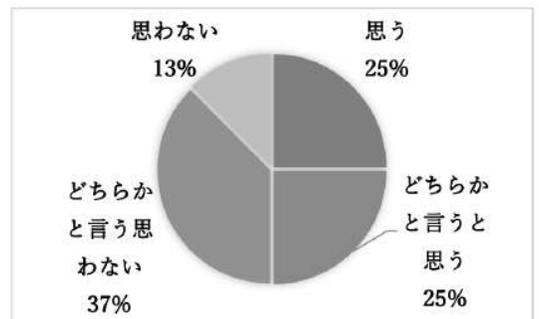
図9-2 2年：環境科

Q13 自分の国に解決したい社会課題がある



(日本：46.4% 9カ国中最下位 MAX：89.1%インド)

Q14 自分で国や社会を変えられると思う



(日本：18.3% 9カ国中最下位 MAX：83.4%インド)

アンケート結果から、Q13「自分の国に解決したい社会課題がある」に対して、平均で85%以上の生徒（ある・どちらかと言えばあるに回答した割合は、1年普通科（71%）環境科（1100%）2年普通科（83%）環境科（86%）が解決すべき社会課題の存在を認識している一方で、Q14「自分でこの国や社会を変えられると思う」の質問に対しては、1年普通科（71%）環境科（50%）2年普通科（67%）環境科（65%）となり、消極的回答（思わない・どちらかと言うと思わない）の平均は63%となった。主権者教育を実施する上で、重要な意味をもつ事前資料となった。地歴・公民での授業はもちろんのこと探究学習や特別活動（生徒会活動）、生徒の学校生活全般をも含んだ全領域でNIE的手法を柱とした学習を実践し、Q14の質問に対する消極的回答の減少と積極的回答（変えられると思う）の増加を目指すことで、主権者としてのタネを育てていきたい。

## 4 おわりに

2021年度沖縄県NIE実践指定校初年度の主な実践を報告をしてきた。まだまだ、ご紹介したい実践がある。例えば、ICTとNIE、「時事絵日記」（絵日記風に時事問題を風刺しよう）、土地公示価格からの「日本における税制史」の学習、NIE（慰霊の日特別号）での平和学習、メディアの功罪（世論の支持無くして戦争は成り立たない）、ガラスの天井：ジェンダー問題、論理って何？新聞パズルでロンリを体感…などです。私は現在、普天間基地の1Km以内に住んでいます。2021年7月には土地規制法が成立しました。そのような状況下で、私の部屋に私服警官が来ては困るので割愛しました。職質は、昭和が終わる時にたくさん経験させていただいたので（自粛ムードの中で街を徘徊していた私）、もう懲り懲りです。だがしかし、次年度では「時事絵日記」や「平和学習」や「紙面読み比べ」なども実践をまとめ報告したいと考えています（マルティン・ニーメラーさんの詩が私の信条の一つなので、やらずにはいられない・・・）。

「新聞を当たり前にして、当たり前を疑え」（宮城教育大学付属小学校 佐藤拓郎教諭 社会科教育No.755 p48 明治図書）の投げかけをNIE授業展開の指針としたい。生きた教科書と言われる新聞を活用し、学習者の「ガチ（切実な思い）」を引き出すことから「主体的・対話的な学習」が生まれる。それは、学習者が「生きていく力」や「学ぶ姿勢」を身につけることにつながる。そのためにも「授業コーディネイト力」や「読解力を鍛える授業デザイン」、「思考を深める発問力」を私自身に常に問い続けていかなければならないと考えてる。そして最後に「**言っている人の言葉ではない。聴く人の耳が大事である～人の話にしっかりと耳を傾けることのできる子どもを育てるべし～**」（社会科教育No.745 P5）という関浩和氏（兵庫教育大学大学院教授）の言葉を忘れずに、今後も実践を続けていきたい。

（辺土名高等学校 地歴・公民科教諭：宮城通就）

# 2021年度 NIE 実践報告書

ヒューマンキャンパス高等学校

校長：仲地 暁

教諭：當山 由佳

仲村 衿華

## 1.はじめに

本校では、2019年度からNIE実践指定校に認定され、通信制高校初の実践校となる。本年度は認定校として3年目にあたる。当校はスクーリングで全国の生徒と関わる中で、新聞を通して沖縄についての興味関心に繋げるとともに、新聞を身近に感じ、それぞれの生まれ育った地方の新聞にも関心が持てるよう実践をしてきた。インターネットが普及し、生徒が情報収集するには、専らスマートフォンやパソコンを使用し、自分の興味関心のある分野だけという限定的な現状だが、このNIEを通して新聞から広い視野を養っていただけるよう取り組んでいる。

## 2.本校の取り組み

### ①仲地暁校長による新聞を活用した職員朝礼

毎朝オンラインで職員朝礼を行っている。県外出身の職員も多く、沖縄の特性を知ってもらうため、新聞の記事から人物、植物、自然、時事、伝統について新聞の記事を活用しながら紹介している。



2021年6月8日(水) 職朝

沖縄ならではの面白い横断幕の紹介。

県外出身の職員からは驚きの声が上がっていた。



2021年7月12日 職朝

ネーネーズとして活動している卒業生の紹介。



2021年11月10 軽石について。

②授業実践（社会・国語・特別活動）

今年度も新型コロナウイルスの影響により、スクーリングの延期・中止が余儀なくされた。その中で、札幌大通学習センター、秋葉原新学習センター、静岡学習センター、広島学習センター他が11月・12月に本校スクーリングを実施することができた。

(1) 社会（日本史） 授業者：仲村 衿華

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己紹介</li> <li>導入発問をする 例) 戦国時代に活躍した人物と言えば誰？</li> <li>本時の目標について説明する。</li> <li>授業の流れについて説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>この時間は何に注意して学習するか、自分が何をするかを意識させる。</li> </ul>	
25分	レポートの範囲をもと戦国時代の武将についての説明（桶狭間の戦い・三日天下・全国統一）についてのポイントを、キーワードを強調しつつ説明。 <ul style="list-style-type: none"> <li>ワークノートを使用して、戦国時代の流れを時系列で記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各項目の原因と過程・結果について、時代の流れの影響を考察しながら、ポイントをつかませる。</li> </ul>	
15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>織田信長が行った改革について説明（楽市楽座→沖縄の公設市場の記事を使って市場を説明）</li> <li>日本が戦国時代の頃の沖縄について説明（南山・中山・北山・尚巴志）</li> <li>沖縄の伝統やうるま市の闘牛の文化について説明</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークノートを人数分準備</li> </ul>	
5分	記入用紙を回収	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業で気づいたこと、わかったこと等を、数名に発表させる。</li> </ul>	



(2) 社会 (世界史 B) 授業者：島袋 一道

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5分	<p>自己紹介</p> <p>新聞記事を見せながら生徒に向けて学習に向かう心構えを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発問 【人物の拡大写真を見て、この人物は誰か。】</li> <li>・ 本時の目標 【目標：明を中心とした東アジア諸国の王朝の繁栄について理解する。】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新聞記事 (大学講師鈴木先生による学生に向けた勉強法) をもとに知識重点の勉強ではなく、興味のあることをもっと深く考えるための知恵や知識を増やすことの大切さを伝える。</li> <li>・ 導入としてチンギスハンの写真をみせて発問をする。</li> <li>・ 本時の内容が元の衰退後の明の時代であることを意識させる。</li> <li>・ ワークシートを配布する</li> </ul>	
25分	<p>①朝鮮の諸王朝の成立と周辺諸国との関係性について、ワークシートに記入する。</p> <p>②配布されたハンゲルの表をもとに自分の名前をハンゲルで記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ハンゲルがこの頃に制定されたこと、明への朝貢、秀吉の朝鮮侵入などに触れながら補足説明していく。</li> </ul>	
15分	<p>①琉球王国の繁栄についてワークシートにまとめていく。</p> <p>②琉球に関するクイズ (5問程度) に挑戦 ワークシートに記入していく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 明への朝貢や尚巴志による三山統一、中継貿易の拠点として繁栄したことに触れながら補足説明していく。</li> </ul>	
5分	記入用紙を回収	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小さい用紙を配布して生徒に記入させ、回収する。</li> </ul>	



(3) 国語

1. 教材 ・ 県内新聞 (2社) ・ パワーポイント ・ ワークシート

2. 単元設定の理由

- ・ 高校生の新聞購読者数の現状を知る。
- ・ 正しい情報を得るためには新聞は大切な情報源であり、ネットでは知りえない貴重な情報がたくさんあることを知る。

3. 本時の目標

- ア、高校生の新聞購読者数の現状を知る。
- イ、新聞記事を通して、自分の地域との違いを知る。

4. 本時の展開

時間	指導過程	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5分	担当教員の自己紹介	担当教員の自己紹介を行う。 (方言でも自己紹介)	授業に入りやすい雰囲気づくりに努める。	
15分	高校生の新聞購読状況の説明	① 高校生が新聞を「読む」「読まない」の比率を知る。 ② 新聞を読むとどのようなメリットがあるかを説明する。 (新書以冊分の情報が得られる、受験勉強に有効)	普段の自分の新聞とのかかわりを考えさせる。  生徒の興味を引く項目にする。  進路と合わせて新聞の活用の重要性を考えさせる。	
25分	新聞を読んで知ろう	① 「琉球新報」「沖縄タイムス」を読みながら、自分の住む地域との違いを知る。 ② 沖縄についての気になる記事を選び、ワークシートにまとめる	一面や、地域面、お悔やみ情報、テレビ欄の紹介をし、興味をひかせる説明を行う。  沖縄に関する記事に絞ってワークシートをまとめさせる	
5分	まとめ、講評	本時の感想を書く。	机間巡視	

5. おわりに

東京学習センターの生徒が、インスタグラムで注目していた事柄が、今回の授業の新聞記事でより内容が詳細に載っていることに感動し、SNSをより楽しむためにも新聞は意外な効果があることを実感していた。

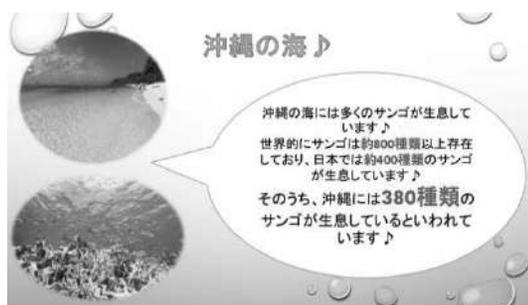


(3) 特別活動

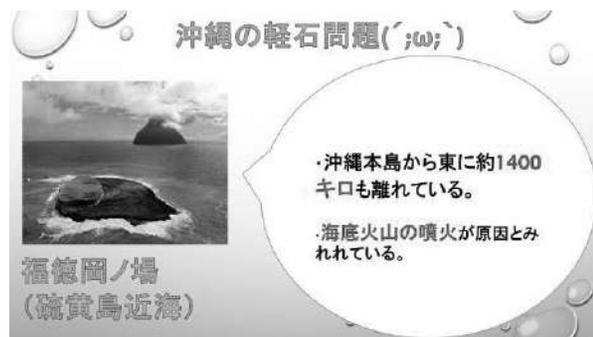
① 県外の学生たちへ沖縄の魅力を知ってもらうため、観光地やおすすめの特産品を紹介。



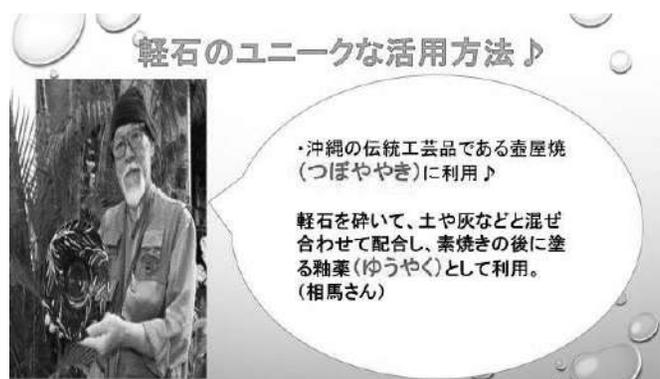
② 沖縄の海について説明



③ 沖縄の軽石問題について説明



④ 新聞記事から軽石の活用方法について紹介。(新聞記事を見せる)



### 3.まとめ

今年度は実践 3 年目ではありましたが、全国の学習センターの学生への授業がほとんどできていない状況にある。観光ができない状況だからこそ新聞に詰まった情報を提示しながら沖縄の魅力を伝え、関心をさらに持ってもらえるように各授業者が工夫し展開している。

次年度も新聞を活用した新たな試みを持った授業を計画してまいります。

## I はじめに

本校は肢体不自由と病弱に特化した特別支援学校であり、主に金武町以北に住所のある児童生徒を対象としている。令和3年度の児童生徒数は24名と小規模の学校であるが、重度重複障害を有する、あるいは医療的ケアを要する子どもたちが全体の半数を占めている。そのため、我々は常に児童生徒の体調の変化を敏感に察知できるよう細心の注意を払いながら授業を行っている。

一方、所定の日課通りに生活できる子どもたちに対しては、個々の発達段階に応じた各教科等の授業を展開しているところである。

しかしながら、移動手段が限定的であり、生活の大部分に介助の手が必要である点は、ほとんどの児童生徒に共通した障害特性である。生活圏が限定的となれば、年齢相応の生活経験は不足しがちになる。日常生活で得られる知識の獲得や人との出会い、多様な価値観に触れる機会も圧倒的に少ない。例えば近所のコンビニに出かけたり、映画館で好きな席を選んだりといった、ごく当たり前の一場面も彼らには得難い日常となっている。障害があることが問題なのではなく、障害があることにより生じる障壁が、学習の素地を生み出す経験を阻むものであると感じている。

本校が教育課程やキャリア教育の視点を整理する際に念頭に置く事柄の一つが、これらの内容となる。その実践の具体的取り組みの小さな一歩として、以下の事例を報告したい。

## II 実践

### 1 『新聞パズル』

#### (1) 対象

文字の読み書きができる  
児童生徒

#### (2) 教科：道徳

#### (3) 学習の流れ

##### ① 準備1

見出しのキーワード  
を隠す。

##### ② 準備2

新聞記事をパズルの  
ピースにカットする。

##### ③ 学習活動1：パズルを作る。

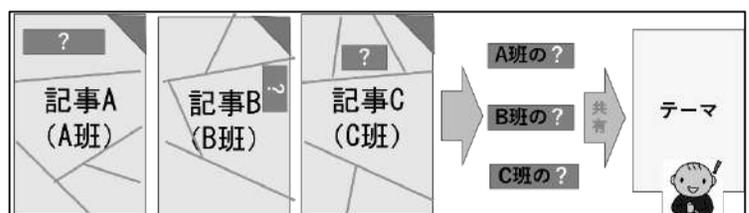
##### ④ 学習活動2：記事を読み、見出しを考える。

\* 複数で行う場合には、共通するテーマの記事をグループ分準備し、各グループの見出しを一覧にして、テーマを全員で当てさせる。

#### (4) ねらい

##### ① 写真からの情報収集力

##### ② 記事から見出しを導き出す読解力



- ③ 見出しやキーワードの効果
- ④ 最新のニュースに対する興味関心の喚起

2 『ちょこっとNIE』

- (1) 対象：全児童生徒
- (2) 教科：全教科等
- (3) 学習の流れ

- ① 準備1：記事や4コマ漫画
- ② 準備2：記事と手書きの問題文による学習プリント
- ③ 学習活動：問題を解く。

(4) ねらい

- ① 記事、写真から、問題文の答えを導き出す力
- ② 最新のニュースや学習の予備知識となる話題に対する興味関心の喚起
- ③ 情報収集力
- ④ 生活や既習事項と結びつけて問題を考える態度
- ⑤ 粘り強く考えようとする態度

ちょこっとNIE NO.4  
令和3年7月10日(月)

医療福祉者 最もつらく  
調査結果 最もつらく感じる職業は「医療福祉者」が最も多く、15.4%を占めた。次いで「接客販売」が12.8%、「接客サービス」が11.5%、「接客接客」が10.5%、「接客接客」が7.9%と続いた。

Q1 最もつらく感じる職業は何か？  
Q2 最もつらく感じる職業の理由は何ですか？  
Q3 最もつらく感じる職業の具体的な仕事内容は何か？  
Q4 この仕事について思っている人はいるか？

ちょこっとNIE no.  
令和3年7月10日(月)

ほんと美しい光...  
中興がイオンスーパーセンターを運営

Q1 これは何ですか？  
A1 朝日98? どちら? 答えと理由をおしえて!!

ちょこっとNIE NO  
令和3年7月10日(月)

Q1 知念さん(この方)は何をされていますか？  
Q2 たいこはなんと書けるでしょうか？  
Q3 50センチのブーヤ、50センチのブーヤ、ブーヤの長さは何センチか？

ちょこっとNIE NO.3  
令和3年7月10日

Q1 記事の中に「」に「」は「」の記号のついでに「」がある。これは何ですか？  
Q2 この記号は「」の記号のついでに「」がある。これは何ですか？

ちょこっとNIE NO.5  
令和3年7月10日

食べたいものある???

Q1 現物料理の名前、言えるかな？ あれ？ 2つ違う料理がまざってるよ！  
イカずみ汁・カチューー・タリたんぼ餅・イラブー汁・牛肉のお汁・むつまじし

ちょこっとNIE NO.2  
令和3年7月10日(月)

Q1 この動物は何のあかちゃん？

### 3 『運動会新聞』(行事の感想文の代替)

(1) 対象：文字の読み書きの前段階にある児童生徒

(2) 教科：国語

(3) 学習の流れ

- ① 準備1：行事の写真(複数枚)
- ② 準備2：見本となる新聞記事の提示
- ③ 学習活動1：行事の中で頑張った場面、印象に残った姿を写した写真の選択
- ④ 学習活動2：写真を選んだ理由を教師に伝える(聴き取りや選択肢を提示しながら)
- ⑤ 学習活動3：伝えたい言葉や内容を写真に置き換え、教師と一緒に文章を作成する。

(4) ねらい

- ① 伝えたい内容を自己決定する
- ② 文字の代わりに写真を使って自分の感想を他者に伝える



沖縄タイムス 令和3年12月7日付



琉球新報 令和3年11月19日付

### III まとめ

#### 1 成果

- (1) 他者(主に教師)との対話を通して問題を解くことで、考えを深めたり、見方を広げたりする様子が見られた。
- (2) 校内の教職員に、新聞活用の実践方法や、児童生徒の課題にアプローチする方法の一つに新聞があるということを知ってもらった。

#### 2 今後の課題

- (1) 児童生徒の課題に迫るだけの実践数には程遠い。次年度はますます教職員への周知を図り、新聞活用により補えるものを共有し、日常的な活用を促していく必要がある。
- (2) 他校との交流学習の際に多様な見方や考え方に触れるきっかけとして新聞を活用する。



【沖縄県N I E推進協議会組織（2021年度）】

- <会長> 仲村守和（元沖縄県教育長）  
<副会長> 与那嶺一枝（沖縄タイムス社編集局長）  
松元剛（琉球新報社編集局長）  
<顧問> 山内彰（元沖縄県教育長）  
武富和彦（沖縄タイムス社代表取締役社長）  
玻名城泰山（琉球新報社代表取締役社長）

<N I Eアドバイザー>

- 甲斐崇（西原町教育委員会指導主事）  
佐久間洋（恩納村立恩納小学校教頭）  
國吉美穂（興南中学・高校校教諭）  
松田美奈子（沖縄市立コザ中学校主幹教諭）  
宮城英誉（名護市立大宮小学校教諭）  
比嘉美保（沖縄県立桜野特別支援学校教諭）  
宮城通就（沖縄県立辺土名高等学校教諭）

<事務局長>高崎園子（沖縄タイムス社編集局N I E事業推進室事務局長）

※事務局は沖縄タイムス社と琉球新報社が2年交代で担当

<会員社>沖縄タイムス社▷琉球新報社▷宮古毎日新聞社（那覇支社）▷八重山毎日新聞（那覇支局）▷朝日新聞社（那覇総局）▷毎日新聞社（那覇支局）▷読売新聞社（那覇支局）▷日本経済新聞社（那覇支局）▷共同通信社（那覇支局）▷時事通信社（那覇支局）

【沖縄県N I E運動の経過】

<1996年（平成8年）>

「沖縄県N I E連絡会」結成

7月25日 第1回N I E全国大会（東京都）。新聞社員2名、県教育庁指導主事2名が参加

<1999年（平成11年）>

日本新聞教育文化財団によるN I E実践指定校に那覇市立松島小、同古蔵中、県立首里東高。※翌年以降の実践指定校は別紙一覧表に掲載

<2000年（平成12年）>

2月26日 県N I E連絡会を母体に「沖縄県N I E推進協議会」設立総会。全国33番目。初代会長に津留健二元教育長。事務局を沖縄タイムス社に設置

7月27日 N I E全国大会（神奈川県）参加

<2001年（平成13年）>

3月16日 県N I E推進協議会総会。津留会長再任

7月26日 N I E全国大会（兵庫県）参加

< 2002年(平成14年) >

4月5日 県NIE推進協議会総会。津留会長再任

8月1日 NIE全国大会(北海道)参加

< 2003年(平成15年) >

3月27日 県NIE推進協議会総会。会長に渡久地政吉元那覇市教育長。事務局を琉球新報社へ

7月31日 NIE全国大会(島根県)参加

< 2004年(平成16年) >

7月 日本新聞教育文化財団が「NIEアドバイザー」制度を発足。県内から兼松力教諭が認定される

7月29日 NIE全国大会(新潟県)参加

< 2005年(平成17年) >

3月20日 「日本NIE学会」が発足

4月27日 県NIE推進協議会総会。渡久地会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ

7月28日 NIE全国大会(鹿児島県)参加

11月7日 初めての「NIE週間」実施

< 2006年(平成18年) >

5月25日 県NIE推進協議会総会。渡久地会長再任

7月27日 NIE全国大会(茨城県)参加

< 2007年(平成19年) >

県NIE推進協議会総会。会長に山内彰元県教育長。事務局を琉球新報社へ

7月26日 NIE全国大会(岡山県)参加

11月10日 「沖縄県NIE実践フォーラム」を初開催(琉球新報社で)

< 2008年(平成20年) >

7月31日 NIE全国大会(高知県)参加

11月8日 第2回県NIE実践フォーラム開催(沖縄タイムス社で)

< 2009年(平成21年) >

4月17日 NIE実践中間報告会(琉球新報社で)

5月9日 NIEワークショップ(琉球新報社で)

5月18日 県NIE推進協議会総会。山内会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ

7月30日 NIE全国大会(長野県)参加

10月31日 第3回県NIE実践フォーラム開催(琉球新報ホールで)

< 2010年(平成22年) >

3月5日 NIE実践最終報告会(沖縄タイムス社で)

3月8日 山内会長、岸本沖縄タイムス社長、高嶺琉球新報社長らが県教育長を訪問し、大城浩統括官にNIEへの一層の理解と連携を要請

4月 財団指定の実践校「奨励枠」に県内から初めて北中城村立北中城小学校、宜野湾小学校（ともに09年度指定）を推薦し、認定される

5月14日 NIEワークショップ（沖縄タイムス社で）

6月1日 県独自指定校制度が発足。協議会が4校を指定し、沖縄タイムス・琉球新報2紙を提供開始。10年度はうるま市立比嘉小学校、豊見城市立豊見城中学校（以上09年財団指定校）、うるま市立石川中学校、与那原町立与那原中学校（以上新規）

6月5日 九州地区事務局長会議・アドバイザー会議（熊本市）に与那嶺功事務局長、兼松力アドバイザー出席

6月29日 県NIE推進協議会総会。山内会長再任

7月29日 NIE全国大会（熊本県）参加

11月6日 第4回県NIE実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）。教育関係者、保護者ら200人が参加した。越來小が国語の公開授業。記念講演は作家の大城貞俊さん（琉球大学准教授）。兼松力教諭（NIEアドバイザー）、古波津聡越來小教諭、山城銀子小祿南小校長、奥村敦子沖縄タイムス社学芸部デスク、佐藤ひろこ琉球新報社教育担当キャップをパネリストに、佐久間洋宜野湾小教諭をコーディネーターにシンポジウム「新学習指導要領とNIE」を行った

<2011年（平成23年）>

2月9日 日本新聞教育文化財団の枝元一三コーディネーターを招いた特別講演会「新学習指導要領とNIE」（主催＝読谷中、喜名小、共催＝県NIE推進協議会）を読谷中学校体育館で開催。村内の教職員ら約120人が参加した

2月10日 金武正八郎県教育長に要請活動。山内会長、中根学沖縄タイムス社編集局長、坂名城泰山琉球新報社編集局長、兼松アドバイザーらがNIE活動への理解と協力を要請した

4月 2010年6月にパイロット事業としてスタートした沖縄タイムス社と琉球新報社による県指定校制度の継続を確認。5校を上限に指定予定

6月17日 県NIE推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

7月24日 NIE全国大会（青森県）。教師・事務局13人、取材記者4人が参加

8月2日 NIEアドバイザー就任要請。山内会長らが4校訪問

9月14日 日本新聞協会NIE専門部会で仲程俊浩氏、佐久間洋氏、甲斐崇氏のNIEアドバイザー認定が了承される

10月17日 日本新聞協会主催「第2回いっしょに読もう！新聞コンクール」の地域審査（琉球新報社で）

11月12日 第5回県NIE実践フォーラム（那覇市立小祿南小学校で）。全26学級で公開授業。保護者600人を含む750人が参加

12月10日 県中学校総合文化祭。中学生が速報発行、両新聞社が支援。NIE展示ブースも設置。11日まで

< 2012年（平成24年） >

2月15日 大城浩県教育長を訪問（山内会長、アドバイザー、両新聞社編集局長）。夏休みの短期講座の開催、全国大会への職員派遣を確認

3月5日 NIE実践最終報告会（琉球新報社で）

4月21日 県NIE研究会発足。教員主体の研究組織を目指す。当面、新聞社主催の講座に合わせて会合を開く

6月22日 県NIE推進協議会総会。地元2社の会費の増額を承認（6万円から10万円に）。他の加盟社の会費増額は次年度総会までに議論することにした

7月30日 NIE全国大会（福井県）参加。県教育庁から職員3人が参加

7月・8月 県立総合教育センターで初の教員向け研修。7月27日に短期研修講座・小学校社会科講座の一部として佐久間アドバイザーが講師。8月3日は中学校社会・高校地歴公民講座の一部として兼松アドバイザーが講師

11月3日 第6回県NIE実践フォーラム（うるま市立中原小学校で）。県教育委員会、うるま市教育委員会の後援を得た。特別支援を含む全学年全学級で公開授業を行い、保護者や教育関係者、新聞関係者計800人が来場した。教師向け、保護者向けのワークショップ（分科会）も開催し、兼松・佐久間・甲斐アドバイザーが講師

< 2013年（平成25年） >

1月20日 教師向けメーリングリスト開設

2月20日 大城浩県教育長を山内会長らが訪問。全国大会への職員派遣、行政主催の研修へのNIE採用に謝意を述べた

3月6日 実践報実践報告会（琉球新報社で）。協会指定、県指定10校のうち9校が報告した

4月 県立総合教育センターの出前講座にNIEが開設。甲斐崇研究主事（NIEアドバイザー）が担当して校内研修や児童生徒の授業に対応開始

5月11日 教師向け研修会「第1回おきなわNIEセミナー」開催。昨年度まで新聞社主催だった講座を推進協主催に。原則として偶数月に開催する

5月24日 県NIE推進協議会総会。会費、会則の変更を了承。会費は地元2社10万円から15万円に、全国紙4社3万円から4万円に、通信社2社1万円から3万円に、宮古・八重山2社3万円据え置き。役員では副会長を1名から2名とし、地元紙2社の編集局長を充て、任期を1年から2年とした。再任を妨げないことは従来通り。事務局が沖縄タイムス社へ

7月25日 NIE全国大会（静岡県）参加。県教育庁が前年に続いて職員を派遣し、県内の教育関係者、新聞社関係者らが参加

7月30日 金武町教育委員会が主催する教員研修に4人のNIEアドバイザーを派遣

8月13日 県中頭教育事務所が主催する10年経験者研修の選択研修でNIEが取り入れられ、20人が受講。推進協に講師派遣依頼があり、兼松、佐久間両アドバイザーが校

種に分かれて講師を務めた

1 1月30日 第7回実践フォーラム（県立総合教育センターで）。沖縄市立コザ小学校の4年生、5年生が公開授業。パネルディスカッションは実践校の教員、県教育行政、教育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解説・ワークショップもあった。約150人が参加。※古波津聡沖縄市立コザ小学校教諭が5人目のNIEアドバイザーに承認

<2014年（平成26年）>

2月6日 山内彰会長、玻名城泰山琉球新報社取締役編集局長、武富和彦沖縄タイムス山内彰会長ら7人が県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

3月4日 実践報告会（沖縄タイムス社）12校が発表。ほか2校が紙面発表。県指定校の拡大にともない、過去最大の報告校数になった

5月24日 九州アドバイザー・事務局長会議を沖縄で開催（沖縄タイムス社）。沖縄からは推進協発足の経緯やフォーラム開催などの活動報告、教育センターにNIE出前講座が盛り込まれたことなどを報告

6月28日 6月のおきなわNIEセミナーから、セミナー開催前の午前中に実践教員に呼び掛けて「研究部会」を開催。それぞれの実践を持ち寄り、情報交換

7月31日 NIE全国大会（徳島県）参加。8月1日まで

11月1日 第8回実践フォーラム（県立総合教育センターで）興南中学校の国語の公開授業、授業研究会を行った。約50人が参加

<2015年（平成27年）>

2月13日 山内彰会長、副会長の武富和彦沖縄タイムス社取締役編集局長、潮平芳和山内彰会長、兼松アドバイザー、佐久間アドバイザーが県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

3月2日 実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護市立真喜屋小、興南中学・高校、那覇市立小禄南小から報告を受け、3グループに分かれて報告の内容や日頃の実践について意見交換

5月19日 県NIE推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

6月25日 山内彰会長、甲斐崇NIEアドバイザーらが北中城村教育委員会に森田孟則教育長らを訪問。地域連携型のNIEの推進について意見交換

6月27日 NIE研究部会を開催。佐久間洋NIEアドバイザー、松田美奈子美東中教諭が記事を使った道徳の授業について実践報告。15年度から研究部会の開催を定例化し、教員らの実践内容の共有、意見交換の場とすることを確認した

7月30日 第20回NIE全国大会（秋田県）に、山内彰会長ら教育関係者7人と新聞社関係者9人の計16人が参加。「『問い』を育てるNIE思考を深め、発信する子どもたち」

をテーマにしたパネル討論や公開授業、実践発表などを通して論理的思考力など「21世紀型学力」とNIEの取り組みを学んだ

9月9日 日本新聞協会NIEアドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈アドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈子美東中教諭が認定

11月12日 日本新聞協会実践指定校の那覇市立城北小学校が11月のおきなわNIE月間に合わせ、4年（総合学習）、5年（道徳）、6年（国語）の公開授業を同校で行った

11月26日 第6回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、小学生部門の最優秀賞に北中城小6年の瀬底蘭さんが選ばれた。同コンクールの最優秀賞は県内初。奨励賞3人、優秀学校賞に大里南小が選ばれた

<2016年（平成28年）>

2月16日 山内彰会長、潮平芳和琉球新報編集局長、武富和彦沖縄タイムス編集局長の両副会長らは県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問。教育行政とのさらなる連携を確認した。いっしょに読もう！新聞コンクール最優秀賞の瀬底蘭さんの受賞も報告した

3月1日 2015年度の実践報告会を琉球新報社で開催。日本新聞協会NIE実践校のうち本年度で実践期間が終了する城北小、大里南小、興南中・高校がこれまでの取り組みや成果を報告した

5月28日 県NIE推進協議会総会

6月18日 NIE研究部会を「NIEカフェ」として、ケーキやコーヒーの出る飲食店で開催した。原則毎月第3土曜日の午後2時から開催し、教員が参加しやすい環境にした

8月4日 第21回NIE全国大会（大分県）に、山内彰会長ら教育関係者9人と新聞社関係者が参加。パネル討論や公開授業を通し、大分や各地の事例や手法などに理解を深めた

11月4日 県NIE実践フォーラム2016（沖縄市立室川小学校で）。おきなわNIE月間（県教育委員会後援）の中心行事として開催。2、3、6学年（計3クラス）の公開授業や全体会を行った。約120人が参加

12月10日 第22回県中学校総合文化祭で中学生が速報を発行し、両新聞社が支援した。NIE展示コーナーも設置し、実践校や新聞社の活動を紹介。11日まで

<2017年（平成29年）>

3月1日 実践報告会（琉球新報社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の室川小、県立森川特別支援学校が報告発表を行った

4月20日 山内彰会長、副会長の普久原均琉球新報社編集局長、石川達也沖縄タイムス社編集局長、佐久間アドバイザー、石川アドバイザーらが県教育庁に平敷昭人県教育長を表敬訪問

5月26日 県NIE推進協議会総会。共同通信社の会費増額を承認（3万円から4万円に）。事務局が沖縄タイムス社へ

5月27日 本年度最初のおきなわNIEセミナー。新聞協会主催の「いっしょに読もう新聞コンクールを授業に組み込む」（佐久間アドバイザー）。その後、6月はこども新聞沖縄

戦特別版の活用方法（松田アドバイザー）、11月は「はがき新聞作り」（プール学院大学の今宮信吾准教授）、2月に「NIE年間計画の立て方」（石川アドバイザー）を行った

8月3、4日 NIE全国大会名古屋大会に山内彰会長、蔵根美智子前室川小校長、松田美奈子アドバイザー、金城治・県立総合教育センター研究主事、宮城英誉・緑風学園教諭、比嘉美保・森川特支教諭、内山直美・糸満中教諭、地元新聞社員が参加した

12月9、10日 「第23回県中学校総合文化祭」（沖縄市民会館など）で、沖縄タイムス、琉球新報の移動編集車両（ワラビーGO!、りゅうちゃん号）を活用し、大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した  
<2018年（平成30年）>

1月17日 名護市教育委員会の後援を得て、実践指定校の同市立小中一貫教育校緑風学園でNIE実践フォーラムを開催。朝のNIEフリートーク再現、5年生の社会、1年生と8年生（中学2年）合同の国語の3本の授業を公開。小中一貫校らしい異学年の学びの蓄積を他校教員、保護者らに見せた。学校の取り組みを振り返る全体会も行った

3月8日 2017年度の実践報告会を那覇市の沖縄タイムス社で開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の高原小、美東中、興南高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が3グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

5月10日 緑風学園の宮城英誉教諭がNIEアドバイザーに認定。北部地区での教師ネットワークづくりへ

5月26日 6年目の「おきなわNIEセミナー」スタート。この日は「話す力・書く力を育てる指導法」をテーマに佐久間洋、宮城英誉両アドバイザーが講師。その後、6月「切り抜き新聞」（甲斐崇アドバイザーがメイン講師）、12月「はがき新聞」（講師は桃山学院学院教育大学の今宮信吾准教授）を行った

5月31日 県NIE推進協議会総会。会長に仲村守和元県教育長を選出。山内彰会長は顧問に就任。6月4日に新旧会長が平敷昭人県教育長を訪問した

7月26、27日 NIE全国大会岩手大会に宮城英誉アドバイザー、比嘉美保桜野特別支援学校教諭、宮城通就宜野座高校教諭、蔵根美智子放送大学沖縄学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した

8月4日 実践資料集（仮称）制作のため、編集委員会を結成し、8、9、10、翌年1月に会議。編集作業を進めた

10月9日 県教育庁の県立学校教育課、義務教育課から各1人の指導主事を推進協の幹事に任命

11月8日 比嘉美保桜野特別支援学校教諭がNIEアドバイザーに承認された

11月12日 糸満市立糸満中学校でNIE実践フォーラム開催。数学、英語、国語、理科で公開授業を行った

12月8、9日 「第24回県中学校総合文化祭」（うるま市民芸術劇場など）で、沖縄タイムス、琉球新報の移動編集車両で大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東

中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

< 2019年（平成31年） >

1月7、11日 仲村守和会長が沖縄タイムス社、琉球新報社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。7日には平敷昭人県教育長を訪ね、学校図書館への新聞配備状況の調査を要請した

3月15日 2018年度の実践報告会を那覇市にて開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の糸満中、宜野座高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が3グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

4月6日 NIEカフェ開催。4月20日、7月、9月、翌年2月、3月とアドバイザーの先生たちと実践と実践資料集（仮称）の編集会議を開催

5月7日 県立辺土名高校の宮城通就教諭が日本新聞協会のNIEアドバイザーに承認された。

5月25日 7年目の「おきなわNIEセミナー」がスタート。「簡単にできるNIE入門編」（宮城英誉教諭が講師）を行った。その後6月29日に「簡単にできるNIE～特別支援教育向けと他校種への応用」（比嘉美保教諭が講師）、10月19日に「時事カルタ」（宮城通就教諭）のセミナーを実施した。11月2日は、桃山学院教育大の今宮信吾准教授による「はがき新聞づくり」をセミナーの一環として開いた

5月29日 沖縄県NIE推進協議会総会開催

5月31日 仲村守和会長ら3役が沖縄県教育庁を訪れ、県立学校教育課の石垣真仁指導主事と義務教育課の山内かおり指導主事の2人を沖縄県NIE推進協議会の幹事に任命

8月1、2日 NIE全国大会栃木大会に、仲村守和会長、宮城英誉アドバイザー、佐久間洋アドバイザー、宮城通就アドバイザーと実践指定校の古堅南小学校から教諭11人、藏根美智子放送大学学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した。

11月12日 読谷村立古堅南小学校でNIE実践フォーラムを開催。2年、3年、5年の公開授業のほか、秋田大学大学院特別教授の阿部昇氏の講演会も実施

12月7日 「第10回いっしょに読もう！新聞コンクール」の初の地域表彰式を那覇市の琉球新報社で開催。

12月7、8日 第25回沖縄県中学校総合文化祭（浦添市のアイム・ユニバースてだこホールなど）で、琉球新報、沖縄タイムスの両社がそれぞれ移動編集車両で大会の速報作り作りに協力した

< 2020年（令和2年） >

1月7、8日 仲村守和会長が琉球新報、沖縄タイムスの両社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。また平敷昭人教育長を訪ね学校図書館への新聞配備を要望した

6月2日 仲村守和会長、与那嶺一枝副会長、松元剛副会長が金城弘昌県教育長を表敬訪問。県立学校教育課の石垣真仁指導主事、義務教育課学力向上推進室の平良一指導主事を幹事に任命した。

6月16日 県NIE推進協議会総会開催。仲村守和会長の再任、山内彰顧問の再任が承認された。

6月 「すぐに活用できるNIE授業実践資料」が完成。県内の全小中高校、特別支援学校のほか、教育委員会など関係機関に配布した。

11月22日 NIE全国大会東京大会。新型コロナウイルス感染拡大のため、初のオンライン開催となった。

12月19日 「いっしょに読もう！新聞コンクール」地域表彰式を琉球新報本社で開催。全国奨励賞5人、地域表彰6人のうち、8人が出席した。

<2021年（令和3年）>

1月20日 実践校の一つである糸満中学校で「沖縄県NIE授業研究会」開催。校内研修として4教科の公開授業が行われ、アドバイザーが参加し助言を行った。

3月9日 NIE実践報告会を琉球新報本社で開催。日本新聞協会指定の2年目の実践校4校がオンラインで発表した。

4月 沖縄県NIE推進協議会のサイト開設。

4月17日 NIEカフェをオンライン開催。アドバイザーが2021年度の実践計画を報告。

5月22日 第28回おきなわNIEセミナーを沖縄タイムス社で開催。初めて対面・オンラインのハイブリッド形式で行った。15人が受講して、児童生徒の表現力を伸ばす新聞活用法を学んだ。アドバイザーの宮城英誉教諭（名護市立大宮小学校）が講師を務めた。

6月26日 第29回おきなわNIEセミナーを対面・オンラインのハイブリッド形式で、琉球新報社で開催。17人が参加し、新聞を使ったSDGs学習の教授法を学んだ。アドバイザーの宮城通就教諭（県立辺土名高校）、國吉美穂教諭（興南中学・高校）が講師を務めた。

6月30日 県NIE推進協議会総会開催。2021年度活動方針案を承認した。

8月16日 NIE全国大会札幌大会。新型コロナウイルス感染拡大のため、昨年につき、オンライン開催となり、式や分科会の様子がライブ・オンデマンド配信された。

8月17日 県立総合教育センターの夏期短期研修NIE講座がオンライン開催。アドバイザー7人とタイムス、新報の記者が講師を務め、県内の教諭17人が参加。

10月23日 第30回おきなわNIEセミナーをオンラインで開催。11人が参加し、「はがき新聞」の実践方法を学んだ。

10月25日 仲村守和会長、与那嶺一枝副会長、松元剛副会長が金城弘昌県教育長に学校図書館への新聞配備など、NIE活動への協力に関する5項目を要請。義務教育課の植前秀一郎指導主事、県立学校教育課の石垣真仁指導主事に協議会幹事就任を依頼。

11月17日 糸満市立糸満中学校で県NIE実践フォーラムを開催。新型コロナウイルスの影響で昨年は中止となり、2年ぶり。感染予防のため人数制限し、教員ら約30人が参加。英語、数学、社会、家庭の4教科で公開授業が行われた。

1 2月3日 福岡市で開催された日本新聞協会主催「九州ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議」にアドバイザーの宮城通就教諭、國吉美穂教諭、県NIE推進協の高崎園子事務局長が出席。

< 2022年（令和4年） >

2月26日 第31回おきなわNIEセミナーがオンライン開催。県内大学生、県外高校生を含む20人が参加。アドバイザー7人が新聞を活用した実践例を紹介。

2月27日 「第12回いっしょに読もう！新聞コンクール」地域表彰式を沖縄タイムス社で開催。全国奨励賞と県推進協議会会長賞・奨励賞に選ばれた児童生徒9人全員が出席し、表彰された。

3月3日 2021年度NIE実践報告会をオンラインで開催。日本新聞協会指定NIE実践校の西原町立坂田小、糸満市立糸満中、沖縄県立本部高校が実践例を報告。

4月23日 NIEカフェをオンラインで開催。新聞協会指定NIE実践校の代表やアドバイザー約20人が参加して、2022年度の実践計画を報告。

## 沖縄県内の実践指定校一覧

< 2021年度 >

【日本新聞協会指定】久米島町立久米島小学校▽西原町立坂田小学校▽石垣市立富野小中学校▽糸満市立糸満中学校▽西原町立西原中学校▽沖縄県立本部高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】名護市立久辺小学校▽西原町立西原南小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立コザ中学校▽沖縄県立具志川高等学校▽沖縄県立辺土名高等学校▽ヒューマンキャンパス高等学校▽沖縄県立桜野特別支援学校

< 2020年度 >

【日本新聞協会指定】▽石垣市立大浜小学校▽浦添市立牧港小学校▽石垣市立崎枝小中学校▽糸満市立糸満中学校▽県立具志川高校▽ヒューマンキャンパス高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】名護市立久辺小学校▽恩納村立恩納小学校▽与那国町立与那国小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立コザ中学校▽興南中学校▽沖縄県立宜野座高校

< 2019年度 >

【日本新聞協会指定】読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽石垣市立大浜小学校▽浦添市立牧港小学校▽石垣市立崎枝中学校▽県立具志川高校▽ヒューマンキャンパス高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立高原小学校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽沖縄市立コザ中学校▽沖縄県立宜野座高校

< 2018年度 >

【日本新聞協会指定】うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校▽読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽浦添市立仲西小学校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立美東中学校▽興南中学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄市立室川小学校▽沖縄市立高原小学校

< 2017年度 >

【日本新聞協会指定】沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校▽興南高校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校

< 2016年度 >

【日本新聞協会指定】沖縄市立室川小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽興南高校▽県立森川特別支援学校▽沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校

▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽宮古島市立西辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽八重瀬町立具志頭中学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校

<2015年度>

【日本新聞協会指定奨励枠】興南中学校・高校【日本新聞協会指定通常枠】南城市立大里南小学校▽那覇市立城北小学校▽沖縄市立北美小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽那覇市立小禄南小学校

<2014年度>

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校【日本新聞協会指定通常枠】名護市立真喜屋小学校▽興南中学校・高校▽南城市立大里南小学校▽北谷町立浜川小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立伊野田小学校【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立コザ小学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立泊高校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽宮古島市立平良中学校

<2013年度>

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常枠】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽名護市立真喜屋小学校▽恩納村立喜瀬武原小中学校▽興南中学校▽県立陽明高校【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立沖縄工業高校

<2012年度>

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常枠】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽豊見城市立豊見城中学校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校

<2011年度>

【日本新聞協会指定奨励枠】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞協会指定通常枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校【沖縄県NIE推進協議会指定】与那原町立与那原中学校▽豊見城市立豊見城中学校

<2010年度>

【日本新聞教育文化財団指定奨励枠】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞教育文化財団指定】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立

真和志高校【沖縄県N I E 推進協議会指定】うるま市立比嘉小学校▽与那原町立与那原中学校▽うるま市立石川中学校▽豊見城市立豊見城中学校 ※年度末で日本新聞教育文化財団が日本新聞協会と合併

< 2009年度 >

※これ以前はすべて日本新聞教育文化財団指定▽那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

< 2008年度 >

那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

< 2007年度 >

那覇市立銘苺小学校▽名護市立大宮小学校▽糸満市立三和中学校（注1）▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校（注1）座間味村立慶留間小中学校から実践者異動による実践校の変更

< 2006年度 >

那覇市立銘苺小学校▽名護市立大宮小学校▽座間味村立慶留間小中学校▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校▽県立向陽高校（注2）▽県立南風原高校（注2）（注2）実践者の休職などによる指定中止

< 2005年度 >

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立浦添商業高校

< 2004年度 >

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立那覇高校▽県立浦添商業高校

< 2003年度 >

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立那覇高校▽県立辺土名高校

< 2002年度 >

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立中部商業高校▽県立辺土名高校

< 2001年度 >

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立中部商業高校▽県立浦添高校

< 2000年度 >

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立首里東高校▽県立浦添高校

< 1999年度 >

那覇市立古蔵中学校▽那覇市立松島小学校▽県立首里東高校





第26回NIE全国大会札幌大会 オンライン開催

# 「生きる力」新聞で育もう



教育に新聞をどのように活用できるかを考える「第26回NIE全国大会」(日本新聞協会主催)北海道新報社主催が16日、札幌市で開催された。オンラインは「新しい学びを創るNIE」家庭、教

## 「新しい学びを創るNIE」

### 「家庭、教室、地域をむすぶ」

基礎提案は北海道NIE推進 主体的な学習や探究の推進。開会式は北海道新聞社主催。オンライン開催は、北海道新聞社主催。開会式は北海道新聞社主催。オンライン開催は、北海道新聞社主催。



(左から)パネリストの内山佳奈さん、田中賢介さん、古畑理絵さん、高田結菜さん、浜田亮太さん、鈴木桃子さん、鈴木真さん=16日、札幌市(いずれも北海道新聞社提供)



## 時間の層たどり歴史観に

### 基調講演

梯久美子さん  
ノンフィクション作家

世界を語りつづける。その歴史観は、新聞の層たどりに通じている。新聞の層たどりに通じている。新聞の層たどりに通じている。新聞の層たどりに通じている。

## 主体的学習の一助に

### 新聞の存在とは

新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。

## 知識深める存在 ■ 行動の「軸」に

新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。

## 子に「刺さる」 ■ 地域の声発信を

新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。

### パネルディスカッション

新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。新聞は「生きる力」を育む。

分科会 公開授業・実践発表 ▼高校/社会科 ▼中学校/社会科 ▼小学校/道徳科

### アイヌの格差問題学ぶ

先住民族のアイヌが抱えてきた格差の問題に、どう向き合うか。日本社会全体の課題でもあるアイヌの格差問題について、北海道北見市立真駒内中学校の山崎平教諭(中央奥)の授業を公開した。

山崎教諭は、アイヌの歴史や文化について、生徒たちに分かりやすく説明し、アイヌの格差問題について、生徒たちに考えさせる授業を行った。

### 持続可能な観光を考える

中学校社会科では、北海道で必要となる観光の持続可能性について、生徒たちに考えさせる授業を行った。

山崎教諭は、持続可能な観光について、生徒たちに考えさせる授業を行った。

### 目標に向かう姿勢育成

札幌市立南小学校の上杉教諭は、道徳科4年下の授業で、目標に向かう姿勢を育成する授業を行った。

上杉教諭は、目標に向かう姿勢を育成する授業を行った。

### 授業や講演 11月末まで視聴可能

第26回NIE全国大会の公開授業や実践発表などの動画は、開会式や基調講演、パネルディスカッションの動画とともに、11月末までオンデマンドで配信する。視聴申し込みは8月末まで、新聞協会NIEウェブサイト(https://nie.jp/conference)で受け付ける。料金は資料含め千円。問い合わせは日本新聞協会新聞教育文化部NIE担当、電話03(3591)4410。





2021年度沖縄県NIE実践報告書

2022年6月発行

発行 沖縄県NIE推進協議会（会長・仲村守和）

事務局 〒900-8678

沖縄県那覇市久茂地2-2-2

沖縄タイムス社NIE事業推進室内

電話：098-860-3553

FAX：098-860-3484

メール：[times-nie@okinawatimes.co.jp](mailto:times-nie@okinawatimes.co.jp)